64-265
1200501278144
64
265

始

64-265.

川路聖謨文書　第四

目次

一寧府紀事　第三

自嘉永元年正月元日
至同年十二月廿九日

寧府紀事　三

弘化五年正月

○元日　晴　大書院におゐて與力同心鄉同心等ゑ禮をうけ表居間にゐ家來共ゑ禮を受ること例の如し

春到不春寧樂府門前拂地馬還車可憐今日千余里阿母思予爲咄嗟

大江戸のはるやいかにとさしのぼる朝日のかけにまつ忍ふかな

かすか山松の梢の霞よりにほひ初たる朝霞かな

はるのいろをいさ〳〵川のいさみよとみきはにとくる氷なるらむ

あら玉のとしのはしめの初子の日かすかの野への小松ひかなむ

下車如夢又三元可愕揮鞭歲月奔窓外黃鸝肆新曲池頭綠柳舞輕喧閑身欲午徐呼櫛小吏賀年纔集門嘆憶今朝東都在盃衣寵賜浴君恩

○二日　晴　けふは東大寺　御宮中院屋の　御靈屋春日八幡二月堂兩乘之御門主へ參る一乘院は親王御門跡故御盃被下はなし御手昆布はかり也大乘院は御盃被下あり大乘院は帶劔御側ゟ參る時脫劍一乘院は御次より脫劍にて出る○去年いたつらなる悴あるもの勘當のことを申聞るなれ共不聞よつて御仕置歟勘當のことに印形のこと爲致度と之義親より願出しよつて白洲ゟ出しみれは惡黨なから直なる風あるもの也白洲ゟ出ると手をつき居れりわれ尋ぬるは何故にわか前へ出平伏するや聞へぬこと也わけをいへといひしに只如蜘平伏するはかり也汝奉行は可恐もの故にかくするかと聞は然りといへり又問は奉行はいくらもあり父は天下に一人也奉行ゟ三寸頭をさくるこゝろならは親には五六寸も下ケて可然事也奉行と百姓の辨別ある上はこの子わか療治の仕かたあり親父よわか詫る也勘當はゆるさせわか療治はかく也とて同心に嚴敷縛らせて牢へ遣し極惡のもの牢問のあとにゟ骨をいためぬ樣に嚴敷牢問して汝親に勘當せらるゝ上は公へ對したる惡事もあるへし白狀せよもしや惡事なくは以後孝行にするかとて與力に申含めて朝夕親を拜することなといひ聞せし故にいたく恐入たるよし也其次親と一同に白洲ゟ出し親へ拜をいたさせしにをとなしく拜する也われ親にいふは嚴父孝子を出すといふことあり子はいかにも嚴敷すれは父を恐るゝより惡事をせぬこと近くいふに入牢してかれか恐れて今わか前にて汝を拜するかことときの理也汝子を不便におもはゝ以後嚴敷せよかゝるやつ故に教訓の上折檻し万々一過ちにて打殺とも大事なしいかにや嚴敷するやといひ又子にもこのこと汝もよく聞おれといひしに親子共に頻にぬかつく也以前はよからぬ子なりとも今の白洲の躰はしはしなからも孝子といふとも同しきかことしさらは勘當をこの度はゆるせ再ひ不孝になりたらは縛來れといひて引渡やりしに父の喜ひ大かたならす頻になみたを流して子を一人ひろいたりとて深く謝して歸りたり乍去其もの又この正月に惡事されてはならぬ故に大晦日に捕方の同心の廻り序

にかのものゝ宅へ遣せしに兩親も子も榮のことくに成て震ひ居たりよつて奉行の汝か子の正月に成酒をのみあしき遊ひなとしては不濟故に廻り序に見てこよと仰られたれは來れりいかに其後慎めりやいかにといひしに親共いたく忝おもひてわか子以前は既に勘當を願ふによつて其行跡のことは御察し玉はるへししかるに近頃は朝とく起て夜ふくるまて家業に精出し酒のむことの止しはさらにも言はすよからぬ友をも謝絶してめつらしく親にやさしくものいふ也この兩親の歡ひ全くに死せしものゝ再ひ生しに同し難有御こと也やよ怜め御奉行さまはかくまてになさるゝ也若又昔のことくならむには　上ゟ對し不相濟いかにといひしに子も頻に平伏せしかはもしわるくなりたらは忽に來りて召とり行かむ相構て今のこゝろ忘るなといひしに兩親はあな難有とて且なきかつ拜していくたひも禮を申せしと也同心共なほ近邊の風聞を聞しに生れかはりたることくに成しといふよしの書付を出せりこの子わか奉行中よくもたせたきもの也もち

たらはなみの人と成るへし賤女かみるのことく破れし衣をうたかるたならべし如くつきてさゝなみのことく成木綿を新なる衣より大事にするかことくこのものゝことわか奉行中惡事なき樣に嚴敷すへしとおもふも可笑こと也このこゝろを予もおしひろめて大和一國へ及たけれとも仁慈のこゝろたらすして手とゝくましとおもふ也乍去是非につとめて御觸の趣を戴て人別の減せぬ樣勘當ものゝなき樣にすへくとはおもふなり書經にも鞭官刑をなし朴敎刑をなすといふことあり堯舜のみちにても嚴ならすして敎行れぬことあり子產をは惠人と孔夫子の御賞しありしか其政はいかにも嚴敷もの也寛を以人を救ふへきために嚴をする也嚴刑と寛とは下劑と補劑とのことし疾ひをこらす藥なくては人を活すことはならぬ也嚴にみえてよくふわけをして元來の心底へ行てみれは仁心故に人助る也仁慈のやうにて姑息の政をなし末終に刑人の多出來は甘きもの食せて子を煩するに同し一点の私なくてもかくの如しまして評判のため人氣をとる

夜に入講初の式あり
金春清之丞
出る老松
北高砂講の東
用人給人罷出る小書院
出ル五獻目
に其土器を
清之丞に遣
す也奉行
御流なり
て鞭宅と上
土器開き
又弟子あ
り共と酒の
みうたひ初
なるとい
ふ也

ために仁慈めきたることとするは不仁の甚しきものなるへし

○三日　くもり暖氣也　兩三日氷なしけふは大書院は奈良市中之もの共表居間は出入之醫師幷古梅園井戸屋治左衞門菊屋次郎左衞門の類獨禮也其外之出入町人は惣一同之禮を受る表居間二之間用人給人罷出る小書院は宮方御貸附懸り之町人等出るなら東坂西坂之穢多は土間に出る

○四日　微雨　佐久間修理方に申遣たりし内孟子疑問之内旱乾水溢則變置社稷といふこと疑ふへきにあらす土龍を鞭なといふ類ふるき禮をあけられしなるへしといふ再問にこのケ條一篇の主意民爲貴社稷次之君爲輕といふにありて戰國の人民を殘害すること草芟のことくなれは國のもとたる民を重すへし君にもかへかたしといふことを示して時の君をおとろかさむのために辯舌を激烈に振はれしものなるへし其譯は水の出旱のする度に社稷を變置するならは堯に九年の水湯の七年の旱ありし時は堯湯の社稷を變置し給ひしや無覺束こと也旱と水とに聖人の逢玉ひなは必みつからとかめていましめ給ふへしその時に罪を社稷に歸せは聖人にあらす聖人の事ふる所を以社稷に事ラされはつくせりとはせすされは社稷を變置することはあるましきことにてしかるにかゝることを辨して後世の法とせは北周の天元のことき暴厲なる主は却て神社をみたりに可打毀こともあるへしやいかにされ共孟子は漢の孝文孝經と孟子に博士を置せられ唐興りて十三經之内に被加朱文公も四書のうちへ擧られたる賢人の書なから聖典と肩を並らるゝ書なるを其美事はとらすして可疑ことの穿鑿するはわかあしきなるへしといひ遣したり○けふはなら町寺社之禮受る

○五日　晴　大和國寺社之禮を受る

○六日　雪　今夜七種をたゝく順作也わかなの恐悅申上るよしにてのしめ麻にて出わかなにたにさくを添てありとりみれは

こゝろさし松のはいろのはつわかな千と世さかふるきみにさゝけむ

とあり此男俳偖うたをよむ故にかく興せしとみえし也むかしわか七くさ

をたゝくに鈍にして拍子をなしがたくよつてすりこ木にゐ二ッ三ッ敲き
いまた俗をまぬかるゝことあたはすなとへらす口をきゝしを思ひ出て
上ゑ御恩を難有思ふ也

○七日　晴　大書院にゐ春陽ゑ禮を受ること昨年のことしけふは儒者へ
屠蘇を給さするよつて予も酒を用ひたりともに詩を賦しあるはうたよみ
てたのしみ近頃酒一合以上に及へはかならす筆をとりていろ〳〵のくた
らぬ物をかくことたのしみ也遊野郎か新内ふし藩士かうたひの如し夫故
に家來に墨をすらせ置て舊作の詩歌なとを記して居たりしに江戸より御
用狀來り十二月廿六日に新右衞門御勘定組頭次席被仰付同日に銕作留役
當分助被仰付たるよしの書狀にゐ一際ににきはひし也卽坐右ゑ趣兩御隱
居樣ゐ申上新右衞門より書狀ゑ趣等具に入御聽候處新家ゑ轉役内外ゑ世
話新右衞門洪大の世話なりとて御歡ひ大かたならす候われ昔十三歳の時
なるへし石川左近將監か小普請支配たりし時初ゐ逢對に出るとてつぎか

み下を　行道院樣のつくり被下たりいさいなりへ詣よとて其新調肩衣を
着せしに足袋なし紺足袋なとをはきていなり詣せし也（このいなりは北御かち町也いなり）
より歸りしに　行道院樣は御巨燵にいらせられなから汝は少しく書をよ
みぬ評定所留役たらむもしるへからすわか昔世話になりし御代官の菅谷
彌五郎なとも留役より出し人なりしか少々書物をよみしなと仰られき然
ルにおもひもかけす支配勘定出役せし時今の土屋紀伊守世話のよし（此人其頃
まてはしらす吟味役に成小普請奉行になりし時紀伊守の其ことなわれに語りし也）にて評定所書物方當分助といふものに
なり追々御取立にて諸大夫以上ゑ御役とはなれり其緣を引しか新右衞門
も書物方銕作も書物方に成てかくの次第實家の幸三郎迄評定所留役の見
込といふことにゐ先ッ評定所番は被仰付たりき（是は矢部駿河守の了簡也これにて内藤家御譜代とは成れり）
いかなれは兄弟四人みな評定所にゐ身を起しけむ不思義なること也難有
御恩也評定所もし神社ならは月々詣て御恩を謝すへき位のこと也しかる
にこの度新右衞門ゐ被仰渡は別段出精とゑ御事にゐ十ケ年にゐ格式を被

下たり組頭格はわれも勤たり寺社奉行所ゑ握機職實に大役也難有のかき
り恐入たるのかきり也これみな　公儀の御恩内藤家御先祖の德澤の積累に
よるものなるへし評定所の恩を思はゝ公事吟味物等少も我と名聞利欲を
わすれ仁慈を以第一として御奉公すへき也三世爲將は道家のいむところ
といふことを司馬迂もいひたり刑名の事によりて昇るもの鬼神のいまし
めあるへき可恐可慎事也乍去新右衞門か書狀ゑ内にこと〳〵く戒慎恐懼
のことをいひ越たりこれ少々わかこゝろやすきのうち也わか組頭格に成
しとき申せしはわれは勤向組頭格にて一段下りたり久須美轉役にゑ又一
段下りたり以前よりはおもひ切しこと出來さるよしをいひしに脇坂中書
の夫にてわれも安心すると仰られき新右衞門といひ予といひ兄弟同し場
所にゑ出格の御沙汰を受　御洪恩を蒙ること莫太のこと筆になか〳〵可
盡にあらす此上は新右衞門義先便にもいひし宋の張觀參政かいひし勤謹
和緩の四字彌御こゝろあるへし其内此上は和緩の二字第一なるへし勤謹

（原朱書異筆）
ヨキヿチナスマジキトノ御論。庸行。ノ御說子孫ノ以テ服膺スベキ金言ナリ是レ眞正基督敎ノ訓ユル所ニシテ而ソ稱モスルト孔敎徒ノ誤ル所ナリ大凡ソ身ヲ立テ道ヲ行フベシト訓ユルハ至當ナレ𪜈名ヲ後世ニ擧グ云々ト訓ユル𪜈

一字も難捨大切の字なれ共和なくしては御奉公のなりかねて勤向の出來
ぬことあり緩ならすしては勤の字に疵なく出來る也緩の字は躰なくして
よく勤と謹をして無疵ならしぬるの大切のこと也新右衞門なと此上別に
賞せらるゝ御奉公あるへしとは少も不思只　御目鏡不違奉行ゑ賞し損し
なき樣に穩の御奉公のみをいのる也昔人娘を嫁せし時相搆て人の家に嫁
してよきことをするなといひしに娘の不審かりてしからはあしきこと
はといひしによきことさへにせすあしきことをなすへからさる事勿論也
といひしと也おもしろきこと也これ藥をのます藥食をせす朝夕のことに
不養生を少もせぬといふわけ故に至ゑ六ケ敷こと也易に庸言庸行をいひ
書にも庸行のことを專にいへり平日のなにもなき小事をつゝしむのかき
りならては身をもちかぬる也何卒新家ゐもよく出精して人のみぬところ
をよく出精せよと御通し可被下候われ人を選ひあけしこともあれとも留
役は今の豐藤一人也人にたつねられしこともあれ共留役は予につとまら

ハ人チシテ功名ノ奴トナサシムルノ教訓ニ過シテ大ナルニ至チ生スベシ功ニ成名ノ否ハ只々上帝ノ命スル所ノモノナルヲ了解スベキモノトス余多年ノ經閱ニ依テ感ル所アリ茲ニ之ヲ拜書ス

明治廿五年九月　孫温　謹批

すと日々おもひくらしたれは無難につとめしか漸也中々人を選へきことはならすとて斷りし也しかるに弟の二人まて留役になり殊に新右衛門は格式をも被仰付たるとは可悅もこれにかきり心配もまたこれにかきる也調役には大熊佐々木なと選ひし也母上の御悅御尤に奉存也われならへは來其上いろ〳〵のことにて御配慮をかけ恐入居たるに新右衛門か此度の結構にてさそ御悅とおもひ此一事に付ゐは別ゐ肩かるく成たるかことくおもふ也これに附申上るは元來母上の御こと　行道院樣と御一同に格別の御苦勞被遊てわれら兄弟三人を夫々　公儀の御人にはなされし也乍去幸三郎か評定所番たるも大成ことまして新右衛門か結構十二分といふへしわれらの考には高橋の御祖父の武士に孝行ものにて御褒美ことは至ゐ少きことなるに至孝の御聞へありて御褒美の上格式をも被下たるに其御子はみななり出しものなし且五十以上の人なししかるに母上は七十に近く被爲成候ゐかゝる結構を御覽なさるゝは高橋の積善ならすやなとゝも

おもふ也しかるに今又われらか江戸へ結構に轉役して歸りたらは母上の御こと十二分とも十三分とも可申樣なきまゝに却ゐいかゝなるへしやと母上の御ことを又案事奉る也よつてわれは此上決ゐ江戸へ早く歸るへしとの念慮をたちて母上の只御無事のみを夫婦共に可奉祈とおもふは母上におゐても左衛門尉早く歸り候へ逢たしなとの御念慮あるへからすもし其御念慮起らはこれは勿躰なきこと也恐入たること也と急度おなほしめしかえられて其時々に高橋家の御兩親はいかに　行道院樣はいかにと思召出し給ふ樣にと此節此難有ついてに思召を定らるへし御代官なと遠國ゐ參りしものみな十年以上なれとも遠國の奉行に十年以上と申はまれ也其内はや三年はたちぬ今三年と思召なは過しとし月にゐおまち被遊なはさして長きことにはあらしとおもひ奉り候このこと母上の御壽命のくすりさては天道への御事へかたの第一かとこゝにしるす○脇坂淡州の申年月の大小の七絶被遣之かたしけなく候先代中書には我別段ひき立になり

しことにて實に恩父子に近き位のこともありしに今の淡州の御用立れしを聞はよろこひ也中書の天下に響たるはいふまてもなし乍去文藻は今の淡州まさりたりとみゆる也わか御勘定吟味役の御列座の不慮にありし日はわれも　御城に居て中書に逢ひしに其こと密にいはれて近々おもはぬ轉役なるへしとて頻に落涙して支配を放るゝなこりをしみ給ひわれもおもはす格別の轉役よりさしあたり支配を離るゝのなこりをゝしみて頻に落涙せし也ことの序によりて大久保忠眞朝臣なといかなることや龍野のそこもとをは別段にする也恩義を忘るゝなゝと仰られきこともありし也これはよほと驚かるゝまての事ありし時忠眞朝臣の歎して物語れし也この度新右衞門なと結構にもおのつからに中書朝臣の御光りこもり居るわけ也そのこゝろにて新右衞門こと淡州につかへ給ふへし

○八日　くもりさむし　市三郎けふは侍壹人口取壹人にゐ唐招提寺より垂仁天皇の御陵今は蓬萊山と いふ小山也其あたりを歩行て歸り來れり勿論わか馬にのり行たり五半時より九時頃までのうちに乘切て歸り來れり

○九日　晴　俊藏か方の少女來り遊ひ居る汝は春氣にゐそめか俊藏にたかりて寢るをしるやと問へは笑ひなから夫はマア宜しふ御座りますか御前の御つむりにけしからぬ御フケかみえますとまきらす也其才氣に一同おとろく

○十日　晴　五時ゑ供揃にて中院屋の　御位牌所にゐ參拜

○十一日　くもり　けふは具足の祝ひにて與力にゐは手のし盃遣す右ゑあとにゐ與力にゐは目の下一尺の鯛のやきもの用人引之同心は鰤の切身といふ如き段々ありて四ヶ所門番山番まて都合七十人前程の料理出る出入ゑ町人共みな來とりもち給士いたす酒の燗番は井戸やといふ酒やより來りてするといふ類にて仕來夫々あること也實に去年の條にしるせる通也けふは惣門内に犬悦のあと多くあるも仕來也といふ位也われいふ鹿悦といふかもしらぬとてわらひし也○藏書ゑ内に畜德錄といふ官板に水戸殿の御此ケ條御賴申候

自筆仰不怍天云々といふかけ物當年よき序ゑ節御廻し可被下候右は學問所ゐ奉納せむとおもふ也天と人とにはちすといふはこゝろに後闇ことなきよりはしまる也されとも至極の所は聖人ならては出來ぬ也よく知るこをいたさぬと耻へきことをはちぬ也むかしある女緋ちりめむの湯具をつくりて明日はしめて歩行せむとて芝居へ行仕たくをして枕もとへ出し置朝けに出行ときいそかれて忘れて無褌にてやはり緋褌をしめしこゝろにて人みせにもゝのあらはるゝまてにまくりあるきたりわかき女の下帶もなくまくり歩行故に人々狂人なりとて笑ひてみるを女は緋褌を人のみるなりとます〳〵誇良にて高く前をまくり歩行しといふことありわか行跡をよき人にとひ聖賢の書に引あてゝみぬと恥さることに恥へきこと多き也恥をしる一段也恥さること少きにいたりて一段也天にはちぬにいたりて至極なるへし恥をかくすは僞也人にはちぬつもりにてこゝろを欺くはかたり也天にはちぬといふはこゝに一点のはちなきのかきりなるへし人たのみせすして出來ることの事々物々こゝろに少も恥なきは至極は天にはちぬにいたりしかと學問のみち上帝汝に臨かことくするもこゝろにはちす天にはちぬことゝ學問所ゐ奉納して永學問所ゑ手本とせむとおもふ也畜德錄は小學の嘉言を實にせしものにてこれを講釋にせは益あるへしとおもひつきし也

○十三日　雨　けふは兩御隱居樣ゐ年始ゑ御膳差上る父上例ゑ通御機嫌にてわか表ゑ居間にゐ例の唐帋へむた書をして居るうち頻に踏舞の御樣子なりしか果ては醉とくたひれにて這ひて今樣なと御うたひ候計にゐ四ッ頃まて御酒あかり候間如何可有之哉と御案事申上候處翌朝に相成わか槍刀ゑ伎終りしころはや起出給ひて昨夜飯をたへしやけしからす腹へりたり早く雜煮にせよとの御事也酒後煮はなにて三椀被召上たること申上しに驚て御笑有し也今朝は露の酒氣なしといひての御はなし也廉頗か老て一斗の酒五斤の肉を食せしといふにも過給ふかとみな〳〵驚し也

○十四日　晴　けふは家來ゑ妻女共へおさとの屠蘇を振舞ふわか頃日申遣しは女の妬心は七去の内に被載重きこと也と申せしにおさと答に聖人といふもの女ならはよし男故に經書もこれはかりは當にならす周禮に二十七世婦八十一御女なとを定給ひしもいと多かることにゑ父母ならはかくは定めじ周公の心ゑ内可疑なといふ故にけふ妻共に其こときけといひしにみな奥さまは御學者也われらか禮とやらむいふことを定たらむには女房を太切にせよといふことを第一にして妾なとは一人もならぬといひたしなと答へしと也いにしへも周公か女ならはよからむなれとも男の定めしことはと妬婦のいひしことあり陸象山か東西南北を隔數千年を去とも聖人はみな一了簡也といひしかどれ〳〵女の聖人なるへしよく符合せ

○十五日　晴　月次ゑ禮受ること例の如し初瀬の僧正のもとより紀貫之か手向のうたよめといひおこしたり其うたをたにさくに記すにいかなることや手習の小供師匠めきて出來雅致なしおさといふこれは多くの人々のうた集むると聞しめされし故に氣のあらたまりし故なるへしとゑ事故に常に酒一合を喫して唐帋半切に二行一行のものを書みるに行草ましりの書常よりはよきかことしよつて夫をおり〳〵たのしむ故に其傳はいかゝといふ故に只全くに藥の格にて急に一合を如傾にのみしに短尺は細字なれは磊落に過て何分又甚し其勢に乘して又唐帋へ書みれはよろし酒一合のむたのみをして短尺十枚はかり損をせりとて笑ひし也一合の酒かく可醉わけなし一箸のものも喫せす醉を招かむとして俄にのみし故なるへし

○十六日　晴　けふ短尺を書直したり至ゑ小成猪口にゑ藤堂ゟもらひたる養老酒のこときものを五ツのみしに大によろし被頼もの十枚はかり書たり人にもかゝることありや新右衞門なとはいかゝ○御役所ゑ庭其外へ栗梅さくらの苗木を仕立てさくらを五十本はかり苗木の仕立をせり與力

共中位のさくら五六本植たりわれいふ二十四五年の後はこゝにて興多かるへしとゝ考也柿はみなよき實を撰ひてつきたりこれは五六年には實なるへしといふ故にこれも食ては難澁也只のち〳〵の人の爲とて歎息せし也

○十七日　くもり　けふ夕かたより　一乘院宮へ被召候俊藏を召連罷出候へとの御事也俊藏兼ゐふかくかしこみてゐたりしか難有事の可奉辭にあらすとて召連たり去々年來被召しこともあれ共諒闇中或は　大宮御所の御所勞中等にゐいと竹のことは御憚なりし也けふは御樂ありて三曲はかりありし也宮ははしめは太鼓を遊はし樂人窪左近將監箏東大福寺八幡神主上司出羽守笛同人悴しちりき其外坊官二條宰相みうち人等笙しちりき或は曲をうたひなとしたり其内予は平伏して聞こと也けふは別のことなれは宮は御上段をおりさせられて御下段にて御遊ひあり某は御同間其余ゝ人々は御次俊藏はわか後ロノ入側に蜘蛛のことくにへたはり居たりしかし初ゐなとゝ御意を被下たり樂の間に〳〵御酒被下ゐ宮は例ゝ御才氣にて予より御家來末々に至るまて手もち不沙汰に成給ふこと曾ゐなき御ことなれはみな樂の怠屈を御察しありけむ唐帋を出して宮御みつから御筆をとらせられていろ〳〵御認みうち人等も畫かくもあり古文字なとかくもありいろ〳〵也われにも達ゐゝ御意故恐入たれとも御前ゐ出筆とりてけふ召されしことをといふはし書にて

雲の上へつゝく御法の庭に來て千とせをあふく松の下かけ

と唐帋半切へ書たりしに其内宮の御なくさみに帋をおさへなとして居給ひたりけしからす御感にて今一首とありけれはそれより又二首はかりいろ〳〵松の下かけといふことを加へて人もよみわれもよみけり上司出羽守は猿樂をよくするとて舞をまひ或は宮の御笛をしは〳〵遊すうちに舞をもまひし也御うち人共みな朗詠なと歌ふけにも源氏なとのさま也けふは御醫師のことをもかねさる故にわか寺ゐ來る衆徒勝南院宮内をも召さ

れたりこの男二十四貫とやらむある大坊主にゐ私の酒は猪口にては腹へしみす御所様御酌賜れとて薄茶々椀もち出て御酌を願ふ宮けしからぬ興にいらせ給ひて御前なる瓶子をとらせられてつかられしに頻にうちのみしにわれはきのふ夕方に中辻町のかたへ行をみしかいつくへ行しそと御尋也病家へまかてゝと御答申せはわれは醫を業とする故に病家といひて行故にカヽめかいらぬなるへしなと御意ありき（中辻町といふは遊所ある木辻町の近邊也）此勝南院醫の上手のみならす豪まいなる男故獨にて酒のみ又よく御席をとり廻し儒者か詩を吟するを聞て大に笑ひ右や左の御旦那さまと跡にていはすはなるましとて大に笑ていさわか腹鼓を御聞に入へしとて腹を出せしに幕の内の相撲のことき腹にて其はらをうちなから謠ふみな絶倒せり關東ならは卑下なる歌ひものなとなるへき興なれとも詠曲の節にゐことのふきみやうをうたふ位のこと也夫にても興は同しこと也これは實に關東の諸侯なとの深くはつることなるへし宮は夜あくることも更に御いとひなき御本上なれはいろ〳〵辭し奉りしに勝南院駈廻りて御厨の人々を叱りなとして御膳出て逃るかことくして歸りしかやゝ八ッ時はかり也　一乘院宮は大乘院宮々は大成御普請なれと震殿より鴈之間といふ所に行あたりは金はり附も剝落所々雨もりにて御疊やふれ恐入たるさま也御坐之間之金はり附を鹿ののほりはみて仙人の半失しとて頻に御笑にてこの頃はわか居る所こゝかしこ雨もる樣に成たり今少し多くもらはたらゐをつりて名護屋山サとかいふものゝ宅の樣になるへきもいと興あることなるへしなと御意ありていかにも恐入御氣之毒にていかにともなることならはなし奉りたき事とおもふはかり也御才氣ありて温順なる御本上なり御はなしの内に今は　禁裏も近衛鷹司もみな實家のつゝきと成れり誰はすへりて攝家へ參れりなと御意あるにておもへはすへるとこかころひころかりて宮の鴈之間帝鑑之間の大名にならせられて寺社奉行たらは調役の喜ふことなるへしとておさとに歸りていひしこと也歸るさに宮の下されしは

薩州の海苔に九十才とかに成候人の奉りけるといふ壽の字を紅に記せしたゞのもち二ツ御手つから給ひし也關東のさまとはいと〳〵ことそきてものあはれなる御こと也都ゐ宮にては宮は勿論ゑら迄も出るものみな白木にて茶碗也しかるに白木やゝ黄はみてよくみれはしらきかといふはかり成にて宮もものめす也被召上るゝ酒なとよからぬ也まして御家來等ゑ被下酒はかすくさき也夫にこまるとみえて勝南院は酒はわかのむのはとりにやるへしとて手つくりの酒をとせ寄たりわれも夫をのみしに奈良中にもいつくにもあるましとおもふ美酒也米の入用を少も不厭十二分の精品の極也といふ酒一向にいろなく至ゐかろくして湯のことなりされ共いつまても醉といふ也中々賣物にしては引合はぬことなるへし

○十八日　雨　御用日也御用日はしめなといふことなけれは例の通也○けふ御禮に俊藏を差出す　宮よりも參殿ゑ御挨拶ゑ御使被下たりこれ先格也けふ儒者來りし故にいかなれは御坐所ゑ御疊上なと鹿のわるさをするといふは不審とて聞しに實は御雨戸なといふものあるかなきか御人少なれはたつることもなく障子はかり故に障子を破りて所々あさり歩行なれ共勤番の青士なとも居らぬ所多けれは金はり附を鹿の食ふにいたるといふ也御無人のさまおもふへきこと也

○十九日　晴　大に暖氣也○學間所ゑよみ初にならの子供召連て手習師の出たきよしをいへ共こゝの學問所のよみ初は仕來にゐ菊屋又は古梅園の類小玉銀なともち聖像を拜し夫を以少々の酒差出事ゑ由也其例によれは手習師も少々はもち來るへしもちゝ來れは弟子共に割かくへしとおもへは差留置たりしかるに何分にも能出度旨をいふによつて左らは師たるもの弟子一貳人召連能出候樣申聞遣子供の親共いつれもみな子供を差出したかりてならす畢竟は人みせもあり其上昨年の書取に子に學問所の講釋聞するは親の世話かゝる事なるに一向に孝行せぬ樣にては學問は大害たることをいひし書取を與力にわたせしを段々に寫つたえて親共も孝行の

ことにもならむかと頻に出したかりてきかす惣年寄共方ゟ手習師の其旨段々申出るにいたる故にさらは銘々氣々次第にいたし入用かゝらぬ様にと之事にゟ十五才以下は强飯師匠年長者たるものゟ計少々の酒差出ことに成れり夥出へしとて與力共いろ〳〵工夫をしてさて入用のかゝらぬ様にと心を勞する也

○廿日　晴　中院屋ゟ拜禮夫々高福院之　大猷院様　御靈屋ゟ參るもとこゝは大和大納言秀長卿の娘あるかなきかの躰にて尼にておはせしを御覽被遊不便に被　思召ゟ　御朱印二百石を賜ひしより今のことく成し也住尼は六十はかり也　勸修寺宮の御猶子也附弟も同斷にゟ芝山大納言持豐卿の孫にて祖父の余風あるにやうたをよくし書又みこと也と聞也香典二百疋奉るこれ例也予ゟは雜煮菓子を出す末々に至る迄餅を出す也こゝよりさほ山の眉間寺ゟ參るこゝは　聖武帝御陵のある寺也奉行所之祈願所にゟ具足開には銀二枚遣祈禱ありけふも香典百疋也菓子を出すこの寺

至ゟよき眺望にゟ住持純道は東大寺之學頭にゟならにてのうたよみ故にはなしもあり所々の山々にかすみうちわたしたるか遠近によりて厚薄あり雪もまたらなると更にきえしもありて春望いふへからすよつて暫の間いろ〳〵はなしなとして歸れり

○廿一日　くもり　白洲ゟ出る舊臘已來召捕もの吟味七口あり内一口に押込にゟ五人申合候ゟ物不得取ものあり二人にゟ所々押込粥をもらひ並尼寺にゟ錢百文とりしものあり去年廿八日惡事を多見切候ゟ入墨重敲に成大晦日より大賊をなせしものあり前の押込なと風俗取締に拘る故嚴敷申付る積なれ共さて〳〵不便なるもの也かゝるものゆるしてかならむやゆるさすしてかならぬやさて〳〵了簡に不及もの也首に成ものをゆるし遣し二日目に盜するは生質なりや可歎こと也ゆるして良民の大害をする上はゆるすかた不隱德にもなるか也いかゝあるへきかゝるところ敎を受て正理にいたし度もの也されは共押込は押込之御法あり再犯は再犯の御法

あれは犯科の事實に吟味して御仕置にすへきものかゆるすといふは私か
いかゝあるへき
○廿二日　晴　明敎館にて學問はしめあり名代として民藏參拜いたす金
百疋獻備也○よみ初とこゝにては學問はしめをいふもちといかゝ也さ
れ共今日は百人余發會に付能出たりとて儒者育助大悅也けふ着用せよ
とて上下一具遣したり○俊藏方の少女來るわか灸をすへ居るをみて手傳
ふへしといふそれはまた汝には出來ぬ也といひしに私は子供のときより
とゝへ灸居遣したりといふ汝の子供の時はいつ也やと一同笑ふされ共頻
に手傳たかる故に戯に灸をあけさせしによく紙をひろけて振ひたまさか
器の外へこほれしはひろひとりてつゝまやか成事也器の内より羽掃ひを
取出して灸のからを掃はむといふちといやきみなりしかさせみしに一ッ
もいかゝなることなしなか〳〵下女か不器用なるなとには遙にまさりつ
へし五歳の小兒驚たること也俊藏か三里なと去年居遣せしことあるへし

とおもひぬ
○廿三日　あられ並雪　さむさいふへからす惣年寄今日到着也とり落し
ものゝ十日限々便も今日にて十日めにてとゝく
○廿四日　はれさむし　けふは惣年寄の便のもの來るとておさとなと朝
よりまちて四ッ頃より遲し〳〵といふうちに八時頃に用人共所々々書狀
其外を山のことくに持出せりこはけしからす汝らは島やの伴頭のことし
といへはみな笑ふ也これ近頃のことある故なるへし島や京やは飛脚や也
少も可怪事にはあらぬ也さていつれより可見やと如〻山書狀をうちみやり
て夫婦喜ひのうちに又あきれ居たり先母上の御狀よりといたゝきて奉拜
見に御健との御事新右衞門よりの書狀に暮のゆたか成新家々世話いたし
て尙あまりあるに及ふこと可歡のかきりにて新右衞門昨年はことの外に
よきこれ同人は勿論の事といふものゝ母上の御血筋のものは一躰のこと
故にみな母上の御福德なるへし其内新右衞門か書狀々内に頻に愼恐る

ゝのことをいひこしたりこれはわか何よりの喜ひ也かく結構のこと打つとひし時は格外につゝしみ格外に手ひくゝせねはならぬ也われにこの上の望なし御互に慎のみの事也このまゝにて慎みて歸るをまつとは新右衛門か格言なるへし幸三郎よりも書狀其外來る深切の至りよめ再緣のことは其外敬次郎を可引取なといひ越したり新右衛門幸三郎いつれも深切のかきりにてわれは仕合の弟をもちけるよといひて歡ひぬ忠四郎方々も委細の書狀來るおさとの兄弟共ゝ書狀ゝ内に忠四郎も昨年は至ゝよろしく幾之進は隱居して樂に忠四郎方ゝ日々に來り巨燵なとにあたりて忠四郎家の盛に成行を喜ひ忠四郎又大に幾之進を潤ほし遣すよし等聞へてこれも兄弟のうちやはらき老母の歡ひなるへきをわか身に引くらへておもふ也けふのたよりとり〳〵可喜ことのみ也され共母上の御狀をみれは夫婦例の通袂をぬらすこと也夫より芙蓉ゝ間御役人懇意の人々の書狀等一覽いたす七ッ頃にあら〳〵すみたり新右衛門よりよき八丈縞をわれに贈り其外市三郎等迄も筆等を賜ひ母上より思食よせられし鮭魚等其外所々より海苔菓子等來る記すにいとまあらすこゝには難有の二字にこめて余はしるさす所々より來るものゝうちにおさとか方ゝ例の同人の好める書草しありうちに京山馬琴らか作あり二人共わか六七才の頃より帋上の友なれは竹馬の友の年賀に成りしこゝろに成て無用の書は不讀なと常におもふも忘れてよむ也馬琴か九十に近き人なるへきに盲とはなりなから老實なる精しき著述京山か近頃は小兒に誠のこゝろを加へて新奇なることをいふとり〳〵はなし家といふものを呼しこゝろにて六半頃まてよみたりしに忽に八冊はかりよみ畢れり夫々新右衛門より貰ひし筆こゝろみむとて市三郎に墨をすらせてけふ先生方より來りし友野霞舟先生の詩の删正ありて惡詩の御かけにて少々白粉を施し夏蔭先生の直しにてこし折の少々歩行出來ることく成しうたなと取出せしに唐帋三枚ならてはなしといふ夫にゝは多くいたつらかきも出來すとおもひて七言律二枚絶句壹枚をしるせり成ほと

よき筆なり靜晨堂の手際唐筆にまされり近頃文筆のみちひらけ少も唐土に可減とはみえぬ也墨は唐土の膠を用ひて古梅園にて作れ共中々唐には不及なれ共筆はかゝる筆工はあれは唐よりも丁寧にする故一段よきかことしこの人に唐毛の精品を遣はせたらは長たもちするなるへし可惜　友野先生の御朋正をみるに理屈をいひし詩に御褒詞なし郊行又は探花なといひし類の詩には点せらせしものあれ共其内よりやはり理屈の事はかりを書しもおかしき也別帋懸御目候御取捨可被下候人々われに印章をせよといへ共朱にくの類あき常のありし昔かれへ遣し江戸に置來れは印章なし從五位下左衞門尉源聖謨といふことを二ッに刻し肩の所へ押印も何とか主忠臣とか或は士は剛毅ならすはあるへからすといふことを刻すへくかともおもふ也江戸にて佐久間修理にたのまれ書しものに同人印章のことをいひしかとも　日本人は名も印章も古くはあらぬかことくなれは印章はせさりしか修理かみつから刻して聖謨の印其外何とかいひしを二顆くれしか小サ過にて一枚唐帋へ押れすよつて別帋にも印なき也

○廿五日　晴　けふは市三郎劔術の弟子入也松平甲斐か家來也與力共一同の師也われ心ありてなら中は市三郎を與力らか遣ふ流義にせりきのふは市三郎寶藏院へ槍の弟子入に遣したり今の院主は胤懐といふ也伊能先生の祖父の師胤風より四代目也といふ也當時の院主は興福寺の衆徒一藺代なりしか去年よりすゝみて何とかいひし役になりし也市三郎きのふ稽古はしめに行一より十まておさとの世話すること也江戸ならは厄介人同前の妾腹の末子いかにも手輕にて濟へけれ共こゝにては左樣にもならすよつて四ッ供にて給人壹人差添遣したり與力共〻内稽古するもの貳人同心共〻内貳人同樣〻もの内玄關に待合つれ行歸りにも内玄關まて送り來るなとけしからぬこと也弟子入に二百疋これはちと過たれとも仕かたなし郡山の先生には酒肴燒物附にゐ飯を出しこれも二百疋也寶藏院は昨日稽古はしめなるに古格にて狸汁を食するよし也いにしへは眞の狸にて稽

古場に精進はなかりしか今はこんにやく汁を狸汁とてくはするよし也胤懐白き衣にて紫のさし貫を着てたすきにて鎗を遣ひめつらしきこと也といひきのふ市三郎歸りていろ〳〵のこと物語る故にやあ汝か饒舌きゝたくもなし元來汝末子にてわれ九十俵三人扶持ならは必人の方へ行て内々侍奉公するなるへししかるにわれ錯寵にてわれ今かゝる身と成し故にけふの躰也しかるに其　公義の御恩親の恩をは心つかす世間はなしきゝたくもなしわか父　行道院様はわれ新右衛門等を養子に遣し度との御辛苦にて元來御酒被召上事のよしなれ共終にみつから酒めされしことなければ御下戸なりとおもひ居し也わか支配勘定になり妻なと迎てのち御酒被召上るゝをみてはしめて御下戸ならぬことを知れりそれの一ッを以も平日の御慎御辛苦おもふへきこと也新右衛門五六才計なりし時なるへしあるときいさゝか御酒被召ことありそれも銅のあやしきちろりといふものへ入て猪口なとも無覺束ことにてめつらしくうち和らきて御はなしありしことのいはゝ御樂こゝろなるへしと覺居也その時新右衛門か其ちろりを倒して酒こと〳〵くに流失たりされ共別に求給ふ躰もなく酒は夫限に成たり妻子うちより酒被召は只其一度に限れり其余絶てみしこともなしよつて今御養父母様に日々夜々被召上酒いかほとゝいふこともしらせ不奉われも折々のむことのありて祝ひのことある時は女に迄も酒なと遣すときは前の酒器の倒れて酒の流失せしいと〳〵寂寞たりしことを思ひ出ては密になくこと也われらか身はかゝることをみつから經しこと故遠國なとに居ても只難有おもふに汝らにかゝる躰にて幼年のものを暮さするといふは殘念至極也幼年の時より苦勞せねはとし立役にたゝぬとていたくこらしめたりおさと例の氣質故市三郎を取扱ふコト所生に過たりたとへは市三郎か好めるものをおさとの好みなとゝいひてわさとつくり市三郎に食せさするにいたるはしめは予も氣かつかさりしかおさとの食このみ絶てなき女なるにめつらしきことゝおもひて近頃氣の附きて一昨夜

も大に市三郎を叱りし也こゝに來りて市三郎の若殿さま風の取扱めくにはさて〳〵後のことをおもひて當惑する也無余義勢ひといひなからこまるの極也市三郎たるものおさとのこゝろを深くくみはからねは大成罰あたるへしこの頃市三郎とならにて暮すうちはわれ三度々々めしはかりを食し余のものを食すましといひしにさらはおさとも同樣にすへしといふ故に困りて其ことも不被行止しみにいたりし也もとおさとは染か咄にて聞にかくやの香の物を好みなから不器用なる下女を遣ひし時に其手をきらんかと患ひてかくやを余事によせて食せさりしといふ流義故市三郎をよく教さるにはあらねともこゝろ屆き過て市三郎子供故にしらす增長する也このことにて夫婦毎度爭論あり既に江戸母上に可伺といふにいたりしこともある故にこゝに記すこのことは母上よりおさとに御文通ありたきこと也おさと病氣故歟心配すること氣に附くこと以前にまされり畢竟起ては居るなれとも多く巨燵にのみ居るといふわけ故に躰はつかれ氣はます〳〵壯に成ことゝみゆ此ことといかに及異見とも聞かす往々のところいかゝあるへき

○廿六日　晴さむし

○廿七日　くもり　御用日也

○廿八日　晴さむし　此次槍劔被行候に稽古毎朝ありて與力同心共出精する樣子也市三郎も隔日に出るきのふ與力の筆頭の鎌左衞門と仕合をしてひときめに逢歸りて大に憤れり

○廿九日　晴　中院屋に參拜いたす市三郎郡山に家來の彼流義には相應なるものと五分勝負せしとて歎ふ也このほと組に組もの日々の槍劔にて所謂文武々々てよるもねられすといふかことくいか成事にや役所内に與力同心に學問所を取建度由内々目ろみていへ共いらぬこと故にきかぬふりして置たり終に儒者を以咄のことくに其ことをいふ故に其ことのあしきといふにはあらすみな〳〵の出精可歎ことなれ共こゝに一ッのはなし

あり明敎館の日々讀書のもの數人に不過其上小書院にゐ定例の講釋すら聞に出るもの數人に不過しかるに明敎館の外に又一ッの學問所いかゝあるへしや予兼ゐもいふ通學問といふものはいれ智惠にては不參みつからすへきもの也夫故にわれ文武共に世話をせぬ也しかるにかくもみな〳〵出精すること故に申迄も無之わかはむきにするにはあらす御役所永續の文武なるへけれは可喜の至りなれ共二ケ所ゑ學問所はいかゝあるへしとて不承知のよしいひ且わかいふはわかこゝを去りてのゝち奉行ゐいひて又一ケ所ゑ學問所を取立るならは一ッの癈絶を防くこともあるへしとかくはいふといひし也今のことく文武出精のこと三年つゝかは大出來也いかゝあるへきされ共下々よりのおもひ附故に少しは可保やいかに

二月朔日　はれ　ことの外春めきたりけふはいなり祭禮日也（こゝはいっも朔日也）石燈籠一基を奉る並紅梅一本納るこれは元來いなり祭に人のみむ爲に百年の末をおもひて追々にこゝへ梅をうゝる積りなれは也衆とゝもに樂の意にて金に少々の余あらは猿澤の池の邊へ千本の苗を植附へくとおもへともいまた夫にいたらぬ也いなりまつりは庭の物見前にはなを活町人らか奉納する也こゝにて菓もの並赤飯を人々になけ與ふる也この入用よほとのこと也これらに附てもこの前に記せし　行道院樣のことをおもひ奉りて予壹人密に泣こと也このことをしるもの母上新右衞門幸三郎まて也追々知ル人の少なくなりしか可哀こと也川路の家にも井上の家にも人しらぬ大功大御苦勞ありて少も目出度ことはしらす失給ひしは可歎のかきり也かくおもひしかは憯然として樂からす獨表の居間に書をよみて居たり程もなくおさと庭より歸り來りていふ凡の數百人つとひていかにも馬場の邊にきはひたり娘の十三四なるにはした女つきたるか木綿或はふとりの裾もやう振袖なる十四五なる若衆かのしめ染の小袖に袴はきたるなとも二三人みえ關東にまれの姿也といひきいにしへさまなること上かたに

は尙存せる也○武王の殷の紂王の惡をあけ給ふをみるに沈湎とて第一に酒好むことをいひ孟子か禹の大善をあけしも酒のきらひなることをいひたり酒を好めは殷紂の一惡ある也酒を惡めは大禹の一善ある也世に酒ほと可恐ものはなき也予以前は大酒のこともありしか今はのむとも小猪口五ッにかきる又無余義こと又はけふらのことにても一合程より先つは過さすけふ書秦誓をよみ驚ひてこれを記す○父上ひるいなり御參詣侍二人御草り取御附添の用人壹人也日くれて又女共を御つれ被成候ゟ御參詣被成度よし被仰出ゟ用人さふらひ共急に呼あくる俄のこと故御草り取間に不合大にさわくわれは御酒半に御免を願ひて例の通大字をかく其内に酒もさめてます〳〵寂寞也故郷の情並　行道院樣の御不運をかなしむことます〳〵甚し其ことをなら中に知ルもの壹人もなしこれ落涙の一ッ也この日記をしるすころは卓の前にて市三郎は世間はなしおさとは無言同然臺所にては洗ひものゝ音はるかにきこえ御隱居樣の御いひき雷のことし折ふし人定鐘コヲン〳〵

○二日　晴　よほと暖氣也○中野より御構場所ゟ事内々問合來る是も異國同前ゟことに此節驚歎最中なるへし○元家來内藏之介來る境の與力のはなしに日々八過には引しか調物にて毎日夜分に成凌かぬるなといひしよし也定ゟ予ことをはしめ夫よりも甚敷いひしなるへしとて笑ひし也奈良も境も留役より出し類の人曾ゟあらさりし御場所故みな驚へし奉行も異風なることを是と心得居には驚也

○三日　晴　所司代より内々伴金左衛門を以東大寺神人七門源三郎義肩衡と申茶入所持いたし居哉との事聞合する故穿鑿せしに右は足利將軍家義政公より南都稱名寺の僧珠光といふもの拜領し夫ゟ和州古市の城主播州法印といふものへ傳へ夫ゟ源三郎先祖源三次郎名行といふ相傳して近頃まて御老中方等南都御巡見ゟ節は入御覽來し候處當源三郎貧窮にゟ賣拂度由奉行所ゟ屆出南都ゟ名物に付東大寺にゟ世話いたし取留置候樣奉

行所にゐ聲懸遣しけれ共中々大金にゐ及手不申候由斷に付左候はゝ存寄次第と奉行所々申達候品に有之候處此節は大坂の町人淡路屋龜五郎といふものを相頼同所瓦屋町炭屋孫七ゐ八百兩ゑ質に入有之候處此節過分ゑ價に買受候もの有之源三郎懸合候得共不差戻とゑ取沙汰相分ル右ゑ樣子にてはいつれ千兩以上ゑ相場とみえたり刀劔にも甲冑にも一品にて千兩に望人あることも八百兩の質にいるゝこともきかす可歎事也

○四日　晴折々くもり雪　さむさいふへからす薄らひにはるとは知れと冬よりも身にしむさむさ堪うかりけり○けふ正月廿五日附六日切ゑ書狀相屆く當春御老若ゑ書狀わすれしわけは申迄もなく御老若御側は別段なれは舊臘より讀合をなし用人共三人にて突合をして別箱ゐ入置五日に差立るとき其別箱を忘れたるを十二日にいたり何か重き箱ありとて開きみて用人共如柴なりて來れりいかむともすへき樣なし以後を慎しめ御用向なから年始は私用も同前なり畢竟別箱といふことあらし以後は江戸狀は一箱たるへしと申付たり右に付母上の御案事委細に被仰下恐入其旨用人共ゐ申聞る一同といふ内にも民藏殊に恐入たりこの男かゝることよくあやまちありてみつからとかめ後悔甚敷もの再ひあやまちすること遠きかたなるへし○母上御機嫌克其外一同ゑ御無異恐悦ゑ至殊に母上の御腫氣御全然とゑ御事恐悦ゑ御事也一寸たりとも手をしかとにきりて常ならす指先を覺へおよひ小便の通し澁るかことき氣味あり及ひはらより胸の邊常とかはりしシワのよりて少し光あるかこときみな水氣也其後足のすねにみゆる也以上のことあらは卽に赤小豆麥めし御用ひ可然か病ひ小なるに養ふ甚効あり近頃西洋學者の銕炮を製作するを聞にいか樣に銕を製すれは百篇にて損し五十篇にて損するとの論ある也さもあるへし絹木綿なと丈夫不丈夫は數をかけてしるゝ也藥も毒も數をつみてのち其効ある也これ養生の可貴こと且一度二度にて身にあたらすとて少も油斷すへからさることも人に突合其外みなしかり其内に卽効なき藥のつみてしるしある卽

坐に害なき毒のつみて害をなすこと至ゐ大也辯佞の人の天下を害する類也管仲か桓公を諫めしに酒宴遊興は酖毒よりも人を害するといひしこのところ也水の火よりも人を多く害する其近効也儉約は百文前後の錢にありといひ傳ふるみな同し○茂兵衛奇貨を得て子孫に災を生するの論新右衛門の論深切の論也小學外篇敬身篇に柳玭か說を記して七十萬錢の玉のかむさしを買ひしものゝ身の亡せしことをいひて末に上よりあつき御恩を受たるもの威權の盛なるもの奇貨よりも甚しき身の害あることを示されたりわれらみな御役に付御恩の奇貨を得しもの也奇福あるもの也奇福あれは奇禍ありともいへは兄弟ともにみな只々あつくつゝしみて此上の昇進少も願ふへからす母上なと左衛門尉に早くかへれとのことなとゆめ〳〵思召あるへからすわか兄弟あまりによき故に恐るゝこと甚しくこれにて折々江戸へ歸りたき類のことの療治をして愼む也新右衛門の高論感心して悅に堪えす同意のよしを記す其余新右衛門ゟ御申越ゟ御心附ゟ次第等夫々御尤に承伏○松平金次郎をたのみ小學外篇を月々に御聞なさるへく候よき書也近頃小學纂註和板出來たり二十匁はかり也御求なさるへしよみよき也佐藤捨藏なとも小學外篇をは賞する也許魯齋薛文正等の純正の大儒小學を尊ふこと神のことくとも父母のことくもいひ行跡のこと小學に盡せり聖人といへ共小學より外ならすといひし也ましてわか輩は日々をかみてもなほあまりあるへし

○五日　くもり又晴微雪　市三郎劔術を遣ひ郡山の先生と遣ひ八二位の勝負出來たるかにて悅ふことかきりなく息長くいつ迄も遣はるゝといふ也われ行みしに綿入にて肩衣をとりしまゝ直に面小手に成て仕合をする也この流義にてはヒ打といふ也全の仕合にあらす劔術のおとなしきこと直心影なとゝは大名と小役人ほと遣ふ也市三郎いまた一向に出來すいまた靈劔は無覺束われ時々遣ひ遣すなれ共息も短く自由になり人あらは十人位はつゝけに遣はるゝ也これにても平日苦勞をすること智のすゝむ稽

古としるへし郡山の流義心の治りなとにはよき樣にて其上參る人に壯年屈强の人立派成遣ひ人あり同流同士にては其躰みゆれ共必すあらき遣ひ人に逢なは六ケ敷かるへし諸藝共によき師のかきりを撰ひ多くくるしむへきこと也

○六日　晴折々雪ふる　さむさ前之通也けふ女共木綿の反物を買ふ其内にめくらしまあり只のしまありそれをみてうら表の論をする也これ常のこと也なるほとわれにも聞はわかる也よつて發明するはある人の申せしは名倉彌次兵衛へ水野出羽守はなしとか聞也築山をつきみるに自然にうら表ありて多くは南向のかた表になるかことし不思義なるもの也よつて庭の北まとの外へ築山をつくりみるによし多く築山といふものはうらをみる樣になる也こゝろすへしといひき今木綿の縞といふものは一筋の糸をいろ〳〵にあつめて文をなせしもの故うら表あるへき樣なししかるに梭か加減か手の加減にて自然にうら表ある也され共自然に出しうら表なれは少のきすにはならぬ也これを譬ふるに燕居と朝廷に閭々侃々夭々申々の別あるかことし聖人といへ共止ことを得さるの論也これうら表あらし〳〵のうちに無のかきりの内に自然の節文也しかれはうら表は人におのつからある道理也されは共自然の文はいふへきにも不及きすといふにはあらぬ也されはとて行跡は糸を染るかことく日々にかたく染て少も村なき樣にすへきこと也それに間違あれは所謂無恒巫醫ともならぬ人か小人か也少も言行に表理のなき樣にすへきこと勿論也それにてもめくら縞のうら表あるかことくうら表出來勝也可恐ことならすやしかるを己かことの表裏はめくらしまにてゆるし僞をなし人をのみ自然の文あることをいはすして裏のことにめくしらを立なは世涯に人はなき樣になるへし可恐のかきり也これは縞をみて行跡の六ケ敷表裏勝に成行をかなしみ謝良佐か七年の稽古にて言行一致せしを感して記すわか同役にゐは村田阿波守なと先つ表裏あらぬ樣にみえし也あまり玄關前よき人は臺所よりあかりみておもひの外のこと

ある也人は臺所を掃除大切也

○七日　晴又くもり　今日より薪能也七日の間能見物の難行苦行大變也出座中は靜坐の稽古也筆頭與力中條良藏といふもの禪學をする人なるか着坐せしまゝ刀の柄のあたりをみしまゝにて膝かはりまてつかれし躰なし尋みしに人は能をみる故に神氣耗る也われはよつて少も能をみずよつて勞せすといふ禪氣なるへし當年の能は江戸より大夫下りし故別ゐ賑ふよし也其大夫等か舞ふ前に長權守といふものか舞ふ翁三番叟にこまる也これ能の元祖にて四座の猿樂大夫といへ共ならゐ來りて薪能をする故に三番翁を舞ふことをゆるさるゝといふ位のものなれ共權守かするは株の賣買にて全の百姓のすること故にみるへからさるの限也これをみる御仕置の一ッ位也あまりの事故に戯に題せりちと狂詩めきたり卽吟故御笑あるへし

音枯敗鼓鳴簷滴拙舞全仿奴紙鳶何事漫名長權守今朝負耜到山田

又

春風二月草如氈優戯開場蘭若前野客樵夫相集舞薪名可寄此人全

詩歌といふものは世につとふるもの故わるロいたつらなといふへからさるといふにかゝることをいふは一ッの愼の破なるへし蘇東坡のことき人にもこの癖ありしと聞ぬ夫故に身を破られしと也可戒事也これらのこと日記限と御聞被下へし

○八日　晴　風邪に付能には不出此節下女共まてもみな風邪也わか風邪は能に當りし風邪也七日の能夜四ッ時迄故風もひかねはならぬ也當年の能は金春大夫金春八左衞門江戸より參りし故笛太鼓まてもよろし其躰野鶴の鷄群孤松の獨立にて外の役者共と違ひ姿見のかゝみを持出し人に爲持置衣裳を着し面を直し大騷にて面は亂箱に入紫のふくさにつゝみ弟子共捧居るなとけしからぬ勢也ならの能はかく屋なしよつて矢來の入口にゐ裝束する故にみなみゆる也江戸の大夫はのしめ着せし兒に刀を爲求て

實藏院なとはシコロなとき實なる下にかふり其上にふに頭巾なるとに市三郎へかたり也しと也大笑

舞ふ也其かはり靜にて昨夜も四ッまてかゝれり芝地を能舞臺にせしものなれ共芝けしからすよき故に白足袋の新敷をはきて舞ひ足のうらくろくならぬ位のこと也興福寺の僧侶衆徒共は例の辨慶か書にある頭巾をかふり衆徒はみな太刀を爲持南大門外の石の階段の上にて立なからみる也頭巾はけさをとり冠り頭巾のことく成也

○九日　薪能のある南大門といふは猿澤の池にのそみて至ゑ高き所にてならの市中を目の下に見おろしよし野かつらき金剛山なと遠きも近きもみえわたり至ゑよき眺望の所也そこに大門ありて大門の前芝地にて能あり夜は薪をたく故に薪能といふ也奉行ゑ見物所は高さ六尺はかりにして見附〻の大番所のことくなるもの也其前土間に高麗縁のたゝみを敷興力惣年寄町代家來ゑ内供侍給人ッゝ並ひ奉行の前には同心共前置に並ふ也その外に三尺はかりなる塀をいひわたし其外は帶刀するもの興力の家内ゑ男女なと見物所也其外は雛段の如く後を段々高くして市中ゑ（これなくらかけと云）もの也舞ふ

場所の塀の外はよき町人共也こゝの風なれは酒くみかはし或は女郎なとつれ來りてみている也上かたの風はかくの如し奉行のみわたす所なれと綿なと冠り居るものなとあり一向に構はぬ也奉行の居る大番所の如くなる所には板羽目にゑ屋根あり其外は青天井也いにしへの奉行には奥方迄（土間）もこゝにて見物せしよしにて興力又は醫者なと奥樣の御出はいかになと聞也尤夜に入ての事なるへけれ共わか紋の高はり挑灯はかりも二三十立居る所故見物所へ下女共も出されぬ也○當年の番組の内に鵜飼の能あり以前人のいひしは鵜飼は將軍家にて忌ことありよつて關東にてはなし其譯は足利將軍家を赤松の邸にて奉弑とき鵜飼の能を舞ひし故と人の語けれとも散樂のことを予知らねは興力より金春大夫に聞せしに知らす金春八左衞門に聞しに鵜飼の能は關東の御番組にも出るなれ共いかなることか鵜の羽といふ能は御番組にならす其譯は鵜の羽の能あれは　營中に異變ありとかたり傳ふところにゑ淺野と吉良の時も鵜の羽の御能番組にあ

りしと承る夫によりて鵜祭といふ能も御番組には似たるもの故に出さすとかたりしと也

○十日　曇　春日の神前の能に付出るけふはおさとの女共を不便かるによりて今夜薪能一覽として遣す

○十一日　晴　南大門の薪能へ參る此節菓ものゝ木を植るこれは今いろ〳〵の木なき故に後のためにうゝる也我の此節こまる故のちの人もこまるへしとかくする也○新右衞門よりおさとにくれし仙人掌群民といふ黄軸の筆至ゑよろし近頃唐筆にて短尺をかきみるに稜角字の屈曲の所に出て別ゑ拙筆わるくみゆる也淺野梅堂か遣料の和筆にては稜角少この仙人掌といふ筆至ゑ柔にて短尺によろし可惜いまた毛の調ひかた不宜候何卒此筆工に御申付大小と柔サは仙人掌の通少も不變して毛をよく吟味し極入念にて試に二本はかり御申付此次のたよりに被遣可被下候高料にてもよろし

此廉早々御取計可被下候

○十二日　くもり　きのふの興福寺門前の薪能は鉢木を舞ふといふこと金剛座也其上に金春大夫同八左衞門か舞ひあり夫故に見物夥し奈良にてはめつらしく人出し也旅人なともあるか也奉行之警固所は別段に高けれは四方を見わたす也行かけに例の先箱なれ共けふはヨヤマカセはあらすともよしといへ共何分手廻り等はヨヤマカセかしたきことゝみえ無言にてこと〳〵に身ふり也ミブ狂言といふものゝことく長刀持の足鷺の泥鰌をふむかことく毛やりを投ること禪僧の悟道するに似たり興福寺の山内の廣芝原まて行に與力惣年寄町代共出迎下坐して居り奈良町人其外夥見物せし所にいたりけれは鑓もちの身ふり益甚し肩輿のうちにて不覺ふき出せり警固所に行みれは南大門の芝地人を以埋たるかことし久々にゑ江戸の躰をみるこゝろせりされ共帶刀人は少し袴羽織にて帶刀せしものは三四十人に不過其余はみな町人旅人等也中にもゝ引半てんにて三尺五寸はかりの刀帶せしものあり田舍廻りする刀伎者なるへし木辻町の遊女をつれて

かつぎをかへるものは人もなし
ふるとはいへ京のよしのの
もの笑ふにてかつぎをかへ
則かつぎにてはるのあれ
義也

芝地にて酒のみなからみるあり白き衣類にて夫婦の巡禮かくらかけの上へひゝなきとりにてのほり居るもあり輿力等〻妻其外には婦人にかつきを冠り居るありこのかつきといふもの江戸にも昔はありしか増上寺にて浪人騒動といふことあり夫は御施行米とやらむを可盗取と浪人共かつきを冠り婦人の躰に出立チ御老中ゟ近寄しより御制禁になりしと人のかたりしまことにやなるほと身を忍ふにはよきものなれは江戸にては御制禁ならでは叶はぬこと也奉行〻見わたしの所には手拭頭巾なとかふり物は都ゟ制することなれ共かつきはもと女の人に顔みせじと作れるものなれは奉行〻見わたしにてもかふり居也振袖は振袖のかつき也といふ也かつきかふりたるは奥ゆかしくとらせみまく欲するも可笑上かたの婦人は三十前後のもの紅の襟にてセンベイの如き薄きくしかむさしをあみたの來迎といふ身にさしかさり瑤瓔のことき物を膠さけて辨天の頭よりはにきやかにジュン諦觀音のはれなる頭のことしされ共直段は江戸のよき笄壹

北條九代賢人ならぬ人のみならぬ世の治のはかはのにまるきのなへ様なしされ共なかくしたて實なかくみ陪臣なる以國命なり天子なり遠流なし奉る處なにみなれさる誅人罪人也大なるいたるいはなるとき泰時とはいへ共誅せらるへ罪也大道

本には及はさる也われ兼ゟもいふ通鉢の木の謠曲をきくときに其純忠にして少もうらみなき感する余りあれはいつも涙を流すなり謠曲を唄ふを聞しはかりにては佐野のふなはしの雪のあと無覺束きゝわかねとも能にてはよくわかる也優人みな堪能のもの共にてことにおもしろし元來散樂は嫌ひなれ共けふはなみたを流して感心し少もつかれを不覺さりし也龍介例の流義なれは元來時頼か行脚僧になりて歩行といふはこゝろせましを(樂翁其外に此説あり)常世か鉢の木をきりしは事をまうけし諂諛なり常世かこゝろをためすとて諸國の軍勢を集めしは周幽王の烽火(ノロシ)に似て此次非常の害なるへしといふ故にかくのことく事をみは論語をよみて孔子の謀反人の招キに應せられむかと仰せられし評をする類にて其疵を論せむには書に善書なく世に全人なかるへし小野道風は蟇の飛をみてさへに其善をとり漁翁樵夫の辭も聖人は御とり被成たりましてこの能夫の留主に妻の人をとゝめぬは貞也かゝるこゝろなれは家よく治まる也無實のつみにて刑せら

におゐて可論事はあらねとも謠曲の内の善をとりて猥に誹謗することを戒しも也

れ米もなく薪もなけれともつゆのうらみもなきは大人君子凡士たらむものゝ魂なるへしまして馬あり甲冑あり長刀あり浪人の備には十二分ならすやこの一事におゐても慶安の度被仰出たる嚴敷令條程の御軍役にことかく我らはいたく恐入ること也時頼たらむものゝことくよく下情をしり寃罪のものをして天下になからしめむとし既に其人にあひ其ことを聞てもつゝしむて其ことをためしみて彌言行一致せるの證據あつて常世を用ひたり官にある人懂恪の二字たらぬ故に公事吟味物より人の黜陟にいたり大にあやまりある也つゝしむて寃罪なからむことを朝夕に欲し謹て人をあけて僞のなき人を用ひなは世のなか昇平ならむこと疑ふへからす人臣よく常世かこゝろを以こゝろとし上たる人々時頼かこゝろを以心とせむには何か疑ふへきことあらむ書をよみ人をとるもの善をとるへく惡をとるへからすとわれは修行する也とかたりき

○十三日　雨　このほとの薪能にゐ耳に謠曲うつりたることくに成樂ガク

は樂ラク也といふ注は僞にてむかし駱駄の歌にらくたところか苦の世界といひしを思ひあたり候○昨夜二月觀音堂に松火あけあり奉行も在勤中一度參ることのよしに付罷越候積之處雨天に付不參家來は參りたり此二月堂の觀音といふは讃州之金毘羅なとの如くこゝにて人の恐るゝ神にゐ京攝之もの等大に信心する也大松火といふは五間はかり成大竹の先ゐ二抱はかりに杉枝檜なとをくゝしつけ夫をもやして本堂内其外を持歩行こと以上十二本也はしらなともあつくなるにいたるといふ也火の子夥飛ちり群集の男女の衣類かしらの上ゐかゝるをみな難有かりて拾ひ取行といふ衣類又はわた帽子角かくしの類へ火をちかゝれとも更に焦るゝことなくやけとをせすといふ也乍去元祿の頃此堂燒失せり其時灰燼之内より觀音の像其外取出せしに別條なし觀音の像の手にありし數珠のふさまてこかれすといふ也灰燼之内に事なかりしよしは時之奉行より御老中ゐ申上候處奇異之御感ありしよしは奉行所之其ころのもの記せし大和誌といふものにもみゆ

此井戸の水たくみあけて鑑置なし當年のころ二月來分十二日ゝ也人に可疑事也こくるれら奉行すなる穿鑿に奉行なるは勤向のなくおもの如くなる人三十年の後はなてはならぬ事也

る也こゝに昨夜から井戸ゐ向ひワカサ〳〵と呼は地中より甘泉奔出するといふことあり若州より來る水故ワカサ〳〵といふと也昔若州より鵜を放しにこの井戸ゑ内より出しよしなと例の天竺無熱地につゝく類の浮屠氏の說いろ〳〵夥ありて與力同心共ゑ信仰けしからすいろ〳〵の奇瑞を唱ふるに可笑ことの多き也しかし可尊はこゝの堂守の妻盗賊に逢ひし時ゑ訴ゑ衣類ゑ品數等夥し事にて堂守まて屋を潤ほす利益はあるとみえたり

○十四日　くもり　漸に昨夜まてにて薪能すめりならのものは能好故に昨夜も夥人出しといふ也江戸ならは是非喧嘩のあるへき事なれ共七日ゑ内に頭はらるゝ人もなし江戸ならはヤンヤ〳〵とか親玉とか彼蜀山人かしはらくといふ一聲に大地震鯰坊主や驚ぬらむ

といひし騒のときも一二聲所々にてエラヒ〳〵といふ也冠りものは奉行の出し時はならす江戸ならはかふりものをとれと嚴敷いふへきを同心か行ていさゝか手眞ねをしてみせる直によすなり大聲をあけて制し六尺棒を持出すことなと絶ゑなしこれ自然の風土によるものなるへし能七日續けはよからぬことありといふ當年も半日は流たり

○十五日　くもりさむし　風邪大に行はる夜窓の障子のあかきにおとろかされて起出けるにまた寅過るころにてやゝかたふく月のかすみに勾ふさまいふへくもあらす老のねさめも春の曉のあはれなるをみるのみはわかきむかしにまさりけるなといひつゝ又ふし戸にいりけるに庭の外面のうま場の方にてきつ狐のしはなきけれはきぬ〳〵に聲うらむくたかけ鷄もなきをあなかまなといふうちに忽ちに遠く又近く來り或は梢にも聲する也雷地を走るものならはかくはあらしとよく聞はきゝしらぬ鳥の聲にてはやゝ遙なるいなりのみやしろの森へ行てかすかに啼也こゝへきしころ女共か笛の聲に似たる鳥のよるなくを聞て水くむ男にとへは夜鷹てふものなりと答へきくゝつめに似たる名よとて笑ふをきゝてめつらしくとなら人によく問はそは鷹に似て小さくこゑは猿樂のひゝきといふ聲に似たれは笛

とりといふとかたる故に眞淵翁か僧のかたりしとて冠辭考に載られたるぬえ鳥ならしと其ことを人にもかたりしことのありきしかるに古今うち聞の呼子鳥の條にすゝみ鷹に似たるといはれけるよふこ鳥もよるなく鳥なれはぬえとりに似たるものかうち聞の書入にはかほとりといふも呼子鳥のこと也とみえたれとも契冲かかほとりのこと聞かむとなら人に尋ぬれとしらさりきと代匠記にしるし今もなら人にしるものなきを呼子鳥と同しもの也とはいかなることにや千蔭はかほとりをかつこふてふとかいひしと覺へしかたしか成說なりやいかに万葉にぬえとりかほとりともに片戀嬬するよしによみけるも似たる故ならむかきさらきの夜半にきけるは三ッのうちいつれにか有らむうち聞にいへるかほとり呼子鳥共に古人の說に木こり山かつらか咄をもて凡に定めしものかいかにとからすの雌雄のけちめ差別のことくおもひ迷ひて

いにしへと名そかはるらし春日山はふりも今はしらぬかほとり

おほつかないかに定めむ呼子鳥かすみかくれのはるのよの月

かすか山千とせかはらぬはるのいろなとかほとりのなかてやはある

○十六日　くもり大にさむし　忠四郎かたより貞五郎の不快のこと申來る聖堂の御試にも出すとこの人わかかたへ來るとしわかなる人のうちにて才あり書物をもよくよめはいかにやと大に案事しる也○けふ廐の猿廻し來るみな〳〵三之間にてすきみする也猿すら人まねを敎によりてする子のをしへのよからぬは嚴敷せぬ故也と其旨市三郎へ申聞かせたり此上は尙又嚴敷する積也さるの藝をするをみて人々感する泣まねなとする躰驚へし市三郎に問ふ人のあのことき藝するを人々感すへしやといふに人のならは少も感せすといふ故に夫に附わか恐入ることあり今まて出格に被仰付たるには氣のつかす十人並の人を相手にとり爭ふ氣ありし也人のそしり尤至極也此上は今一段つゝしみて人物をあけ万人之内を諸大夫之内へも加られたれは万人の人にすくれし人をみてわかものさしとして出

精して　公儀の御恩を難有深くつゝしむへしと大に恐入たり友野先生より陸放翁韻を用ひし詩作を贈られたりよつてけふのこゝろにて其和韻をしたり理學を好むものゝ詩也とてかゝる詩は人の笑ふことなれともわかおもふことなれは少も不搆

欲問紫陽性理微。得閑瘦馬訪朱門。初聞戒懼戰兢教。未識沂雩浴詠歸。心鏡照身悲舊醜。汗珠走背愧今非。嚴師伏乞砭矜傲。慎換韋弦日據依。

○十七日　雨　おさとけろ〳〵にゐ平臥十二月廿一日に一寸起りしまゝなれは藥の効を奏せしなるへし此ほとはおさとの考にゐ葛根黄連湯に大柴胡湯に仕度とゑ事おもしろくおもへは夫にしたり大に効あるかことし四五日以前なとはめつらしく針をもち夜歌なとを出したり歌は甚腹にこりてよからすといふ也○一乘院の宮の御うたは　禁裏の　御勅点也乍去御相談は御家來の則名といふ御家來也二條家の賢き男也よつて宮の御意に叶はぬことありとて予に御相談にてはいかゝあるへしと内々儒者より噂はなしのことくに云故に大に恐れて万一御歌の御評加墨なとせは即坐に罰あたりて手まかり口ゆかみて後々いたくこまるへし其上官家は御歌は專ラの御事武士は全武門の余暇のなくさみにて殊にわかうたなといふことは別ゐ歌にはあらすはなに啼うくひすにはあらすドフにすむひきかへるなるへし中々以とて大笑せし也○きのふの猿舞より別ゐ市三郎を嚴敷責める也かれ元來鴛才凡下のものなれとも猿に准していたくせめたらはいさゝか人まねする位にはいたるへしもとより猿の藝かこゐ水をいるゝ類故勞して功なし乍去力をつくしてするか親役也これ實に親泣子なきといふ類也

○十八日　雨さむし　市三郎と劔術を遣ふ同人一刀流に成少々あかりたるかことし遣ふうちに立腹する故に嚴敷せしに落涙する也これこの男のくせ也○古梅園より年々の例にて梅花一枝をおくるよほとよき紅梅にて匂ひ別段也古梅園の名此梅によれり初瀨にある貫之梅の一種也と云傳ふ

かゝること銘所に多し貫之梅といふは初瀬にまうてけるとき貫之のやとりしやとの主と貫之贈答ゑ歌集にみえ貫之かうたは得意とみえてみつから古今集にも被載たりこれによりて初瀬に其名のありしなるへし西大寺に僧正遍正の柳といふもの今にありみな可疑もの也筑紫太宰府の梅なと菅家のこち吹はといふ御歌よりの考にはあらすやしかし飛梅と号すれは所謂あるへし神事は論するもかしこしけふ梅のちるをみて感有てよめる

待花を催すけふのはるさめにめてみる庭の梅はうつろふ

与風例の答恩兼元を見て

常帯腰間三尺劔換紳鐫出答恩詩答恩今日爲何事唯樂吟哦弄酒巵

なとゝ椽頰にて吟し居たりしかるに詩はかりにゐ酒はなし雨天のこと故春雨なからさひしきこと也忽民藏來り八日出十日限ゑ宅狀を出す夫婦うちよりてよむ也母上の御不快や御狀なしとおさとの驚ていふ也新右衛門の書狀のうちに詳にありて御當分のこと也と奉伺候ゐ先以安心也茂兵衛跡ゑ不始末歎息の極也天の亡す時なるへし可憐地下の茂兵衛か心いかにや茂兵衛か面かけ目に附て落涙する也彼良刀を得て子孫のためとおもひ夫にゐ子孫を失ふ天地間のことみな如此可歎前のまつ花の歌其意也しかるにみなよきことはかりを思ひよきことを急はいかにわかいましめに過に同しこゝろにて

舊燕辭巢新鴈到。霜楓漸絳菊初衰。山童不識天然味。日々揮竿敲栗枝。

ともの〻題せしことのありし也○日記ゑ内師父の論小學内篇通論の内に欒共子曰民生於三事之如一父生之師敎之君食之故一事之唯其所在則致死人之道也節書とあるによれはもとより差別なきこと勿論なり乍去禮記にも父仇のことあり師のあたのことなく其上師に三年の喪をせしは孔門の弟子の外いにしへにも三年の喪を必とすることを不聞其上に右ゑ欒共子申せし内に唯其所在則致死とありこれ父の手元にあるときは父君につかふ

る時は君師に隨ふ時は師にて其時其時による事とみえたりしかるに師と父と場所一度に來るときは重きに從ふこと勿論也是服忌の令によりてもしるへきこと也其上前にいふはいにしへの事にゑ今の師といふものは全〻内弟子の類等は格別其外は出家に限ることなるへし然ルときは何の事かあらむ既に文化の頃手習の師の恩歟によつて人を殺せしものありて何歟〻時石川長次郎の世話にてくり出し其例を用ひしことあり差別はなかりしかと覺へし也内寄合歟評議〻内なるへし殊に獄は人情に隨ふと申すを出家などの例によりて今の普通の師を論せむにはいかゝあるへき人の服さぬ也乍去名と器とは人はかすへからす名を正しくせねは事の不行ことにて師といふ名何分にも筋立てはなるへからす既に民間の匹夫匹婦にも主從あり一石二石〻　御朱印地至ゑ〻小給所も諸侯も地頭と百姓は同し意なるへしよつて師匠といふものは必出家にかきるとせぬところに又味あるへき也われいかなることか其詳はしらす師と父と鬪諍に及ひしとの一語はかりにて只なくさみに御笑ひのため贅言を出せりかゝるもの武士ならはものいはす切腹勿論不幸にして死すること不能さるにおゐては死一等を可宥ものかいかに兄弟にて殺し弟のかた弟子にあらさるならは吟味なとするものにこゝろあるへきこと也○山下邊の親の敵討の後篇はいかゝ相成候や封廻狀にも不出や○序にいふ大津音次郎幷砂壽つゝかなしやいかに○手を下すとき義のたゆるとのこと手を下すもの目上のものに對するときの辭ならは格別かゝる所にはいかゝあるへき折たく柴の籟ありの疑獄とはことなるかことし弟たらぬものわか切りしといはねはならぬわけ也かゝることに義にくらきことあるといらぬことを仕出かす也前の師の字を出家のことによせてすると即坐の便利あれ共こゝに大害あるは君父師のみちを聖人の定置玉ひしはもとより天地とゝもにすへきことにてしかれは欒共子の說の外別に論あるへからす禮記にありしと覺たり孔夫子の沒し給ひし時門人服する所を疑ひしに顏淵の喪に夫子其を喪

するかことくはして服なかりしかは孔夫子をも父を喪するかことくにして服なかるへしと之事にゐ其通に成しと也（以上空覺也本書一覽有へし）今人の師弟のみちをいかにと問は孔子の如くすへしといふ譯のこと也しかるに師弟のみち大にやふれ手蹟の師は五節句二百文の日傭のことく先生の号灰ふきをかへさせるときも呼にいたる大破の弊風によりて刑獄のことを定めむには　公儀にても其弊風を御取用のわけになるいかにも可歎の至ならすやこゝの場を以いふときは師道をたしかにせねは尊くなき也しかるに其道出家のことに限るやうに成たらは天下に儒を行とするものには出家の類にはあらすよからぬ奴なれ共かの大鹽平八郎か弟子のうちには賢者あり て諫て死せしもあるなれはまして純正の儒者之門弟子なとの欒共子の說を鏡のことくに思ひ居るものなとはいかゝおもふへき所に寄刑獄のことによりて其弊風を長し志あるものゝ志を失ふにいたるは不容易事也孔門の喪服のことによりても師父の差別よくわかる也かやう成事に當坐の論はよき樣なれ共大本達道にかけて味うすくしては天下の御政事に不成故に戸田侍從の執政たりし御時なとしは〳〵大學頭ゐ御下問ありしことなるへし畢竟か弟に其始末のことを再ひ訊問したきもの也これ前にいふ名義に暗き人いらぬことを仕出すといふ譯也

○十九日　雨　きのふ内藏之介きのふ江戸ゐ出立せりかゝるに雨ふるこまるなるへしくらの介至ゐ貞實之男也

○廿日　雨　奉行所より北手二十町はかりさほ山眉間寺の西北に土俗大國の原といふ所ありそこにいなりの社ありこれは添上郡法蓮村の持いなりの社地なりそこに狐の顏にて人の如く杖を持立居るものを彫し七尺はかりの碑のことときもの三ッあり大國のはらのいなりの石といふ也これは隼人之圖也よつて好事のもの所々よりすりもて行也ならにては摺しは貳朱はかりにてうる也このこと五畿内志大和添上郡山陵の部に佐保山西陵巨石七狐を彫刻す天平勝寶六年八月火葬の地にて　聖武帝の御母よしあ

り好古小錄には　元明天皇御陵碑の次に此隼人の圖三ッを出して年曆等なし右之圖を爲摺て蜷川能登守と鷹見十郎左衞門に遣すとてしらべみるに右之通也けふすり來るをみるに謠曲のつり狐のことときもの杖をもち立居る也上に北といふ字を彫あり五畿內志に七狐とあり好古小錄に隼人三ッとあれ共右は五畿內誌誤なるへし狐といふは隼人の姿は犬なるを狐と誤りしにて今三ッあると北とあるとをもて考みれは東西南北と四ッありしの十ッ失しなるへし其外の二磨滅してみるへからされ共數と北といふ字によりておもふ也今大黑（マヽ）の原といふは大皇后の原唱ちかひしに無紛これは五畿內志のことくなるへし七狐ありといひしは人傳に四ッ狐の居るといひしを四と七を聞誤しものなるへし元來五畿內志此外誤多けれは旁五畿內志よるへからさる也又隼人（ハヤト）の圖也といふは元來隼人といふは兵部省に屬するものにゐ大隅薩摩の人々にていにしへ唐にていふ猛獨なといふ類かもしるへからす神代火酢芹（ホノスセリ）命の裔にて薩隅に居りし也よつて

万葉に隼人（ハヤヒト）の薩摩の迫門（セト）とよみしよし冠辭考にみえたり扨又狐と隼人と間違は神代卷に火酢芹命苗裔代々天皇の宮牆の傍をはなれす犬にかはり吠て事へ奉るへき諸請あるといひ延喜式隼人式に凡踐祚大嘗日に應天門內の左右にわかちならひ發吠其外所々に隼人吠を發することありみな守衞のことをするとみえたり犬門もりするとの義にてかくあることなるへし隼人といふは隼を高墉の上に射るといふ周易解上書の注に隼は小人也といふによりて隼人と附しと壺井雀翁はいひ置たり右之通にゐ凡隼人のことわかる也これによつて考ふるに今存する所の隼人の圖御陵の四方にたてしものなるへしいつ頃の物といふことたしかならすといへ共地名と五畿內志の說に先よるときは天平勝寶のころのものなるへきかさすれは壺石碑より古きもの也與力共はなしに元來は四ッありしをいつか一ッは關東へ行て當時上州の邊にあるかといふ也いかゝあるへき勢ひある人の下屋敷なとに古來移されしなるへし今いなりの社地にありて奇といふへきは

以前外の地往來近き所にうつせしに狐よる〳〵來りて啼こまりし故に又もとの地に移せしとなら人は申也可怪こと也犬を人か狐とあやまり傳ふれは狐もわか類也とおもふ奇なること也いなりといふもの吉田家の說によりてみれは狐の緣なきものなれ共ミケッ何と歟いふ万葉かなに用ひしより誤たるよし吉田家にてはいふなれ共狐も今にてはいなりの遣ふものゝことくこゝろへて其上氣の高過たる狐はいなりの積なるもあるへしこれ必おれ共にかみは五人とめかけいゝといふ類の僭上狐なるへし予小普請奉行たりし時小普請方の稻荷社の大破せしを同所の小遣へきつね取つきていろ〳〵口はしり初午前に普請してくるゝ樣にくるひ走りてのゝしり其頃も小普請方は坂入太三郎御取締懸りにゐ同人大にこまり予に伺ひ出たり右のことに不拘一覽せしに殊ゑ外大破せし故に御修理せしことありし也其小遣ひ初午の日には宅にゐも至ゐ穩なりしと聞し也小普請方のいなりは諸職人の手間其外奉納故けしからす立派に出來し也神も人人もかみ一躰

なること也されは人々神社等少にゐも不敬なることはならぬ也後世隼人といふ名のあるはたかのはやきといふのみによりし也實はいやなる名也

○廿一日　霰又晴さむし　けふ小鴨を人のくれたれと今頃の鴨味なかるへしとおもひしに冬よりも膏十倍して味ことによし江戸の鳥とは風土の相違あるとみえたり貝鍋忽に油鍋のことくに成れり驚はかり也新右衞門か鳥好のことなといひ出し也冬ゑ春のかた食物ある故なるへし四ッをうちて書物を仕舞とり鍋をかけ扨ちやも喫れぬ故に酒を少々給たり少とくりの酒おさとゝ予とにて壹合に不足のみて余あり酒料を減せしをみるへし

○廿二日　晴さむし霜膠氷あり　頃日別當中宅の不束ありて手鎖をいひ附たり其こと俊藏宅にゐ夜食の時同人申して夜行は上みにて御嫌なとゝいろ〳〵話をせしにそはゑ例の小女か誠さむよく聞て御いてよこはきこと也といひ扨又御とつさむか外のものならはかゝるはなしもあらし畢竟他人と思はぬ故なるへしといひしと也けしからぬ小女也誠一いまた夜行

の沙汰なし定め俊藏か序に一躰の心得を示せしを小女を知てかくいひしなるへしみな〳〵大にこしやく也とて笑ひしと也けふ汝きのふおもしろきことといひしと也話せといへとも笑ていはす此小女の躰常にかくの如し

○きのふの鴨の肉のうちより貝ならは眞珠といふへきをくひ出せり人間ならはシャリなるへしひろくいへは病の類なるへきを坊主共奇瑞のことくいふ也蚫は貝のうちにては佛縁ありやいかに可笑こと也人蚫の眞珠をいはすしてシャリを尊ふはいかによく調へみたらは火あふりなとに逢罪人かシャリあるもしるへからす也

○廿三日　晴　わかくさ山かすか山の霞けしき至めよろし歌によむことく成こと關東にはなし大和京都ならては霞時雨のうたの實物わからぬ也

○けふ周禮をみるに占筮のうちに占墨のことあり左傳に人相のこと初めみえ墨色なといふことは後のものとおもひしに至め古きもの也新右衞門なと吟味等にいることもあるかとしるす也

○廿四日　晴　前の隼人のことを記すに付おもひめくらすにやりのことを至め古きとみゆ壺井鶴翁か延喜隼人式の注を引て帶横刀執槍歩行といふことみゆ槍鎗共に一物にて武備志其外にみゆる所今のやりに無紛もの也元本誤字多けれはたしかによりかたし○こゝにては鮭を一切位人に遣す也當年冬蝦夷鮭の初船にて船廻しに六七本いたし度其節幸三郎手製のこのわたも廻しもらひたく候しくれ濱くり同斷也○奈良奉行ゑ巡見は奉行ゑ給物代は拂ひなし其外は木錢米代也けしからす馳走をするといふこと故にけふ村々のもの呼出獻立書爲出みしに中間迄燒物附にて酒を出す也よつてわか巡見に付第一に村役人共みたりに會合相談と号し酒食すへからす且一汁一菜にて酒は出すへからすといふ書付を取置たり必可被行ともおもはねとも民を傷むることのいやなれはかくする也

○廿五日　くもり暖氣也　朱子文集四十一に楚令尹子南之子棄疾ト雍糾之妻の事を連嵩卿の問に答られしことあり其意は兩人とも如何樣ともいた

し穩に治めは上也其次は死ゟ以身悟之次也舍是亦無策とありこのわけは令尹子南といふ人を楚王の殺さむとするよしを子南の悴たる棄疾に咄されしに主命を親へもらされす親の殺さるゝを知なから告さるは父にたゝすとのわけにて自殺せし也雍糾の妻は父祭仲とかいひし人を主よりの申付にて雍糾か殺さむとすることをしり母に父と夫といつれか親敷と問ひしに四海みな夫也父は一のみと母はいひし故に夫の謀を告けれは夫を親の殺せる也みな左傳にみゆもし入用ならは友野へ御聞可被成候空覺にてしたゝめ候夫を朱子か死ぬ外に策なしといはれたらは先達ゟ親のために師を殺せしものも切腹せねはならすといひしに符合する樣なれはけふ文公の全集を讀序に見出せし故に御見合にしるす也○藤堂家より例にて糖漬の魚を贈其糖味ことによし市三郎湯にいれてのむ也与風彰常かかくせしことをおもひ出ておもはす落涙する也われ斷然として不人情のものとならぬとおもへとも彼老牛犢をねふるの情おり〳〵起る也これ父子の情無余義に出るものなるへし昔子夏子を失ひて眼を泣潰したることを曾子の叱りしこと禮記にみゆる也孔門の上足弟子たらむものゝかゝることあるへしとはおもはす禮記は漢儒の手に出て可疑ものなりとおもひしか今更にいかにかとおもふ也

○廿六日　雨　此ほと大乘院の中間村方にゟあはれ候ゟ五人被捕差出に相成其外盜賊の申口にて博奕打共數人遠島に成なら市中ゟ悪黨大に恐れ木辻町其外ゟ行てあはるゝものなし風聞を爲糺みるに一乘院宮にゟはけしからぬ御取締にゟ中間共悉御築地外ゟ出候義を御差止に相成みなおとなしくなりなら市中ゟよからぬもの共追々四國巡拜なとゝ名を附候ゟ一人貳人と段々出てよほと恐れたるよしにゟ出入ゟ町人其外より禮をいふ也此事もおもひ附も新規をもせす引合ゟ申口より御法通にせしはかり也これ三年かゝるわけ也

○廿七日　雨又晴　並便ゟ書狀到來する石河より歳玉佐々木よりちゝふ

絹來る○けふ庭の築山の上を狐遊歩行をみて女共大に驚く泉水のかも追々に五羽被喫たり

○廿八日　雨　家來共と劔術を遣ひ大にかたを打市三郎と鑓を遣ひ又かたをつかれたりよつてけふ按摩をよひてもませかたにはけさ鑓にてつかれたるところありこゝろしてもめといひしに盲人大に驚て穴にても明たるとこゝろ得たる躰なれはをかしきことゝおもひて青くあさになれるはかり也強くもめといひしに漸承知せしも可笑

○廿九日　強雨也　けふはいまた痛所よからねは未明より讀書はかり也白洲其外ゟ出ること等例のことし

○晦日　雨大にさむし　いまた稽古はせす其外は平日のことしはる三月になれは三ヶ年已前出立の時のことをいろ〳〵おもひ出て去年もことしもよからぬ也甚敷にいたりては品川に至り人々來りたらむに彌吉たけたらすは其時いかにすへきことかきたるもの也なとゝまておもひ出す也三月頃出立せしことなれは其ふし〳〵にいたりて夫婦共春雨のさひしさいとゝうらかなしくおもふ也晴たるときはさもなけれとも在勤のなか雨いらぬもの也この味在勤せしものならては知らす都筑よりも雨ふりよからぬといひ越せし也けにもとおもふ也○けふは牢番の子分壹人を召捕たり大博奕打にゟ其上非人の追放もの也品々惡事あり外に同し類のもの又壹人召捕この牢番といふものはみな髪結にゟ奉行所に詰居囚人ゟ世話いたし其外風聞内さくりなといたすものにゟ江戸の岡引にゟ白洲番をかねけしからぬ勢あるもの也さてよからぬものなれ共手を出すことならすこの頃少々工夫をして其内尤甚敷もの壹貳人手をかけたり良民とも殊ゟ外難有かりて大なる隱德に似たるも大笑也

○三月朔日　晴さむし霜雪のことし　けふ七ッ時に飛脚やより備前のやしき幷阿部勢州の御屋敷燒失ゟ由申來るに付評定所はいかに幸三郎はい

かにとみな〳〵とり〳〵に申て御用狀をかね可差出哉いかになといふうち
に六日限之書狀六時頃にとゝく用人持參る別條なしか火事の事かとけた
たましく聞也これ宅狀ときくとみな〳〵胸はどき〳〵もの故なれは也出
火のことにて評定所は別條なしと聞て先以安心いたす○母上樣の御不快い
かにかと申居候ところ御月代は遊はれす候得共御快然と之由恐悅之御事也
母上樣の御狀は例なからいかなるわけかみな落涙する也御名文を振はせ
られたるにもあらねと御誠のとゝく故なるへし昔孔明か出師表に忠心天
地を貫くことを書しかは今以人の落涙するとことこそかはれ同し御事な
るへし引續き西丸下并大名小路執政の御方に御類燒と之御事いかにや可
恐こと也○新右衞門ゟ祝ひ遣候短刀いまた極り不申候由よろしき品に候
はゝ新右衞門氣に入候はゝ御取極可被下候太郎祝ひの衣類のこと當年は
追々爲替差立置候間惣年寄を御待不被遊候ゟ新右衞門ゟ御談し金子御受
取母上の御なくさみに段々と此ほとより御したてあらせられ候樣奉存候

○豐太郎おとなしく候ゟ氣分弱くは有之間敷哉と之御案事母上の思召御
尤に候得共こゝに一ッ近頃ためし候事御座候十歳以下のもの懸念過或
はこはかり候樣成内場過たるの類みな成長いたし候ゟ御用立候もの共に
御座候畢竟子供なからよくわかり候故におのつから右之事有之候わけに
御座候十七歳より廿五までのうちに武術をいたし又は學問をいたし候
得は右之幼年の時よくわかり候義附てまはり候ゟ穩厚成よき人物にゟ世
にも被用申候扨又幼年の時くらやみを不怖土藏ゟ入平氣なとゝ申候は十
人に九人半は必捨物に御座候先ッは愚にて可恐わかちなきもの故に成生
の後大愚に御座候またわかちありて不怖もの幼年には決ゟなき事に候得
共生質疎漏なるか或はふときこゝろあるものに付十人に九人は必身を全
くすること難く高運にて心附候とも元來癇症を乘直し候内其人も世話す
る人も必死の修行にて出來上り穩には參り不申候身を不失を十分の出來
といたし候位之ものに御座候こゝの所親の欲目にゟ大にあやまる所に御

座候幼年の時才氣ある人みな棄物に御座候穩に上を望み候は親の誤に御座候太郎なと何卒彌吉の如く成生いたし候はゝ外ゝ望み少も無之候豪傑めきたることみな可患の限に御座候○母上様御狀の内に左衞門尉ゝ早く歸りを思召候よし御尤に御座候私も其心得にゝ御側にゝ孝養の出來不申候義を後悔は千萬を以數ふるにいとまあらす其度ことに恐入居候義にゝ日々無事に　御目通ゝ義　神にいのり候も夫より外無御座候去なから母子の情はなれ一躰を以申候はゝ新右衞門等ゝ結構も御座候間今二年三年に左衞門尉なとよく歸府いたし候はゝ一血屬ゝ内十二分に過いか樣成事可有之も難計と奉存候間天道を恐れ思召候はゝ左衞門尉の歸り一日も遲くあれと夫而已御祈被遊候樣奉存候私何ゝ德あり何ゝ功ありて諸大夫に相成候哉それは新右衞門とても同斷に御座候例にならすと迄に被　仰出候ゝ組頭に相成候は新右衞門は例もなき御用立候とゝ事にてかゝる子供二人まて御持被遊幸三郎とても衣食住に事足候義に付當時母上ほとの人御家人に何人有之候哉と御かそへ候ゝ左衞門尉無難につとめ候へ決ゝ早く歸るへからすと神佛へ御いのり可被遊候夫よりは少も大丈夫の御養生第一ゝ御事に御座候私なと灸事は一ケ月に十日酒もまれにのみのみ候ゝも五勺はかり尤與力共ゝ酒給させ候節なとは左樣には無之候酒をのみ房事も夥いたし度相成候得共老母のありて五十近き身其慎かならぬかと嚴制いたし候ゝ不養生いたし候義は無御座候四五日已前にも順右衞門龍介市三郎誠一をくりかへし二度まて劔術遣ひ遣し以前のことく歩合は參り不申候歟に候得共つかれはいたし不申候近頃力はまし候歟いつにても市三郎のまげ元結を必打きり申候是は樫棒と大刀にゝ近頃千本合候ゝ切返しいたし候故歟と奉存候右等ゝ事私より申上候は恐入候得共乍去私ならては申上兼候間御心の御保養と相記申候○けふは前にも記候通けしからぬさむさに候得共乍去泉水の鯉はね其外馬場ゝ參候得は一重さくら開申候いつしかと暖氣に相成居候と相見申候

朝さむく霜はおけともはるなれや馬はのさくら咲初にけり

ふるさとの比えにもかくやさくらめとみつゝそ忍ふ春日根のはな

なとゝよみ申候當年は當月十五六日頃出立にてよし野はつ瀬多武のみねへ參り候積に御座候追々寺院幷百姓共ゟ伺出申候是は旅中のたのしみと奉存候御用向にゟ吉野のはなを見候とは珍事のうちと奉存候○今日与風禮と申候ことを七律に賦し申候右は私と新右衞門とのいましめに御座候かゝる詩は上手にても理學風の詩と申候ゟ詩人はわるく申候間拙咏にては一見にてけろ〳〵なるへけれともいましめにはいたし候積に御座候

一敬形容千趣節昔人由是致心亨曾參臨死屏（シリヅケ）華簀子路棄軀整緇冠能祛邪

魔白虹劒忽治傲疾紫霞丹與君以禮爲舟楫共渡（ウン）波濤官海難（キナ）

是は聖人の天より授りし至極のみちといふは書經の洪範なるへし夫に敬するに五事を以てすとあれはいろ〳〵說はあれ共敬は聖人の道上みも下もゝこれ一本の道具なるへし禮といふものは其敬のすかたにあらはれ候ものなるへし夫故に孔門の人々みな禮を以的としてみちを得たるか也顏回の非禮みることなかれの章にてもみるへし夫故に曾子は臨終に禮にたかふとて華やかなる大夫のゆかを退そけ子路は殺さるゝとき曲りし冠を直して殺されたりかゝるものなれは敬は百邪にかつともみえていか樣なる邪心をも敬の心起れは卽坐に切拂ひ禮といふ藥あれは高慢心なとは直によくなるへしよつて新右衞門われと禮を以船ともかちともしてとかくにこの御役の海のあらなみのかたきをも無事にわたるへしといふこゝろ也今日与風こゝろに浮みしまてを並へみし故にいまた物にはならねともはなしのうちに記す也追ゟ霞舟先生の删正濟しあとにてよくしるしてまいらすへしこれはわかいましめをおもひ附たれはわするへからぬやうに詩に作り夫をまた新右衞門にも贈つもりなり亭主の好める赤き帽なるへし御笑あるへく候○手のいたみかすにてたて二度にて全快也赤紫のあざ少もなく消たり酒かすの上品神のことし

○二日　晴さむし　されば共よほとはるのいろと成れりけふはひゐな祭のしたくとておさとはしめみな重詰の世話する也ひゐなは三寸はかりの内裏さま一對あり夫をとこの間にかさる也御なりよりは白酒は多く召あかります也江戸と同しく三升也こゝの白酒は二百八文也江戸の初霜といふ白酒位より少々よろし豐嶋やには不及也ひゐなの御膳といふものは御椀はなし小はま栗の具にていにしへ濟しを寶暦の頃より下々にてもいろいろの器出來しよし也俳諧に

はまくりてあけるか娘氣にいらす

とあるは寶暦の頃のことを申せしよし也おさとかかみを結ふに白毛を毛ぬきにてぬく也其ことを

怪問鏡臺藏鑷子言尋華髮理飛蓬可憐老婦猶春意竊覆衰容媚此翁

この戯に題せしを講してきかせはこゝとなるへし歌にてはかゝることいはれぬ詩を一德なるへし絶倒○死罪のもの三人あり内貳人は十六と十七になるものの也よほとよくみゆるやつ也非人手下より段々仕あけにゐ三度め四度め也助けたくても仕かたなし可憐もの共也

○三日　くもり　上巳之禮に付表之居間は儒者醫者并古梅園等之町人いつる醫者之内にも花井隆助は奥へ參る白さけなと給さする也與力同心は大書院にゐ禮受ることなり○よし野丶巡見近きにあれはいつくの山はかく也いつくはいかにと日ことのはなの樣子はつかに一枝つゝ折來て注進する也一目千本といふ所ははや咲初たり谷々の名ある花ともはいまたひらかすよし野のはなみに行といふも御用にゐ花信のたよりを聞て行なと無勿躰こと也○ひる飯に魚類ありさくらさくころより魚はあされて味なし中野のかたは海邊にてけふの潮干はことに賑ふよし也いはゆる住よしのはまも也ひる後に成用人給人の妻共來る其のちにおさと屋敷内のいなり詣いたす供は民藏也女共歡ひてわれも〳〵と行也われは表之居間にゐ書をよみて居たりしかるにたのみます〳〵の聲することしは〳〵也不思義におも

ひて所々廻りみるに宅に一人も人なし只われ壹人也市三郎は俊藏方ゟけふは別段なれはとて遊ひに行父上母上はおさとゝ御同道也よつて殘れるものわれ壹人也乍去御奉行さまか臺所の取次もならす庭内所々尋まはれ共兩所之いなりにては往返四五町以上のみちといふ屋敷なれはなか〳〵しれす畢竟ならに客といふことなく犬なく盗賊といふこと奉行所におゐては往古よりなきことなれは土藏にてもいつくにてもゞりなしといふ仕來にてもとより火事もなき國故かゝることのことときこと出來し也

○四日　くもり又雨　庭によほとの築山ありきのふはそこにて夕かた遊ふ其築山の下はよき芝原也父上なと其芝原にて女共御相手にて御けんきよろし日くれかゝりけれは松葉を焚て燭臺のかはりとす至ゟ明也燭臺ならねは蠟そくの儉約也燭臺十本よりもあかるかるへし馬場のさくら開けるもあり開かぬもありこの頃は一日に一兩度つゝおさと同道にて馬場のはなをみる也大成さくら十本はかりあり

○五日　晴　一乘院宮二品　宣下有之候間右之恐悦として參る今まて紫衣は不被召候得共今般之　宣下に付紫衣御着用也　先帝御遺服之御直衣御拜領にゟ右を御ころもに御直し被召候ゟ春日ゟ初ゟ御拜有之候と之事也○今度は宮も正月ゟ暫御上京也其内御親敷御參　内もありける歟なり當　禁とは御兄弟故なるへし當　禁の御庭に垂絲櫻のありしか枯たれ共御あと植の事六ケ敷と之　叡慮ありけれは　一乘院宮より御内々御進獻ありしに　禁庭にても殊　叡感ありしと之風聞儒者のはなし也京都の御樣子おもひやるへし御儉約なるものの也

○六日　雨　きのふ一乘院ゟ今度御大禮之賀として罷出たりしに鴈之間の次笹之間といふ所ゟ御通しありて常に御目見する震殿といふ所は御差支有之候由にゟ替席に成御酒御吸物被下之直に歸宅いたし候積之處參殿之由御門主御承知被成久々御逢不被成候間平服に着替候ゟ震殿ゟ罷出候へと之御意にゟ則震殿にて御逢ある俄のことの御樣子也御菓子御酒等出

候ゟ御庭のさくら宜候間見候へとゟ御意にゟ御先に御立被成候間恐入候間平伏いたし御受申上御跡ゟ所々拜見いたす御築地傾き檜皮ふきの御屋根等もりて恐入たるさま也御庭は可成にゟ御泉水に船二艘いれあり八九尺はかりの瀧あり的場ありて手入ある大名の庭ならはよほとの事なるへし御泉水へ廻廊かけわたして月見の四壁なき臺ありこの臺關東にはなきものなるか上方には多き也御もの見へ參り候へとゟ御意にゟ御案内被遊故に御あとより參り昇りみるに興福寺の草はらを見わたす所也近頃出來ものとみゆる也こゝにて樂をすれは人恐れて近邊の酒のみ遊ひ居るものなと遠くへ參る故に興を却ゟ失ふなと御はなしありき御庭を御歩行被成るゝころ曲かと或は殊更御意なとあるうちは地上に平服すること也御門主は白綸子の御召物にゟ紫の小柳にしろく庭たつみの織出せる御袴を被召たり御門主は平日殊ゟ外御長髪故寒山拾得のことくなれ共御いろ白く美僧にて被爲入故にちと菊慈童めきたるかけふは二品　宣下の被爲濟たる故歟よく御さかやきを被遊たれは並々の僧形に被爲成ゟ却ゟ御美僧ゟ御姿の減したるかことし三年來正月其外共に御さかやき被遊を拜し奉るは今日初ゟ也夫より元ゟ震殿にて御酒被下われ二品に昇進せし時の酒宴に用ゆる盃なれはわれにとらするとて源氏畫のある磁盃を被下たり勿論被召上たる御盃にて御みつから御酌なし給ひし也不相替御樂ありて御門主は太鼓琴横笛なと被遊し也われ御家來共に向ひ私も樂をいたし度ものにて候今より學ひてもなるへしやなといひしに御門主の被聞召てわれは官家の外の慰ならねはこそかゝることも好めり關東の人々は武門を以官家を守護すること其任也しかるに樂を成し堂上めきたらは武士弱くなるへし武士弱くなりては官家の御爲にも自らよからぬわけ也平家の士共か弱なりしさまをもみよよつて予は左衛門か樂を學はむといふは却ゟ感心せぬ事也この藝は堂上或は宮方等のこゝろゆかせの慰とおもふへし武士は第一に剛毅ならてはならぬもの故にかくいふ也この頃もこのこと京都にて

鷹司關白とこの物語せし也猿樂の太鼓なと北方殺伐の聲あるなといふなれ共却ゐそこか武家の樂には却ゐ雅樂よりもよかるへしとおもふといふ御意ありて与風樂のことをいひておもひもかけぬ正大成御高論を承りて不覺汗背をうるほせし也ちと法親王には御人材過る也可惜御事也此御門主御幼年とき乳を上ケ奉りし姥々今もならに居る也御門主へ御さかやき御湯のことを御家來より申上ゐ御聞入なきときは其姥々か申上れは必御用ひあると也いたくかの婆々を恐れおはしますかと家來なと密に笑ふといふか實は御性質よき故なるへし兩三度もさかやき或は御湯之事申上れはいや早く申にまかすへし又婆々方ゐいひやりくるゝなと御意あるよし也御おとなしき御こゝろあるとみゆる也この御才氣にて御乳人を恐れますといふ御樣子よき味也

○七日　くもり　庭幷馬場のさくら今さかり也庭の築山の上にさくら大小十本あり馬場には大木十本あり雪のことくちるも半にひらけるもあり

て馬場の末のいなりのみやしろある山の上よりみるけしきよし可憐けふも朝はふりてさむし晴なはこのはなをあたにはみ過さしとおさとゝけふもかたりし也夕かたおさとゝ兩人にゐ庭へ出いろ〳〵とはなをなかめて歌のこやしをせしか一首もよまさりけり○此節の魚類高直なることといふへからす小ひらめ九匁五分たこ一ッ十五匁也何分食はれす

○八日　晴　至ゐのとか也けふおさとゝ朝さくらをみあるくにおさといふこのはなにして酒なかるへからす昨年忠四郎か方ゟ拜領物の初穗をもらひていつか魚をと存居候けふしかるへしといふ東坡か妻の仕舞置たる一升の酒にて赤壁の遊ひを助けて千載へ利口の女房の名をあけしにみあはすれは汝か才萬々なれ共可惜われに赤壁の賦のこと夢ならてはおもひもよらすされ共ならは酒やすけれは汝か藏する所の物壹升酒と肴になるへしわれ又禁を破りて面をして赤壁たらしめむ奇也々々と申たれは其こと御隱宅樣ゐ入御聞しにアッと御賞しありてそれ田樂よからめそれにて

雅樂にも猿樂にもかえむと〻御意にて夕かたより庭の花下にゐ其たのし
みありき鯛一枚十匁の奢也芝地にて茶を烹田樂をおさとやく山上へ田樂
をもち來るなとみなめつらか也き上巳に作りたりし詩あり

戲集松叙烹酪奴又架竹柱造奇廚假山一仞池三頃小草成氈助老軀
七十老親猶鑼鏁醉來伴婢競奔馳豚兒苦酒纔閑步花下攜筇吟小詩

親在東西遇佳節愛余共酌又懷余斑衣願速得天眷雪筍氷魚供一盧
（一所ニ江戸ノ母上ト孝行チシタイ　老子ノ衣類）

○と不取敢詩を賦して江戸の母上のことをおもひ奉りてお
さとゝ二人馬場のさくらをみしかけふ又しかりよつてそれをしるせりよ
し野より再注進來る花明日盛なるへしと申來るされ共十二日の觸出しあ
れは仕かたなしけさ市三郎に槍の突身いたし遣すかまやりの突身十二三
年ふり也乍去いまた市三郎には奈良奉行中は澤山なるへし同寸の仕合を
してみるに是は平日すこきをする故か昔にかはらすとおもふかことしし
かしいかゝあるへき

○九日　雨　きのふ日くれて例〻通火をたきてはしめて花をみたりめつら
し扨又龍介といふ家來奇人也きのふ七ッ頃に馬場ゟ行みしに袴をも不着馬
場のさくらのもとに二尺はかり成筵を敷て只獨はなをみて余念なし側に摺火
打一ッあるはかり也きのふは前に記す通なれは庭内には田樂なとあれは夫
を一さらに一德利をもち行て遣したるに厚禮をいひき夫をひとりにゐ其酒を
給なから日くれまてそこにはなをみて居たり定ゐ歌よみたらむなれ共けふ
にいたり其ことをもいはぬ也よほとの奇なる男也今般よし野の供に行てよ
き歌二首よめたらは一生涯の望たれりとこのほといふよし市三郎かたりき
○十日　雨　吉野巡見近しといふに日々の雨にてこゝろせかるゝこと也
此ほとは江戸なとより見物のもの多來る也○夜に入候ゐ二月廿八日附〻
宅狀相屆く母上樣の御不快も御床上に相成候由恐悅〻御事也其外御一同
〻御無事目出度候太郎丈夫〻由悅敷奉存候順右衞門方〻兒江戸出立〻節
の太郎位に相成候ゐ且よほとよく太郎に似たるかことしよつて遊ひに參

ることに必おさと太郎のことをいひては落涙する也母上様は御快氣候はゝ御足をはかりに所々へ御佛參第一と奉存候つとめてたんと御歩行被爲在候様奉存候江戸狀參り候度々に夢のことくにゐ三日はかりはこゝろ必動き申候右にゐ又此狀を母上の御覽ありて奈良のことくなるへしやと歎息仕候乍去少も心を動し不申候ゐ天道まかせと決心仕候○新右衞門へ兒孫如何に候哉はや笑ひ候義と存候出生已來よきこと多候間福多き兒と奉存候丈夫何よりへ義に御座候○新右衞門ゟへ書狀へ内茂兵衞脇差へ事御尤に御座候なるほと捨候様にいたし可申候○ねりくらの義不思義也今日一くら出來候ゐ參り候間人ゟ遣し候は惜くいかゝ可致と存居申候間早速に取入候ゐ進し可申候右は精牛皮を精練にいたし候ものに付先ッ江戸に類は有之間敷と存候見場よからす候得共實用に心有之候ものは至ゐ悦ひ候品に御座候上方筋へ皮多き所に良工有之候間出來候義に御座候○拙筆懸御目候處段々へ御說御尤に御座候少々酒を被下候節へたのしみ書に

候得共書をかき候ゐ遊ひ可申程に氣けんに成候義無之候間壹ヶ月に一度へ手習にも相成不申不精へ手習子に御座候御笑可被下候今少弱候とも柔に認可申由忝候右に付工風へ筆可給由忝候印へ義被仰下是又忝候印章へ義條印は論語の士は剛毅ならすはあるへからすと申候字にゐ末へ印章は二ッへ從五位下左衞門尉源聖謨印といたし度候近便に字しるし候ゐ可參候○日記へ内北條へ病氣可惜々々乍去御代官はかくこそありたく候此人立派成武士にゐ大事へ義を外に不申人と存候間別ゐ惜候義に御座候人は百年へ壽を五十年にゐ宜候立派に御用立死申度ものに御座候夫も運なくては出來不申候丈夫ならては出來不申候間養生第一へ事に御座候○書へ事に付存出し候は少にゐも是は可認と存候はみな不出來に御座候先達ゐも初瀨の僧正かもとより短尺を被乞候ゐ認遣したるに所々より集候ゐ紀貫之に手向るといふ事故に少々氣つまり候ひしか大不出來に有之候深山に寶あり寶に心なきもの得之と申候義能敎にて聖人の無妄にも近きこと

にて無妄を史記に無望に作りあり何事も望ありては不出來なること必定也書家は書に骨を折儒者は書に構はぬ故にいにしへの人みな儒に能書あるといふも申サは先ッ無望の一端とも可申歟に候○龍野侯の勤謹和緩の額出來候由諸侯の書の位あるかことく無貪着も矢張前ゝ意有之候故に候其本源をたゝし究候はゝみな多欲の二字なるへしと存候義に御座候○母上猪口にゟ二ッ御酒被召上候由恐悦ゝ至何卒御夜食に小猪口に三ッは必被召上度ものに御座候○廿二日廿三日出火ゝ義たゝ事ならす驚歎々々○岡崎ゟ御頼置ゝ中書忠勝朝臣甲冑ゝ目かた御申越悦服いたし申候過日申進候藤堂家の士の甲冑と同目かた也忠勝朝臣にて惣目かた貳貫五百五十目也今の人の甲冑重過候義を常に申せしに暗合也

○十一日　雨　御用日也明日出立にて來る十六日までは巡見にかゝる故にこと多し○よし野へ行にみちの紀行なといふことはもとよりうるさし國の風土みむこそ專なれとおもひて其ことなしされと其ことしるさゝらむには例のはなしにかふる日記の詮なしよつて出まかせを記す奈良奉行の預しることにてはつせよし野多武峰の寺〳〵みめくることありむかしよりのためしにて必花の頃になむ行ことに有けりことし二月の末つかた其ことみちすからの村さとへ告しらせけり三月のはしめによし野よりは一目千本といふ所のはなをはしめこゝの谷かしこのみねの名ある花どものまだつほみなるを一枝つゝ手折おこしていつの頃にや行迎ふらむといひ來りぬ其ほとは予もしらねは與力らにとひはかりて十二日にならをたちて行へしといひやりたりよし野より手折こせし花のまたつほみなれといと〳〵めつらし

みか月をめつるこゝろにみよしのゝ一枝のはなのつほみをそみる

つほみよりいろもかをりもまさるかなよによしといふみよしのゝはなはるかせの吹さそふともさくらはなわか行までは開かすもかな

三月七日によしのよりこの頃の雨にて俄さくらはひらきにけり九日の頃

やさかりならむといひ越たれとはやみちのほとの畫餉する所とまりのところ〳〵定めてふれしめし後なれは俄に改めむにはさと人らかうれひとやならむとてやみにけり

大君のふかきめくみの末くみてはなにもかへす民いとふかな

これも又あまつみそらにまかせてん山さくら花ちらはちらなむ

こたひわれにつき隨ひてよし野へ行ひと〳〵與力同心なら町の年寄町代なといふものよりわか從者の末々までもかゝなへは百人にも過ぬへし其人々の朝夕の餉よりよるのものまてみな里人のあつかりものすることにていにしへよりのためしにてはつかに薪と米の價とらするまてなれはいとこゝろくるしよつてこたひはかねておきてすることく其所にあらぬ魚めつらかなる菓なとはさらにもいはす餉の添物もことそきて酒出すことをもいましめさと人に其こと守らしめむとてつはらにかいつけて出さしめたりさと人よ怪みなせそむかしよりわか行むかふかたはかく也

さと人のつかれおもへはよしの山花みかてらも行うかりけりけふまて雨ふりつゝきけれは

よしの山はなみむころのとけくはけふはゆるさむ雨降らはふれ

我めつるこゝろしゝらは芳野山雨にぬれつゝ花もまつらむ

春雨にはなやいかにとよもすからこゝろにかゝる軒の玉水

かくおもふまゝを記しかゝりけれはおさといふ明朝の御出立は七ッ時也はや五ッはとくにうちしと思ひ候ひぬと聞て驚て臥りぬ

○十二日　きのふよりの雨にてけふはいかに〳〵といひあかせしか我大和へ來りて殊更に出るに雨ふることなけれは其患あらすなと與力同心らか謾言いふを余所に聞てけふは雨したくして起しに幸ひにいまた雨ふらす一天墨を流せるかことししかるにおもひの外にふらすして九ッ頃より快晴と成れり七ッ時過に初瀬の本陣へ着しぬ○けふは南都より村々にこと〳〵く觸置たれは村々のもの共領主地頭ゑ家來等案内あること例のこ

とくなれはしるさす○なら町より植村出羽守か御預所の添上郡なる今市村の帶解の地藏といふありその前を通れは住持門前へ出て下座することなるか早かりけむ履は門に及ひ袈裟は門前の町屋にて及ふといふ位の躰にゐ欠附けるか間に合はすして其こと家來共に詫て行たり夫々柴屋村といふ所の寺にて小休をなす又在原寺の門前にて小休也この在原てらといふは石上村といふ所にていそのかみ村とよみいそのかみふるの中道とよくうたによむ所にて則ふるの神社其近きにあり夫々丹波市といふ所にいたるこゝは藤堂家の領分にて其大庄屋松屋孫兵衞といふものゝかたにて小休をする也丹波市といふ所はこのわたりにてはよき所にゐ歌よむものなと五六人もあるよし也こゝのあるしはいぬるころわかたにさくを遣したるものと龍介のいひきよつて文事あるなるへしかけものなとこゝろしてありわか休みし所には中郭子儀左右蘭亭曲水の密畫にて應擧の畫贋物にあらす其余右にて推へしこゝにて菓子を出す也かゝることとみな奉行々巡見のこと記せる舊記によりてすること也こゝをたちて城上郡釜口村長岳寺にいたるこゝの寶物は誰かかた物通しの矢を能登守のり經の矢也とてみするにいたる其余みるにたらすヲコト點といふ古き法華經あり光明后の御筆といひきこゝより柳本といふ所にいたるこゝは織田安藝守か陣屋にて郡奉行等罷出て給人共披露せり夫々三輪村にて晝餉たうへたり三輪村は清水の御領知にてよき村也三輪村には三輪の神社ある故にこの村名あるなるへし三輪の社は山を以神躰とすやまけしきよき山にゐこのわたり四五丁より十二三町はかりか内に　神武神武帝の御舊蹟たるうねひ耳なしの山ありみな古學者の稱する所也三輪の神は日のもとにてはしめて酒を造り給ふといふ故にけふわれとゝもに來る明敎館の儒員佐々木育介に先生この山はもし劉伶なとのうし神ならすやといひしに大禹の曾ゐ車を返し給ふことはあらすやと答へし佳答世説にのするも可也なといひてわらひし也それより三輪神社へ參るみやしろは至ゐふるくなりたれ共境内等廣し

御朱印六拾石也といふこゝにては拜殿のごとくなる所左右へ廣くして社の右に神子左に神主共列坐せり奉行は拜殿にて拜し畢るその神主らか居る所にいたりて坐すれは神主神前の幣をもち來りていたゝかする也ならの社にては拜する前に幣をいたゝかするをかく相反するはいかなることかしらすやかて神子の舞ふ也傳言（イフ）　淨御原の天皇（天武の御こととなを申す）よし野にて天女か天下りて

乙女子かをとめさひすとから玉を袂にまきてをとめさひすも

とうたひけるより五節の舞ひめのことはしまれりといふが定め其余韻あるへしとおもひてよくみるに神子五六人四十はかりより十八九歳なるか遊子の青樓の一大座とかいふことのあるときみたてすることく並ひ居たりみな紋附のもやうものを着てこゝをはれとかさりけれとも白きもの塗しは萩の露にはあらねともさはらは落むはかりにてひじきか人參の白あへならすは何かしの本尊の彩色のはけたるか如き女共にてかしらにはく

し笄なとさしかさりいさゝか艶態あるまゝ〳〵恐るへきさま也其女共か五色の絹を三四尺はかりつけしすゝをもちて舞ふ也樂は太鼓につゝみ鐃鉢とかいふ銅壺の蓋二ッ合するかことときものをたゝき夫に合せて舞ひ歌もあれとわからすこれを笑はすにきくこと奉行代々難しとする所也なるほと尤也泥塑人のことき明道か銕漢といはれし劉器士ならは知らす實に噴飯の極なるもの也そこに見居たる人々段々と逃けて樂陽春白雪に似たるかはては二三人に過ぬかことくなりし也われもいくたひか咳はらひにてまきらして漸にすましたり其こと畢てのち神子いかなる式か鈴をもち來て露次のからかさのことくセイガンといふ身ふりにて我前へ出せり鈴ならは男子より女のかたへセイガンにつくへきはあらすとはいふへからされ共女のかゝるさま尤奇也さてこゝに大塔宮の御物といふ矢母衣といふものあり籠に母衣を附しものにて夫に母衣武者のかけもの添りこれは大塔の宮の御像にて前の矢母衣一同熊澤了海の納しといひ傳ふるといひぬまことにやもしや八幡殿の

圖にて荒井白石などの納めしを誤り傳しにはあらすや尙考へしこゝの別當大御輪寺の本堂は聖德太子の御建立にて其内たら寺ゝ一間は　崇神天皇の御坐所まゝ也とて板式に神の御足跡也とて〆結ひし所あり本堂は佛法わたりし後のものなれは其板式はかりはいさしらす千五六百年に及ふものいかゝあるへきみわの神杉二もとの杉衣かけの杉といふものありこれも古木なれ共後の物なるへし大五輪寺にいにしへの杉のかれ木也とて板のこゝ古木一ッを納あり右ゝ板まことならは今存せる杉はのちのものなるへし万葉に神杉といひしもの其後又千有余年をふることいかゝあるへきこゝの一覽物畢ゐ平等寺ゐいたる　御朱印八拾石也寶物しるすにたらすそれゟ初瀨村にいたるこの邊みな名所にて佐野のわたりなといふ所其外上古天子の猪かりなし給ひし御かりのゝ舊地也今は山上までも田に開らけて鹿なと少しは居かはしらすなか〳〵猪かりすへきやうなし夫ゟ初瀨村にいたるこゝの入口に初瀨の長谷寺の年預出迎して代官のこときもの貳人先立せり初瀨は五百石の　御朱印なれ共初瀨町二十町余に及ひ家數千二百軒余といふにて其大なることをしるへし町はかりの人別關東ならは一万石余なるへし初瀨てらは清少納言か曙冊子其外古今集などにみゆるにてもこゝの觀音は往古より人の信仰することしるへし其頃より今にいたつて繁昌せり堂舍は　大猷院樣の御建立にて立派なるもの也舞臺七間に九間ありてそこのけしきいふへからす元來はつせは万葉にもこもりくの初瀨とよみてこもりくとはこもり國といふことにて山を以包みたるかこときところ也其山へ觀音を安置して堂塔多く建つらねたれは勝區絶景いふへくもあらすわかみしうち第一の勝地の寺也これをたとふるに細密の明畫の山水に日本のさくらを夥植たるなれは虎にて翅あり卑諺にいふ鬼にて鋏棒を持たるとはこの山のことなるへし元來花を多く植たる所にてけふは半散も盛に開けるもありていささかのちりなきやう掃除したる清淨の佛地へもゝさくらの散しけるは佛のみちにていふならは天よりはな

のふりしといふへく儒者風ならは仙境ともいふへしこの寺大伽藍にて坐敷なとけしからす廣く中奥といふことき所にて寶物をみする也其内　東照宮の被下たるといふ御紋所のまき繪あるあしろの御團扇　聖武帝光明后の御自筆の法華經あり軸にても表具にてもけしからす美事也かな物高ほり也めつらしきもの也この經文のこと菅相公の御自筆の緣記にもみゆ疑なかるへしこの寺に寶物多し其内大切にして住持ゑ僧正必みつから携出て奉行ゐみするといふは菅相公の御自筆の初瀨の緣記也好古小錄なとにけしからす賞しありてこれを以海内一品の無疑ものとす奈良の般若寺の緣記是又菅相公の御筆なれ共申サは般若寺のかたは今世の祐筆手といふものなるへしといひきいかゝあるへき乍去二品別人のことき御筆也はつせをまされりとし般若寺をおとれりとすともいひかねしもの也般若寺ゑ方字も大きく習ふにはよきかことき御筆也さて又宋僖宗より納られしといふもの數品唐より納めしといふもの數多あり其内奇といふは鼠燈臺といふもの也これは燈臺の上に鼠一疋油を甜らむとする躰にてのそみ居る也燈臺の油一合減すれは鼠の口より一合の油をはくといふことき仕かけにせしもの也是も今は油にては奉行なとゑ一覽の間に合はぬによりて油さらへ水をつき鼠へも水をつき置て水からくりのことくなるものを油さらへ仕かけて油さらの水つきむとすれは鼠の口より水のへりしほとは吐いだす也わかみるうちに十たひはかり鼠の吐し也寺僧いふ水野越前守京都ゐ取寄ありて二ッまてつくられけるか出來さりしと也いかにやありけむけふのみちすからのうたよまむとおもひけるに初瀨寺より儒者育助を以たにさくを乞けれはとりあへす

この山のはなをみるまそ身は更にうきよの外のものに有ける

これは初瀨にはなの頃まうてゝとはし書せりちりかたのはなもありけれは

みねの雲よ半のあらしにちりはてゝけふは苔地の雪と成ぬる

としるし遺したりこのはし書は花のちりけるをみてとかきけりけふ興中に〻張雪菴か漢業の詩をみて解しかねぬ候ことにおもひけれは雪庵か韻を次て

龍祖潤如民所悅。沐猴何敢衆良臣。騷人不識多奇計。徒論黃金四万斤。

といふ詩を賦したり其外けふの詩をうたをとおもひけれ共夜ふけ家來の歎かむとするをいとひて止ぬよつて一二をしるす

山さくらみよし野に行みちすからおり〳〵迷ふみねのしら雲
麥と菜にみとりくちなし染なせる田のもはるのにしきなりけり
やゝはれむとしけるとき
山裾になこりのこしてをちよりそやれはれわたるはるさめの雲
みちすから陵かとおもふもの所々にあれともしれる人なし
こゝかしこ田面にのこるもり村は昔の人のみはかなるらむ
見わたせは畝火耳なし三輪の山鼎のなりに立ならひけり

五畿内志ニ古墳何ケ所トアルモノナルヘシ

みわの神樂うたを尋ねしに旅宿へうつしてこしたり
千はやふる神のねかひの歌かつらちよやうしやうてんに不老の門其外
の門戸には霞のみまく引まはし五葉の松をうゑ（生）給ひ其うちに三ッの鳥
居を建ならへしらごへいちやうにかさるもの三百六十余神の神にごく
燈明を備へ奉り君を守らせ給へや榊葉に注連うちかけてかさりもの長
生殿に不老の門其外の門戸には霞の御まく引廻し君を守護し奉り天照
神の申（マウス）にはしきをつくせし築山の千載を祝ふねかひとて五葉の松を植
給ひ東を春とおほしくて櫻柳にいと薄く南は茂る夏こたちは山のほと
ゝきす西にきかふといふ嵐山のもみちの色のおくにまつもおのれと吹
返し三輪のさとの梅かゝや
○十三日　風もなく雲もなし　天氣いふはかりなし拂曉にはつせをたち
て武多峰にいたる其みちにて櫻井といふ所にて小休いたすこはかの楠父
子か忠義のいましめありけむさくら井のさと也や否をはしらねともよき

里也このさとはつせと多武峰の兩山の間にありて關東ならは至ゐの瘠地なるへけれとも上かた故にみな屋を潤せりこゝの大庄屋か宅ゝ小休すれは奉行ゝは菓子幷提重に酒を出し家來の末々にいたるまてみな切飯を出す例也朝四時頃なれは予は何も食せすこの邊は海ある所ゝはいつれも十里余あるといへ共提重は鯛切み等にゐ立派なること也是は與力共ゝ遣す是又例也われこのたひいろ〳〵にこゝろを勞して巡見の入用を可減といたし既に獻立までをも爲出たれとも一向にきかす更に捨置たらはよからむをといかにも殘念におもふ也奉行ゑ巡見ゑ小休に成或はこのさとは酒此村は切飯といふの類みな〳〵規模と成て斷を受れはいたく恥て市にてむち打たるゝかことくおもふの類也と也上の德澤かくも末々ゝ及ふことか難有也堯舜の治といふ共今の　大日本に過へきことはあらしとおもふ也そこより多武峰にいたるこゝは境内六十町はかりありて　御朱印三千石けしからぬよき寺也この寺をみれは日光をみるに不及と土地にてはいふよし也これ全井中の蛙也しかしよき寺也境内入口に代官罷出夫ゑ追々年預其外衆僧共出る坊舍四十二ヶ院あり拜殿には尊順親王の三十六歌仙かけありこゝにて神酒を拜戴いたし寶物をみること也こゝにはいにしへより名刀多し神刀三千二百こし余ありて　東照宮ゝ藤四郎吉光の短刀奉りしも其内也と寺僧はいふ也そはまことか否をしらすといへとも御代々樣ゝ名刀を奉り普請被仰付候へは其御禮として又刀奉ルみな近きためしあるよし也三千二百こしのうちより奉行ゝ爲見ものは天國の短刀七すはか銘り在　平信長朝臣より奉獻無銘の刀一振豐臣殿下より御奉納國行在銘以上白さやにゐうちおろしの如し天國は少々やつれたり天國の在銘初ゐみる銘至ゐよろし東照宮ゑは御拵附の御短刀壹尺三寸はかりひら打無銘にゐうぶなりにいふにも不及相州の上作也直胤上出來のことし　東照宮御獻備のまゝ研なしと云御拵はろ色さやビジョかね附にて御つかは短き方にゐ出しさめにて御目貫なくさめの一二三のはしりまてを殘してぬり其余

はビシヨかねのわきの方ゐよれるさまなとみな今の目利者のさす短刀と都も同しさま也此三本少も疑ひけのなきものなれは驚歎數刻に及ふ幸三郎なとのことき好めるものにみせたしといくたひかおもひし也あまりのことにて恍惚としたりこのてらよき寺にも料理向なと丁寧也さて又こゝに一條禪閣の韓文にも辭書被成たる鎌足の朝臣の此山御取立の緣記あり書は土佐の光信の極彩色なり禪閣の御書はシキシのことくにしておしたるもの也讃（サン）の類を打つけてかゝすかくするか古く多くある也わか方に寫し置たる藤房の像にて知へし此繪まきものは箱ともに美をつくしたるもの也さて又石燈籠に元德の年号ありて　後醍醐帝の御進獻（マヒ）ありかたは春日かたといふものにも梵字と日月のことときかたみゆみかけ石といふ類の石にてこけもなくさして古くもみえねとも六百年前のもの素より可疑ものにあらす并同し　帝より御進獻の銅燈籠あり損したる殘を手水鉢となしてあり

こゝは結界場もありて女人堂建ありさくら桃少々前かたなれとさかりと

吉野川上ミハキソ川ノコトシ末ハカクノシコト

いふへし吉野より五日ほと遲しといふ山水は所々に瀧ありて至もよしきのふの初瀨よりまされりやおとれりやの論まち〳〵也予か考にては風韻はつせに不及退こと三舍なるへしこゝより吉野へ四里半あり細峠といふ山みち至も嶮岨也きそのことしよつて武多（ヤマ）峰よりたちつけに成て歩行せり此山の下り口に中坊陽之丞家來罷出居れりこの邊中坊知行也夫か西谷村を經いも山の麓を過て吉野川を渡り上市村にいたるよし野川といふは河原とも百間余もあるへし大概まつ野路の玉川に似たる位の風韻にて一層のけしきあり水もまた倍せり上市村は山上藤一郎御代官所也いも山はみる所もなき小成里山なり上市村か十丁ほと行と吉野にかゝる也山のかひよりさくらみゆる也肩輿の戸を開かせてみなから行に絶妙いふへからすこれ上り口の一目千本といふ所のはなは一重なるか半うつろひけれとも夥シキ花なれは見所ありて只あきるゝはかり也こゝはよほとの山をみなさくらにしたるもの也何分たまりかね肩輿よりをりて歩行

せりみちよほと嶮なれ共少もこゞとをいふものなく別當草履取の中間まて忽に風流人になりてこのけしきいかにやいはむ畫のことしなと驚歎するもこの山の德なるへしまして心に一點の風流あるものは花のために狂せるかことしこの一目千本といふさくら林のうち坂のけしきよき所に毛氈を敷やすらひ所あり予しはしこゝにて所々けしきをみけれとも花のために魂魄を奪はれて一言のことなしこの一目千本といふ所は十町はかりの至ゐ嶮岨なる山みちの左右山谷ともに一重さくらを巾二三百間はかりに少しのすき間もなく植たるものにて藏王權現風流なる御神にて瘡かきを守るいなりへ土の團子を願ほときに奉るなといふ卑俗にかへて願ひことのかなひしものみなさくらを奉ることのよし一目千本八町七曲左右みなはなにて清香驚へきこと也かくはな多けれは遲速おのつからありてちれるはみちの雪となれるもあるにいまたつほみなるもある也こゝに氈敷て貳ケ所ありそこにてしはし休らひ夫ゐ段々のほり行て關原のさくらといふにいたるこゝはさかりいさゝか過てちる也そこを二丁はかり行て黑門ありこゝに吉野山の學頭出迎たりそれより銅鳥居にいたる御名は忘たり天子の　御震翰也こゝを過て藏王權現をまつり奉る堂ありこれこゝの本堂也それより吉野山ゑ内寶城寺に止宿寶物をみる　後醍醐天皇の御樂器あるのみ也こゝの庭のさくら眞さかりにていふへからす雪とも何とも辭を絶し名花也湯なと遣ひて庭みめくるに十三夜の月さゆるはかりにはれわたりみよしのゝよしのゝ山にて雪のことときはなに月のくまなきをみる奇中の奇ともいふへし谷川の音なと實によしけふは前々の例にて提重箱にさけを添てくるゝ所貳ケ所あり壹ッは與力同心共に遣し一ッはこゝにて開きて月と花をみなから家來共ゐ酒給させてわれものみきけふうたをよみ詩をつくらむには却ゐ興なかるへし只この月この花をみよとて五半頃まてはなと月とをみてうち臥しぬけふは所々歩行ゑ上に一盃をくみたれはいたく草臥てよくいねし也三年ふりにて刀を久々さしけれは腰はれて

○よしの山はるまたさくらはなに雪とはなくさえたるよさの半月かけのなを

○月にはよしのゝ山にたのもしむみなわかくしかくみ君

○みよしの野もひにおもかけのなくもりなすみよしのなとはなくもりなきとなけるかなみつる

關原のさくらは豐臣殿下御なみのあり所かも也

大に弱りし也

○十四日　快晴　至ゐのとか也拂曉に食事して吉水院にいたるこゝは後醍醐帝已來の皇居に成しところ也辨慶の間義經の間なといふ所あり其外義經の駒つなき松辨慶の力石なといふものありみな愚を欺むくものにて取にたらすこゝは狹き寺なるに　皇居に成しまゝにて存するといふにいよ〳〵恐入る也いにしへよりこのさまなるへし崖作り故に建たすへくもあらぬ也こゝに　後醍醐帝の御物多し北畠の職原抄あり至ゐ古きものにて實に北畠家にて書奉られしもしられぬ也いかにも古きもの也壺井鶴翁か考には元來は百官抄とかいひしよし考ありしかと覺しかこの書元本ならは職原抄ともとよりありし也なか〳〵近頃うつせし僞書なとゝは決ゐみえす幷年中行事といふもの至ゐ立派なる卷物にて書も見事也夫と一所になしてありその年中行事は露疑ふへきことなし　後醍醐帝の御文臺あり至ゐ麁末なるもの也今もよに被行竹を以作れる硯箱のことき造りかた

鶴翁か注寺
にてい所
とて
大にふ
にい
異な
り

職原抄夏藤
鶴翁ノ書フ
ト
チヨミシ
アレハコヽ
ノモノ古
書ニテアリ
ナカラ疑所
ノアルチ不
審スルも也

のもの也御硯箱は竹にてつくりよに被行ものは右ゑ御かたをうつせしものとみゆる也御硯石は端溪石にてうらに昆玉といふ銘あり　震筆也といふ御茶入あり今の世にある栃の木のひきものにて全に金的ほとのものにて内を黑漆にて塗しもの也箱根細工にて價二十四文に過へからすかくも御質素にありけるかと　皇居といふ所の今存するものと此等の御道具をみ奉りて落涙する也こゝに同し　帝の御木像あり御眼するとく眉の間に御しわをよせかの八字といふものある也御眼は世を御憤なとにはなきかと御在世のこと其外おもひ奉りゐ恐入し也御在世の御すかたをみ奉るかこときよき御像也こゝに楠正行のはらまき義經の刀なといふものあり行光の刀銘なともよくみえけれともさひて銹きうのことくはらまきはばら〳〵にてはつかに藍革威かとおもふはかり也夫ゑ櫻本坊にいたるこゝに寶物多し刀なと夥あり其内平安城長吉の壹尺五寸はかりの鐔物あるうちおろしのこときものあり至ゐほしきもの也豐臣殿下の御直筆附し天の半鐸と

いふものあり銅の鑄物のことしカンドフ挑灯といふものに似たり高サ三尺はかりの解すへからさるものなれ共珍器也夫〻如意輪寺ゟ行へきなれ共往來二十丁余なれは遠見を願ふ前々の奉行多くは遠見也といへ共こゝに必行へしと兼ゟおもひ定めしことあれは行し也みち嶮岨なる山をのほり谷ゟ下り行ことなれ共さくら夥さかりにて谷と峰といろを爭ふけしきなと中々筆につくすへからす其上に吉野は山々のみねいくらもありて其みね谷にさくらあれは一歩ことにけしき改り今みあげしをたちまち足本にみるといふかことき わけにゟ詳にかくもうるさしよし野はつせとは孔子に孟子老子に莊子なといふわけにゟ並へ稱しなからさらによりつくこともならぬわけ也吉野はさくらと山水の聖人也みな天爲にて少も人作めきたる味なし余は押ゟしるへしみな〳〵驚かぬものとてはなく一目千本よりも又奇成かことし其けしきとても書つくすへきにはあらぬ也辛して如意輪寺にいたるこゝには　後醍醐帝の御陵あり寺より二三十歩はかりなき數にいれとも強き梓弓万世くちぬ名をそとゝむる

正行の歌をみて　決死忠臣辭帝陵箭頭鏑遺不朽名攀古憶尋山麟寺泣向斷扉暮至誠

の山の上にあり三十間四方はかりにゟ御しるしの杉もはつかに枯のこり其外雜木立にて前に石の瑞籬（タマカキ）ありいかにも物さひし御さま也落涙に及ひ地に伏して拜し奉りたりその所ゟ十間はかり下り楠正行の毛墳ありこれはうち死の前に御暇乞として　御廟へ參り歸るさに毛をきりて埋たりし所也如意輪寺寶物の内兼ゟ聞及ひし正行の辭世あり矢の根にて黑漆の戸扉に彫しさまのつたなきかいと〳〵尊しうたに

歸らしと兼ゟおもへは梓弓なき數にいる名をそとゝむる

とあり其こゝろさしの程をおもひて涙數行下りて言葉もいてす實に仁のつくる義のいたるといふはこのことなるへし元來　後醍醐帝は暴逆の臣を君として誅給へることにて中興の御業は全からねとも露も道にたかひ給ふ御いくさとはいひかたき御事なり夏少康なとにも續かせ給ふへきを惜み奉りてもあまりある御こと也　聖慮數百年を經てとけ給ふにや今の　禁裏も攝家かたもみなこの　帝の御血脈なる伏見の宮よりみなつかさくら花昔しのはゝこの君の御はかあたりは九重にさけ

せ給ふと承るこゝより竹林院にいたるこゝはいにしへの住持弓の銘人にゐ卽竹林派の元祖にてこゝに其住持か書ける傳書二冊ありふるきもの也法師の弓寶藏院の槍と同しきもの也いにしへのことおもふへしそこより世尊寺に至り寶物をみて夫ゟ子守社にいたるこの間拾四丁あり其内八丁はかりの坂あり至ゐ急也みな大に困し也坂は猿牽といふ所也そこより向ふの山をみれはさくら峰より段々になり咲てこれを瀧さくらといふ麓のかたをなひきのさくらといふこれは山のこしを雲のことくにはなのめくりさく故に名つくるよし也子もりの社に大塔宮の紅地錦の御陣羽織あり又忠信の太刀あり靜の長刀といふものあり是は古き長卷をいひ傳の誤りし也至ゐ古くみゆる也一躰長まきは三百年來のものとおもひしに刀匠直勝來國俊の作ありといひ且この長まきをみても六百年來のものとみゆる也いかなれは太平記なとにながまきの話なきや不思義也そこより穢拔塔にいたるこれ義經けぬけの塔といふもの也大みねの行者の初ゐゑ行する

蜻蛉の野にあるゝ瀧なれはかなのしの瀧なるへふ字音にて誤たり蜻蛉の野古き名所也

所なれは垢離の類にて穢拔なるへし義經の蹴拔て飛しなとの俗談辨するに不及それゟ苔清水西行室にいたる庵室今に存せり八疊一間ほとのところ也さくら林の中にありさくら此邊は更にひらかすところ〳〵彼岸のさかり成かある也この邊は至ゐ春遲し四月近くならねはさかぬといふ也苔の清水は山の井といふもの也これゟ安禪寺にいたるこゝにて切飯丼下ゲ重箱に酒を添て出す也夫を開て與力其外ゐもわかち遣すこゝにてしはし休み山中を五十丁行て西河村清明瀧をみる瀧十六丈八尺といふよき瀧也奇觀といふへしそこより二三丁はかりにゐ大瀧村といふに至りて晝飯いたす八ッ時頃也この邊は深山幽谷皆畑の山家なるに休になりし松屋德右衞門といふ宅は坐敷の額松廼屋といふ三大字を正三位有功かけりかけ物は本居宣長かよし野の瀧にさくらの流るゝといふことを長うたによみしなり都ゐみな山家には驚るゝことはかり也龍介いかにして開けむうたよむとて短尺をみせよといへはしはしありて

賤か家の庭に咲ける花たにもけふそ雲井の袖に匂へる

正安と書て出し又

くも井まて匂ふか庭の八重さくら花もことしそとき得顔なる

と女の手跡にて記しうらに直子とあり山家にても驚かるゝことあるもの也かへるときに料帋硯をとりて戯に

みよし野のさとに住ぬるたみなれはにほひそふかきことのはのはな

と書捨たりもとより名はしるさすこの村に大瀧といふ所あり峩々たる巖窟をめくりて吉野河なかるゝ故にはやせといふものに成たる也そのよどみへ人足共飛込こと也これをみる又大筏十三より十五まてつゝけたるを其さかまくところをのりおろす也長サ六十間も其余もあるへし夫を屈曲したる岩の間をのりおろす躰奇也こゝにて岩より水中へ沒するものを岩飛といふ也こゝより五十町行て宮瀧村にいたるこゝは都ゐ吉野川のいはほ奇々妙々なる貌（カタチ）をあらはすこと本曾のねざめのことしこゝにても岩飛あり前のことし百疋宛遣す也夫ゑ又五十町を經て上市村に至り止宿追々吉野の寺院ゑ巡見濟ゑ禮に來りたりたにさくを乞ものありけれは花をみて世話にも成たれはいかほとも何にても書遣すへし乍去けふは多分に歩行せし故につかれたれはゆるせ申譯ばかり也とてとりあへす筆とりて

よしの山はなにこゝろを奪はれてなにといひなむことの葉もなし

と記し遣したり

○十五日　午後くもり薄暮雨　壺坂山南法華寺にいたる大なる坂みち也坊舍十二院　御朱印五拾石の寺なれ共寶物等みるに不足夫ゑ植村出羽守城下土佐町にて小休いたすこゝには出羽守ゑ申付置ゑ由にて給士として近習貳人詰居役人詰合にゐ晝飯出る夫ゑ橘寺ゐいたる聖德太子の御建立也いにしへは大伽藍なるへけれとも敗壞を極たりされ共建治中の古鐘并日本最初の石燈籠といふものあり春日かたにて佛像ある並のすかたなれ共名所圖繪なとにも年古きよしはみゆる也こゝに畝割塚といふものあり

御改寸尺竪三丈五尺横三丈四尺あり二丈六尺四方にて三十六坪三百六十坪の十分一と成る算當不出合此尺唐尺なるへしとおもひぬ開元錢八分と申今の曲尺にて八分あれは尺に違ひなきわけなれ共いかなるわけにや

東光山龍蓋寺人身一生厄拂觀音　大厄分　二オ　七オ　九オ　十三オ　十七オ　二十五オ　三十三オ　三十七オ　四十二オ

五六間四方の平成芝地にゐ高サ壹尺五寸はかりのものあり是は聖德太子百濟國より百工を呼寄一反三百六十歩の檢地を定給ふとき其十分一をこヽにうつし置給ひし也といふ今いふためし歩又は檢竿のこときものとみゆかく万世不動曲尺を定め置給ふこと聖德の名不空を感すること也よつてそれの寸間（ケン）を改させたり是往古のことをしる證となるへし尙考たヽすへくとおもふ也この御人の實用あることを感し奉る也佛法をはしめて開き給ひし御ことなれは深きわけしらぬ書生等はあしくいふなれ共必御國に大功ある御人なるへし此考追ゐ記すへし夫ゟ岡寺眞珠院にいたるこヽの寶物別ゐのものもなけれ共　孝謙帝の震筆也とてぬり板に厄年（ヤクドシ）のことを記せしものあり厄年といふこと老婆なとかいひつたふることかとおもひしに古きものとみゆる也　孝謙帝の御ことはいかヽあるへしやしらね共全く古物には無相違也いつれにも六七百年のものなるへし四十二二十五なといふ類みなありて百才余の厄どしまてあり乍去道鏡等の申せしことなるへけれは實物にても取にたらぬ事也只珍らしき事故記す也夫ゟ飛鳥社にいたる唯一つくりの社にて神主神代ゟ唯一也といふ也疑へきもの也吉田家にていふ唯一の類なるへし抑本地垂跡のことを空海等の僧侶唱出し人を欺しより一天下の大社にて御崇敬重き御社ほと式（シキ）社其外共兩部になれりそれはいせの御神其外にてしるへしこの社の唯一といふはいにしへは鳥井寺（テラ）にゐ兼たりしか同寺の變革によりいつしかと神主一人にて引受ることに成唯一とは成たるなるへし拜殿に瓦ふきなる所あり瓦は元來佛より起り既に　禁中にゐは御もののいみの時は佛をさして瓦物といふにいたる夫にてもしるへしよつて何となくあの瓦はいかにと問ひしに神主中古のこヽろなきものかくせりなとヽ答ひきこヽの門前にある井を飛鳥井といふ也夫ゟ天の香久山ゐ參る眞言宗にて寺号を興善寺といふ也一通りゐ寶物見畢りて住持の申すは野シユをつくり置たり差上たしといふ故に酒ならは斷るといひしにいや野詩也といふ故みせよといひしに一首

四十七オ　四十九オ　五十七オ　六十一オ　七十二オ　八十五オ　九十五オ　百五オ　小厄分　一オ　十五オ　十九オ　二十二オ　二十七オ　二十九オ　三十九オ　六十三オ　□大小厄合　二十五□

は舊作一首はわかよし野のはなみのことを賀せし也少々は出來るかもしらすされ共みせし詩は一向也とりあへす駕籠の中にて和韻せり

千里傳香芳埜岳今年探得十分春如何官路多塵絆休怪有聞不到矧

とせしか元來の韻違ひたるかことく成は遣さりし也その序に詩と酒の間違を

勿怪詩仙誤酒仙酒詩元是一機禪誰知濁世塵埃裏涌出清香双白蓮

この双の字は詩人は先住にて當住ゟ次て出しこれも書畵なとをみせけれは也これも遣さりし也薄暮に微雨今井町に着至ゟよき町也けふ植村出羽守よりさげ重をくれしか多くありけれは酒一同家來并同心迄ゟも遣したり供に召連し儒員育介いふかぐ山の僧至ゟの惡僧にゟ學問も出來才氣もあり年齢七十はかり至ゟ如法の道德ある出家のことくみゆる故に人々みな欺かるれとも至ゟよからす近鄕の僧みな當惑するもの也と夫故に文事を以われにとりいらむとする也よくこそ和韻を不被遊とていたく明察に伏する故に當住至ゟよきもの故に与風おもひ附しか前のわけにて被遣さりきと答し也曾ゟきく役人に好める癖あれはそれゟつけこまるゝとはこのことなるへし以後共心附ケ給はれとて厚謝せしなりかく附こまるゝを恐るゝ故にわろし仁義忠孝をして夫を好み夫を以附こまれむこそいみしかるへけれ書の洪範は天より傳はりし天下を治むる秘傳の書といふへし其極意上みの人おのれか身を曲尺にして天下を治むること也予か曲尺の分明ならむことをはかりて色々の曲尺を以量へきものに專抱らすこれみちかいかゝあるへき○けふの途中四條村の地内畝火山の麓に　神武懿德の御陵ありこれはみちの邊八町はかりを隔てはつか成もりあるはかり也奉行遠くよりみわたし置場所のよしされ共あまりにかしこし　神武の御陵ゟはかりは行かむをかみ奉らむと兼ゟいひ置しか薄暮の雨にて止にけり富みてのち敎ゆといひ倉稟足りて禮讓をしるといふけにまこと也つかれ足にて夕くれに成且雨にてはおもふかことく步行ことならぬ也貧乏にて

は並々の正敷人は不義理出來る也これにても常に儉約すへきことをおもふへき也○神主重立たる所に少しも錢に成へき寶物といふは曾ゐなしこれ親より子につとふる故に構はす密に段々と賣故なるへし寺院は他人ゐつとふる故に却ゐ法を守りて寶物をとり失はぬとみえし也○今夜止宿の今井町は家並至ゐよく屋を潤せること也予か止宿せし所土佐畫の金屏風一双順作いふ四五代はかりの前の人也といふ明畫のかけものみな高料の品にて料帋筥すゝり筥堆朱堆黑にて勿論中わたりの品也料帋にはしきしたにさくと小たか帋いれてあり椽には蒲こさを敷いよすをかけわたしあるなといふ類のことみな行屆たり只奇といふへきは湯とのゝふみ段に立派成すころく臺を用ひあり大あかゝりにてさいの集りしかことくなるかゝとにては上りにくしいかゝのことにやこの村家數七百五十軒あり人別奉公人を省き二千三百人あるといふ先ッ三千石より貧地ならは關東邊にては七千石の村也それにて村高は四百石也といふ也けしからぬ事也これ

齒士田間曳マサニ容レ誇ニ赴々名ニ去ル家纔數ヘシ歩尙備ニ甲箱ニ迎題吉野杉林

吉埜多レ良ー木杉林直ニ於篁ニ矯揉繩似レ織倚レ養如レ斯藏

言葉遣中藩國遠蠻繞。幾疊綠峨々。麥隴陽春海。菜花明月波。川洪魚箔富。山闢圃田多。村婦皆粧櫛。可レ知風俗利。

も御預り所也○けふのみちすから越部といふ所にては其村の郷民に紀伊殿より目見以上の格被下たるか村はつれに出迎ふる也鑓箱かづはさるまてはよし具足櫃までを脇に並へありいかなることにや傳へきく平相國清盛の熊野詣にても甲冑をもち行かすといふほとのことなるに門前にて人にあふに具足櫃はちと過たるかことしこの人他村ゐ行には必鋏炮きり火繩なるへし○用人共の旅宿もよき宅にゐかれらか小ものゝ居所まて金屏風まき繪の刀かけ料帋筥のかさり附也と可笑は棒屋か鍛へたる樫身銅作りのみはかしをみなかの刀かけへかけつらねしとはいかめしかりける事にありけりむかし鳥居八右衞門か川々御普請に參りし時美濃の豪家にて中間までも絹布のやくをかしけれは寒中に中間ねくるしかりある夜の夢に大火にゐ火にとりまかれたる夢をみて大汗にゐ目をさましわか西城御材木伐出しの時に尾州の豪農か家にて士共までに綸子さやの夜具をかしたるに侍幸太夫といふ内弟子あかりの田舍人昨夜は私らのやくにみなも

くめのあるを着せたりと申けれは材木の御用に木目のある夜具尤也といひしことありこれみな　公儀御仁德のあまりの御光也いともかしこきこと也これ故に嚴敷せねは民を困しましむるにいたる也遠國のことこゝろすへき事也

○十六日　雨　六半時に今井町をたちて巡見として条寺ゟ參るこゝの寶物はみるに足らさるもの共也こゝにては久米仙人のことをモヲシ仙人といふと住持の云けれは何と書と問は字は知らすといふ予云妄執仙人のことかといへは夫も不知といひきよつて戯に

落にきの其いにしへをなし初て千世につとふるくめの山人

といひきこれにて巡見は果けり夫ゟ上之庄村にいたりてひる飯也夫ゟ三里をへて奈良へ歸りたりこのほともし雨ふらは途中困るへきに幸ひにして十二日ゟ十四日まて雨なし幸といふへし○条てらにてかの仙人か雲中より落しことをおもひて僧正遍正（マヽ）かわれ落にきと人にかたるなのうたより久米仙人のかたふるし今のよにいふおつこちといふのはしめなるへし

○今井町近邊うねひ山近邊はみな古墳のみにていにしへの御陵とおもふも多けれともしる人なし　神武の御陵は木の玉垣あるのみ　懿德帝の御陵のことときにいたりては四方にこみちありて牛馬牽通るへからすといふ高札あるのみなり恐入たること也うねひ山みゝなし山あまのかぐ山鼎峙して立てり

うち向ひいく万世をかたるらむうねひ耳なし天のかく山

といひき所のものもこのわたりを三ッ山といふ也うねひ山にて雲の立をみて

うねひ山ときはかきはのかけふかみけふりと立るはるさめのくも

御陵をみ奉りて

としをふる梢も泣かはるさめに一村さひしみさゝきの松

このたびならより吉野其外をめくりみるによき國にて扨女共みなよし佐渡にては一村のうちにかた目なるもの必二三人あり大和にては一村のう

ちに必よき女又二三人ありこれ上國の故なるへし吾妻男に京女郎といへとも京女郎はかくのことくなれ共男子はいかゝあるへき

自古人間漫説道。五畿國色八州雄。初知妍變非虛語。欲問今時烈士風。

神武の御陵に玉垣ありしを土地の領主よりすることかとおもひしに大坂の町人の奉納せし也といふ也その町人の名はしらねとこゝろあること也町人にさへかくもこゝろあるものゝある也この　御神は千万世の御祖にましませは伊勢春日と同しかるへき御事なるに町人等ゝ奉納せし玉垣にて濟といふことといかなることにや

○十七日　雨　きのふはつか五日の旅にて歸りたれ共なにかとはなしの多かりき江戸へ歸りたらはいかにや有らむなとゝいひてかゝることにも母上の御事申上候ゝおさと一同かなしかること也今日のことく成天氣ならはいかにせむとけふの天氣のあしきによつて却ゝ巡見の都合よきを喜ふ也ならへ來り一度も天氣都合あしきことなし

○十八日　雨　はつか四日はかりの旅行なれ共歸りし日はおさと其外歡ひて打よりはなす也けふらもよし野のはなしにて御用旅行なから少々彌次喜多八に似寄しことなといひて笑ふ也これを以おもへは母上の御待御尤也とておさと一同に落涙して其ことなとうたによみき出立の時はいまた滿開ならさりし花もちり芝の俄にみとりに成たるをみれは江戸のやしきなといかにかあれにきとおもひてこれも又かなしき也

○十九日　雨　俊藏かたの少女來るおさとにいふはまさなとの帶の結ひかたは母とは違ふ也夫はいかにといふ故に奉公人とかみさまとの違ひ也といへはいさゝか小首をかたけて隣のはいかに候やこゝろつかす候ひきといふ市三郎來りて放屁をすれは少しく笑ひなから今のはたしか椽の下にてかいゝの鳴しなるへしといふこの少女ます〳〵伶俐也

○廿日　夕はれ　廿二日出ゝ並たよりゝ狀とゝく眞綿幷北條よりの書狀屆平次郎おこと無事ゝ由にゝ兩人ゝ年賀ゝ書およひ菓子なまくさ共に來

る菓子は直に一同にゐたへ申候廐中間榮次方にゐ出產あり男子出生也如鬼別當も涙を流して歡ふ也女ならは着物もきせじと思ひしなといひてほこるよし俊藏妻か別當にいふはそちの兄弟は女はかり親の手もとにて孝行して男子は勘當同前也といふ女子かよきや男子かよきやといへは別當頭をかきたるとの事也

○廿一日　晴　此ほと内藤安房よりたのみにて當麻寺にある緣起を取寄たり住吉家の弟子日々來りて寫す也書は尊純親王通村なとの其頃の能書畫は山樂雅樂介主馬等のより合書也さくら甲冑の類みな寫眞せしものゝ如し其密なることいふへからすくま金粉也手をつくして美を究たるものゝ也みるも氣のつくるか如しいにしへの人はかくも佛のことにこゝろを勞せりやと驚く也土佐光信の圖二幅緣起三卷以上五軸あり夫をいるゝ蒔繪の箱立派也古の國力の盛なるをみるへし順作云一段の書三兩にてはなかゝかけすと云ます〳〵いにしへの國の富めるに驚く也

○廿二日　雨　よし野ゟ行わからぬ詩歌四五十首其外長篇古詩なとをつくりたり前にも記す通道之記はなししかし歌のはし書を詳になしたらはよほとの帋數になりたり夕かた儒者來る酒を爲給たり予は此ほと不飲いろ〳〵の話をなして居たり扨々下戸にゐは人之長酒は當惑のもの也○西井源次郎七十九歳の母に八ヶ年不逢今般御機嫌伺として出府之由申來る其返事のはしへかくそしるしける

この度は吾妻に行て母にあひ時にあふちのはなもみるらむ

とよみ遣したり予もいつしかかゝるうたの如くなるへしや母上の御健に拜顏之ため十七日の　御神へ別にこの頃は潔齋する也母上は左衞門尉歸れと之御をかみは決ゐ御無用夫にゐは却ゐ不宜候得共左衞門尉の子の身として母上のこと願ふは佛神も御とかめあるましとて也○夜に入三月十一日附之書狀屆く母上樣此節は御不快全に御全快と之御事恐悅之至也三月五日之雪はけしからす候此雪大和にはけもなし桑にさはり蚕に響はい

たし不申候哉節句に付幸三郎等迄うちよりて左衞門尉ゟ御はなしありしとゟ事王維か九月九日の詩に少もちかひ不申候右ゟ節句には先便にしるし候詩作ゟ通に有之候ひきこれ又同し御事也○大津妙壽の事相分申候貞五郎健に相成とゟ義何よりの事也桑田ゟ事歎息ゟ至也○新右衞門御狀ゟ内三月の雪に付究理の事御尤也勸進能に付謠のはなし大笑也御問合物其外共七通夫々相屆く毎度忝候三日の日記ならと同前落涙のこと共也いつか目出度御逢可申哉父師の御論程子の論集注になし卽刻御役所ゟ纂疏を借よせてみるに御申越ゟ通也明道か伊川かいつれの說かはしらねともいつれにも程子の說に候上は當時朱子學御用ひの上はこの外余論あるへからす尙考へ可申候得共既に殺之可也とあれは右ゟ外はあらし殊に疑敷は輕きに隨ふとゟ本文に付旁以先ッ了簡は無之と奉存候かゝること儒者の論承り度候新右衞門ゟ大全まてに御心つかれ候義遠く不及悅服々々○土浦俟ゟ御出ゟ由尙又宜く被仰上可被下候此御人親まさりの御樣子質も宜しくと相見申候上田角右衞門は君子にてこの屋敷に先年は子供なりしか尾木肇といふものゝ悴はや寺社役なとにも可成もの也いかゝ生立候哉○北條ゟ御外孫の御小兒可惜しかしよき御外孫は御丈夫にゐよろしく候○太郎いかにやと存候處段々と母上の御沙汰にゐ相分り候ならにては順右衞門悴此ほと出立ゟ節ゟ太郎位にゐ顏色少々藏之介に似寄甚以太郎に類し候間何そと申候得は夫に付おさと太郎ゟ事を申出し申候敬次郎事は學者の唐人同前名前は承候得共一向に顏は存不申候得共是も順右衞門の悴よりは月立しなるへしかゝること聞もいやきゝたくもありさてよくおもへは聞て一向に仕かたなく少もきかぬかた心の動かぬたけ德なるへきか○此ほと醉墨ほとの事なしけふみれは外庭の藤よほといろ附たりこれは江戸ならはふし棚もの也よほとのもの也四五日中にはさかり成へし其節は醉墨にてもあるへきかと考居申候○唐招提寺ゟ戒壇やけたり屋根よりもえ出天火なるへしといふ也千有余年ゟものにゐ桂昌院樣御修復其以前は

鎌倉將軍家頼朝卿の御修復と覺たり命數といふものはかくの如し當時ならに千年余〻堂舍多しといへ共少も火〻事なきは法隆寺はかり也これは聖德太子の御建立也此御人のものは多くのこれり不審也

○嘉永元三月廿三日　昨日所司代より奉書來り去ル十五日江戸表にて年号喜永と御ひろめありしよし申來る其こと所々ゝ觸るゝならにてはとくに改元のこと被行二月中〻御門主かたにては喜永と唱らるゝよし也子供の書たる額に其年号を用ひしもあると聞て不審におもひ居しに昨日申來れり京にてもならのことくとみえたり

○廿四日　くもり　夕かたより與力らに居間にて酒爲給候なら人に下戸なし至極の下戸隨分のむ也不思義なる事也與力羽田鎌左衞門五十五健成老人也けふ日々遣ふといふ刀をみせたり五尺余あり明應の年号あり春日大明神と彫あれは奉納物なるへし燒身也此男毎朝劔術不怠稽古場此人にゝもち居る也

○廿五日　くもり　吉野山より巡見濟〻御禮に出るよつて兼〻のそみたるたにさく遣す

はつせより吉野をみめくりて

おとらしといひし初瀨はみよしのゝ麓のはなのかけたにもなし

實城寺に三月十三日の夜やとりて

ふりつもる雪かとはかりみよしのゝ月に匂へる山さくら花

よし野のはなを

みよしのゝはなをは斯と筆にとて辭にもなといひつくすへき

後醍醐帝のみさゝきををかみ奉りて

さくらはなむかししのはゝ此君のみはかはかりは九重にさけ

西行かすみしといふ庵をみて

とく〳〵とよの行末の苦清水くみてかくれし谷かけの庵

北畠准后親房卿の筆なりとかたり傳ふる文ともをみて

よしの山はなに契りてまこゝろの深きかをりは千世つとふらし

其外に正行か辭世のうたをみたる詩一首をしるしたり順作にもなにそかけといひしに是は富士を畫けれは其賛を

攀雲四十里。淅陟畫山巔。忽仰芙蓉雪。慇懃卓九天。

と記し遣したり

○廿六日　雨　よし野の僧來りて昨日の禮也とて菓子くれたりわれは御役所ならすははなの禮をしてよき筈也何そうたを遣したりとて禮を受へきやといひて返したり順作ゟも菓子をくれたり是は綿地ゟ畫のかきたるを一枚遣し大に損をせしと也

○廿七日　くもり　きのふは民藏小屋へ兩御隱居樣市三郎を招請申上る兩御隱居樣大に御歡ひにて被爲入候存外はやく御歸り也是は父上の過酒のことあれは御背中いたむこと近頃ありそれの起らせられしによつて也早速に予按摩を成してあけしに御快よしとて御斷也强ゐ按摩せしにいろ〳〵と御斷也母上の御沙汰にはさらは父上のかはりにわかかたのいたみをもみくれよとの御事故によく御腹を伺ひしに過酒の時は左にけしからぬこりありよつて其こりより御かた御手をもみてあけしに御兩人樣とも今朝は如忘御こゝろよしとて御歡也大和の非人に學者ありて長吏共ゟ治めかたの義を品々難して長吏も手にあまり差出しにしたり其書面筆を振ひ大に驚たり與力共直吟味ゟ義申に付直糺いたす輕きものに學問の出來るは十人に七人迄は害となるかことし

○廿八日　くもり　禮はなし

○廿九日　晴　今日は兼ゐ父上は奈良の近郷一二里はかりのうちふるの瀧法隆寺なとのうちへ被爲入度とゟ御意也又母上は何卒春日山のうち鶯の墳ある若くさ山といふへのほり十丁はかりの山の嶺へ上りわらひなと御つみ可被成とゟ御意也これによつて其二ッを合せてけふは父上母上ともにかすか山鶯つかの邊へ被爲入候御供は用人民藏給人順右衞門女共市

三郎誠一郎清ら其外は徒士押等也御辨當所は興福寺ゟ地中ゟ御目付なと被參候節ゟ旅宿に相成候寺院也八ッ時頃にいたりはや鶯つかへ御のほりありしやとて庭の築山へ登りみるに江戸のとん〳〵橋より市ケ谷をみるより遠し十八丁はかりあるといふ也つねにかすか山のくものけしきはなの開落まて手にとるかことく庭のうちのことくみゆれとも委細のことは遠目かねの力もきかす其内によくみれは母上ののほらせられるゝなるへし日かさみゆる也又此ほとは茶店なと其邊にあれは其筵はりもみゆる也父上の被爲召候御かさなるへしみとり成わかくさ山の上にたゝ一ッ星のことくみゆこれはよし野より檜を以作れる芭蕉かさといふものを求來りて奉りしを今日はめさせられしなるへし其余は蟻のことくにて詳には分らす其内にけふは別段なれは一盃を傾よとておさとのこゝろつきにて一盃をくみ頻に唐帋へうた詩なとしるし或は此ほと被頼居し額字なとしるしたりしはしありて夕かたおさとは庭へ行てあひるに飯ヲやり我は坐敷にて飯をくひたり三はい目の飯茶つけにせしかけしからす胸につまりたり女共を呼もいかゝと不呼其内おさと歸り來りたれはおさと〳〵と呼けれともあひるのゑをやりたる手を洗ひ且おさとも認ものするとて不來其内にます〳〵胸へつまりあたり黄色にみえみづはなたら〳〵と流るゝにいたるよつて又おさと〳〵と呼けれは來りたりよつて背中をさすりなとして漸に胸開き人事を辨する樣になりたりかゝること今まてなし其ころ一旦の樣子は用人給人下女ら等まて數十人遣ひなからこれは見殺にせらるゝ事かとおもひし也其内に市三郎も歸りおさとゝかはりて背をなてよく介抱してくれ漸に人こゝちつきてしはしかうちに本復したり我今日まてかゝることなけれはおさとも不搆しはしなかく居しも尤也これは腹中のこりか一向にわからぬ事也石川左近將監この疾ありしと同人より已前きゝしことありし也けふはしはしか内はこれはころひ乞食同前かとおもひし也かゝることはかねて申付置へきこと也

○四月朔日　晴　やりを遣ひ劔術等例之通也けふ清朝人の書をみておもふに近來日本人の書柔に成たるは清朝人の書を學ふ故かともおもふ也石川丈山頃より百年はかりの書は日本人の書俗なる躰も多かるか也しかるに徂徠の頃より文華開けて書も別段に成たるか也其後思恭親和なとの風被行て倭臭に論起りて書躰ビン〳〵と成たるを好みしか也しかるに今は又柔成風を好めりこゝに論あるは行書なとの類清朝人のことくには日本人はかけまし夫は日本の柔成かなを清朝人なとのかならす書かぬる類にて風土によるなるへし先人この論百年來あり然ルを時代の論をもいはすみたりに清朝人の風をこのみたらは必書風いやしく成へしよつて近き風は少も不學してやはり隨唐の書躰を凡にも學ひて筆遣なとは近き人の肉筆を以おもひはかりたらはよかるへきか奈良の刀脇差より京攝の風をみるにみな江戸のはやりをうつす故にいつも江戸より二十年つゝもおくれるか也今桐つくしなとこのむを以みるへし書もいつにてもからの流行に六七十年宛もおくれてまねをする樣にゐは終に日本の書といふことはならすからの流行をくれはかりをする樣にゐ殘念なるもの也元來日本人はから人の申すことを守り居て出みせの學問の意不離しに享保已來別ゐ徂徠にて一變せしことく書もからの受賣ならす日本自得之流ならはいかゝあるへき我御承知之通少も書をしらぬ故に考をしるす新右衞門方は藤左衞門はしめ書をよくす論あるへし承たし

○二日　晴　きのふは用人共幷與力共を紀州御用金懸り之役所ゐ被召候ゐ御料理被下あり案内等は御出入之町人にゐ玄關下屋敷へ敷出しをいたし右之所ゐ町人共出迎いたし御國もとより被仰越之品有之候由にゐ用人共も刀持上りにせしと也御辭退申上候ゐ刀を若黨に爲持置候處給士之もの紫服紗にゐ若黨より受取是非といふ故にもちあかりにせしと也御料理等けしからすよし用人は民藏のこり順作俊藏參れり俊藏料理向等一々記

し候ゟ持歸りみせたり肴なと數品出たり床のはなら風に松と牡丹に遲さくらを活候こと見事也との事也元來此御料理被下兼ゟ伺出しかは御三家より汝らへ御料理被下候由は無勿躰事也御辭退申上候は恐入たる事とて遣したり御座敷向くきかくしからかみの引手みな葵御紋にゟ同し御幕を所々ゟ打あり甚敷は硯より茶臺等迄御紋ちらしにて家來恐縮せりと也紀伊殿ゟは南海第一ゟ御國被進候ゟ熊野高野につゝき大山あり山海の利ことに多く屈曲して行は濱はかり長百里に及ふといふ也定ゟ御取箇等夥敷ことなるへきに其上にも近來御貸附といふこと初りて夫に寄輕きものまてに御心遣ひあり葵御紋ゟ義元來御三家と　公儀とはかはり居といふなれ共今は同し樣也されは　公儀の御紋も同前也しかるを出張所ゟくきかくし茶臺迄へ御用ひあるとは無勿躰事也葵　御紋ゟ事享保の頃より今の如くなりし也これは紀州の御紋のまゝを　有德樣（院脫カ）御用ひしありしより一變せしと人のかたりきまことにや既に　御本丸西丸の御座敷向等ゟ御紋古きは今と大にこと也御のほりは今もいにしへのかたを御用ひ被遊ゝか也今の武鑑のはしめか元和の頃の板本に諸家籏印といふもの聖堂にあり右等ゟ御紋にてもいにしへと今の　御紋はわかる也

○三日　晴　未明に馬場ゟ行乘馬夫ゟ刀槍例のことしこの頃の雨天にて馬を久しく不乘けしからす張居たりわか馬既に三年せめ馬といふことをせねは借馬同前なるへきに一向にあしくならぬ也これは馬左衞門か乘こみよき故也細川にゟは駒より三年ゟものは五年に乘込といふ也よつてわるくならぬ也今流行の馬役か二年三年に馬の生れ附に不拘見場よく乘込し馬ならは此ほとは乘られぬことく崩へき也范質も速成不堅牢と戒られたり速に意外に結構になりしもの十にして六七は必中折するか也可恐事也天理みなしかり不存寄俄に進しものはつとめて其ことを忘れて十年も其余も愼居へきことかわれに昔其心なく今後悔する也阿部いゝ守殿の特旨の供廻りを段々に被減候ゟ御役中は不被用とゟ義なとは近來きかぬ美

談也これと今の穩なるをおもへは此御人は御敗御氣遣ひなくなかく御盛なるへきか

○四日　晴　一兩日俄に暑を催す八十一度也女共みな單衣也○良右衞門かたの兒去年二月出產せしなれ共よほと才あるかことく且よき男兒也このほと何事もよく辨別しおもしろし魚をみて鍋ゟ入れむといふにて其余しるへし貞助かたの男兒は正月生れなれ共なみ〳〵の兒の三人前はかりあり隨分よき兒にて骨たくましくいかにも壯士ゟきさしみゆる也ならの給人みな夫婦さし向ひにてひるま入念こしらへしなるへし出來かた至ゟよろし○おさとけろ〳〵三十日余にて起る尤一日にゟよろし昨日の朝より夕まて食事なし今朝より食事いたす余は例の如し○ならも惡る口をよくいふ所とみえし也ある已前の奉行を大びらめと号けしよし其意は見場は大きくくろけれともうらをかへし腹をみれは素人也といふわけ也とかや絶倒感し入たり

○五日　晴　泉水の鯉夥ふへて此ほと子をすることかまひすしかきつはたの内によりて黑とあかの鯉織かことし金魚も一昨年うかい茶碗へ四五ひきつゝいれて買たるか五六寸に及ひてこれも子をする也追々つゝしかきつはた盛にて池のけしきよく成る也かゝることを母上にも新右衞門等にもみせぬといふそうらみなる○昨夜より蚊帳を用ゆ立春より九十四日目也○俊藏けさ春日へ行て藤をみたるに白ふちと紫の打ましりたる松かえ枝を手綱染のことくにせし所もありていと〳〵よしと也春日社頭の藤を賞することは千年余にもなるへし名所のふち故によきはつ也

○六日　雨　御用日眞田信州よりたのみ大坪道禪翁のかたにて革くら出來たり出來かたよし七兩三分也

○七日　くもり　おさと此ほとはいろ〳〵かな本をよむ也よつて我に平重盛と平泰時との事をいふ故にいつれも君子賢人とも可申歟泰時なとなからむは北條の九代おもひもよらすといひしにおさと又申せしは重盛は

平相國の　天子に奉對候ゑ不遜のことを奉諫既に親なりとも　天子には
かへかたきと迄申たり泰時は　三帝を遠流に奉處戰にも加りし人なれは
この一條を以も重もりと同しく論すへきにあらすかゝる大義暗き人なれ
は公曉をして實朝を殺さしめ主の天下を義時か奪ひしにも加りたるなる
へし可疑ものといふ故にいにしへの賢人を可疑までを以難することいか
ゝ也と申せしに既に　万乘の君に弓ひくほとの事ならは父の逆意を乍知
不諫位のことは小事也大を以小をはかる必推量とはかり申成し給ふとも
不服いつれにしても不智不忠のうちはまぬかれさる人也といふ也予少々
答にこまりて扨々おさとかいろ〳〵のことをいふにも困る也夫故に病身
也ある遠國奉行の妻に和泉日記とかいひし女に過たるものを書し人あり
汝も病なからむにはかゝるしれものなるへしと横倒に云ふせたり此人近
來道理の論至ゑやかましみな病の本と成也

○八日　雨　けふ与風烈婦のことをいひて細川越中守忠興か妻女の大坂
にて自害されし時に其家來か介しやくせむとて同間へいらむとせしを夫
の留守なれは男子の同間は憚あり次之間より介借せよと有けれは長刀を
取のへて介借したりと江口の伯父の常に御物語なりき婦人といへ共大丈
夫はかゝるときはつかなる場にても禮をは守られけるとみえたり曾子か
易牘子路か冠を正しくせしにと少もおとらぬこと也朱文公の寥子晦とい
ふものに答られし書のうちなれは少も僞はあらしとおもふか蘇東坡か捕
られけるときに面色人色なく兩足軟たりと書たれは菜のことく成て腰の
拔たるなるへし近く矢邊駿河の評定所ゑ御呼出に成たりし時少も不動夫
々分明に家來共ゑも差圖して出其時は鍋嶋内匠頭いまた寄合肝煎なりけ
るか評定所ゑ出る都合なと詳に敎へしと其時内匠の我にかたりて昨日は
囚人に敎られて勤たりめつらしきことゝいひき駿河と東坡とにてはいつ
れかまさりし人ならむ東坡か正言して爵祿を塵埃のことくにして上書な
とさるゝ躰後世の人と論するにも不及別段なるにかゝること又あり与風

こゝろの動きてかくなるか人の心といふものは解せぬもの也賢人とも可申東坡にもかゝることあり臆病ものにはあらぬ也人のことなか〳〵論すへからさること也よつて武士を磨くものゝ全くあまりの間違なく死ぬといふことは目出度のかきりなるへきか何卒大事に向ひ心の動かぬ様に仕たきものなれともさて〳〵無覺束也大事に向ひあまり心の動かねは余はさしての美事なくても立派の士也乍去牽れものゝ小唄といふ類は論するに足らぬ也因に云死ぬことを目出度といふことといにしへよりいふことなれ共右は惡敷ことを中くらゐといふ類の反語也右に付ゐは古書の證月蝕をはえといふに付夏蔭翁の考あり

○九日　晴　留役瀧澤某か元家來常土村源七か方より白木綿一反をくれたりこれは彼はひたすらに望み乞によつて同人を順作かさふらひにつれたり其歡一かたならさるによつてくれたる也彼ものらか一人にて行みむには十兩もかゝるへきを却ゐ手當等予方よりものもらひけるを謝しけるとそ聞へし也

○十日　はれ　このほとは又さむし四十度以下に成時こうあしき也市三郎も風邪也近頃はいぬることはめつらしき也

○十一日　はれさむし　六十度中數也これ相應の時候也九日には同心一統并惣年寄町代共へ酒をのませたり惣人數四十人余也其内にゐ下戸なるものはつかに壹人也といふ也けしからぬ事也組頭同心と筆頭同心ゐは盃遣したりみな大に歡し也みな大に醉たり例の謠ひをうたひ舞ふ也いかに醉ふとも鄭聲なとするもの一人もなし大醉の躰をみるに能の舞と謠ひあるは狂言の太郎冠者なれはみなみるへしこの風は關東へうつしたきもの也樂みて聲を發することなくて不叶もの也故に猿樂のかはりに新内ふし豐後をふしを立派なる人にかたるもある也けしからぬ事也聖人の一代の樂を作り給ひ及ひ故なけれは琴瑟身をさらすともありて樂にてこゝろをやしなひ存外の防をすること奇妙なる考也江戸の人群りて醉しをみるにド、イツ潮來越後節の類これみな船頭水主のなくさみ也其余非人河原も

のゝまねならすは或は裸躰にて踊る類也ならの能のことときことあらは以上ゟ卑劣なる風は可止か畢竟士たるものゝなくさみといふことなき故にかゝる弊風になる也可歎事也

○十二日　雨　このころ旅人同士の爭論あり夜熟睡の所を一刀突夫々段々つかみ合相手はゴマの灰の大男脇差をもちたる方は五十九才の百姓也よつて三十八ケ所はかり一寸貳寸の切疵をつけて漸殺したり掌のうちに二ケ所疵ありつかみたるとみえたり我いふ眞のなまくらものなるへしとて大に笑ひし也しかるに右ゟ脇差欠所に成同心買取研上てみせしに二字銘の兼定中心其外とも更に無疑見事に出來たり不思義千萬也あまりにあきれて貞助とゝもに燒及其外をみて檢使の躰其外をよく聞いろ〳〵穿鑿してみるに其脇差にところ〳〵及ゟ内に蟹足みゆる也匂ひ出來のくの目みたれのうちに蟹足の前のことく出來たるはかねかたく火のつよきにはあらすやよつて及先の段々とひけて大さび身に成居たる故に自然の及ひきのことくなりて少もきれす出及庖丁の用をなさゝるかなり新刀のかねかたく火の過たるもの及先鋸のことく成居研十日前後位にゟもはや及の甚敷ひけたるあり今の上手にも間々あり古刀別ゟ關打なとには決ゟなき事とおもひしにかゝる事あり古刀新刀の差別なくかねかたく火の過てかみを切みるにヂャリ〳〵〳〵と切るゝものならは必及さき不宜なるへしこの說上手の人の說を聞たし奥州のかね定かとおもへともひら打にて壹尺二寸はかり中心の樣子なか〳〵奥州のかね定とはみえぬ也

○十三日　曇　いぬる十一日の夜に三月廿七日附ゟ書狀相屆く先以母上樣少々濕瘡のことときもの御出來被遊候得共一躰は御快とゟ御事恐悅ゟ至其外一同ゟ御無事目出度候新右衞門ゟ書狀別帋共相屆く幸三郎ゟ書狀も相屆く柳亭種彦ゟ事凰鳳のすみか左もと被存候義に御座候○祐定ゟ刀貳尺貳寸のよし目かた有之候はゝ至極の佩刀なるへし祐定のきれものゝよしは武將感狀記なとにもみえたり○三月十一日ゟ的場は御うらやまし

き事也鐘三郎の當り五十本にゐ二三本ぬけとはおとろき入候新右衞門の弓七分にゐ中りも又七分歎息いかゝあるへき御同前の老こみ御奉公片手間には過ものなるへしよし野の竹林院には流祖自筆の傳書貳冊あり○幸三郎より差越かまやりは大十文字にゐ流義のやりよりは五分かた大きし御廻しに不及候わか所持も寶藏院の所持も金房のやり一リンも不違目くき穴まて同し流祖の深意あることゝみえたり○兼房ゑ短刀御取極にゐ可然候○先年熊谷の破談鍔いまた有之下直に候はゝ取入置可申候老こみといへ共捨へからさるは武術也捨れは少もやくにたゝす不怠されは下りおそしわれ例の樫を棒をふりみるにはしめは二十本はかりなりしか此ほとは三百七十本程ふる也手に力つきたることは覺へねとも近頃市三郎と遣ひみるに市三郎のもとゆひ必切るゝ故に心附て尋みるにいたむと云間こゝろして遣ふ也され共品に寄家來共四五人も遣ふてくたひれし時はわすれてしないの當り強くなる也夫丈は手に覺つきし也棒にゐ三百七十本大刀にゐ七百本ふれは一汗になる也

○十四日　晴　昨夜內藏之介江戸より參着同人江戸にて井上內藤大越其外所々ゑ參りていつれも無別條母上樣倍御機嫌克とゑ事をはしめにて親類うちの躰或は孫等か健なるよし具に申聞候ゐ安心いたす內藏之介道中にて雲介らかいふを聞に水かけはげむはて運ふ方か勝といふを聞たり何のことにやといへり江戸にて何そ水のかけるなといふことありや上かたにては更にきかぬこと也田舍へ來り流行におくれてかゝること更にわからす

○十五日　晴　八十二度の暑也人々少々宛あたる也しかしおさとの半けろ〳〵市三郎のごろ〳〵寐位の事也○穢多鍛革のふち頭を造り來りたりよく出來たり穢多のする所をみるに革といふものは毛をさりし表のかた銀と唱ふる所あり鼈甲のことき所也わたといふ所あり白くすき通らぬ所也其銀といふ方を少もわたを不加よくすきとり夫を以鍛あけしは實にきれぬ也唐牛皮はわた少かるへけれとも是もわたを加へては精品の和牛皮

におとるなるへし江戸にて岩井かつくる皮鍔なと至ゟ柔成もの也○この頃儒者かもとより新樹といふ詩題をこしたり一二首つくりたれとも歌にはもとよりある題なれとも詩には新竹といふはあれと新樹といふはきかす茶山か詩ゟ内につくりたるはあれ共題にはあらすこれ以日本人なれはたしか成證とはいはれす手もとの韻礎なとにはもとより新樹の字なしよつてもしや和臭かと儒者に聞に大坂にて大儒のもとにて出し題なり疑はあらし調へ見可申とゟ事也しかけふ來り新樹といふ熟字なしといふ也予十四五歳の時友野雄助殿のはなしに近く江芸閣に誰か詩を日本人のみせしに翠楊と作りしを再ひまて綠楊と直したり不審ゟ義に付佩文韻譜其外調たれとも翠楊といふ熟字なかりしとかやこの新樹も夫の類かと聞とも大和一國中に五車韻瑞所持の人さへなき樣子に付一向に不分明也田舍は仕かたなき事也○法隆寺の僧より知足といふことをかけ物にする故にしるし呉よとゟ儒者かはなしによりて

法身無一物。衣鉢任隨緣。知足爲何事。活心常確然。

としるしたり僧は頭を圓にし妻子をたち魚肉をたちて其道にたることをしるは十二分也しかるに尙知足をいふは佛學をせぬか也○江戸の革具足といふものは多く革籠なとを買てたち作る也革かれてかたくみゆれとも革は油の氣拔ては用にたゝぬ也考工記に革甲は二十年とかいふことありしと覺へし也革具足つくらは御用心あるへしはいたてなと多く皮籠の古くなりたる也と聞し也

○十六日　くもり　此ほと可笑は日のなかきを歎ひて夕かた軒端へ出て書をよみ居たりおさとはや御仕舞になさらぬかといふ故に夜か短けれはならぬと言は欲のふかきとて笑ふなり其足にておさと泉水をめくり御隱所（居脫カ）に行は爺々の仰にはやれ難有先ッ〳〵けふもくらしたりとゟ御事也近頃爺々は何事も氣をつめたる事を不被成よみ本も口畫くらゐのこと也母上はよくよみ本を御覽ある故これは左ほとに御困りもなし爺々の御はな

しに昨夜鼠の欄間をかじりはいたし不申候哉まだ鼠といふものあれはわか用もあるとて御笑也○此ほと鯛至ゑ下直也江戸にて貳分貳朱位の大鯛十三匁也されは惣菜に鯛も遣はれすやはりよめな田せりの類なり

○十七日　雨　五時ゑ供揃にゑ東大寺龍松院ゑ　東照宮弁西照寺ゑ　東照宮　御廟屋と奉申上候御場所ゑ参拜いたす昨夜より雨なれ共出宅より歸宅迄雨なし奈良奉行ゑ成當所参着ゑ日ゑ外出にかさ用ひしこと曾ゑなし吉野巡見も歸り懸に相成一日ふりたる計也西照寺ゑ　御廟所と申候ものは寛延ゑ頃惣墓ゑ内ゑ　御神号ゑ石堀出し候に付右ゑ趣奉行所ゑ相屆夫ゑ當時ゑ御取扱には成し也　御治世已來　御神号ゑ御事は小兒たり共辨居可申義然ルを土中に沈み居候とゑ義不思義なる話也昔三州にてある僧田畑ゑ川欠に相成候事を厭ひて　御諱有之候石を竊に埋置追ゑ掘出し候由にゑ訴出たるよしこれは事を遂たるよし也惣ゑ地中より五六百年前ゑものならは格別二百年來　公義ゑ拘り候ものを掘出し候由訴るものあらは懸りゑ役人こゝろしてみるへきこと也螢澤宗林寺其外ゑことく賣僧多くあること也當時寺社方にゑは豐藤といふ其ことに詳成人あれは夫には大によろしき也わか調役たりし時も此人に多調へもらひたり

○十八日　晴　此ほと又冷氣也中數二段下り也きのふは例ゑ通十日夕より潔齋に付十七日ゑ晝後より潔齋は解たれ共よるまては精進に付酒を用ふるにはつかに大根おろしに酢をかけし一種にて夕かたより酒を用ひ頼まれしものを書たり其内三幅對の好みありしか其もの近頃身分よりは立派成普請するといふこと聞けれは雪月花ゑ内月を

茅の軒竹のはしらも足ることをしりてくもらぬ月をみるかな

としるし遣たり少々酒を用ゆるかた書のよきといふこと不審也酒は少用ひても精神の亂るゝものなれはよからぬはつなれ共古人のいふことく膽ふとくなるものなれは夫故に立派にかきたきなといふ欲心去りて却ゑよきか也此事合点の行かぬことなり

○十九日　くもり　このほと筆をあらひみるに水清き泉水にてあらふ第一よし筆洗ひの小なるは惡敷ものなるに池五六十坪もあれは大筆洗のかきりなるへしよきはつ也この池鯉夥生してこのほとは一尺はかり成より三四寸なるまてには數百頭あり奈良奉行轉役にて與力の預り中に水を干て魚をとるといふ也さもあるへしわか來りし時はめたかもなかりし也築山のうしろの方ゟ出し所には蓮あり其外はかきつはた也このほと至ゟよろし庭中より春日山をみるに新樹青黄なるも碧なるも翠なるもありてにしきのことし秋ならねとも一しほのけしきある也

○廿日　晴　中院屋　御位牌所ゟ參拜夫ゟ興福尼院ゟ參るこゝは二百石の　御朱印を　大猷院様被下たれは右之　御靈屋あり四月廿日には奉行より御香典を奉る尼寺にて下々まてへ赤飯を出す也住僧の尼は勸修寺宮の御猶子にて公家衆の娘也よき老尼也けふいろ〳〵　御所の咄等をする故与風娘二人　御殿にありといひしに　御所はよき官女みな下ヶ髪也御奉公被成候御方の御髪は如何と聞故に出まかせに丸まけかと覺へしといひみしか又かたはつしかともおもひ下女らはしゞみ貝の口を開たるかこときに髪なれは其こと凡にいひかみの事は予詳にしらすといひしにならひ居たりし役尼共われを向きて笑ひたりこゝの尼の附弟は芝山持豐の孫にて書をよくし歌をもよくする也

○廿一日　晴　けふ書經をよみて康誥にいたりて大に感歎し且みつからいましめけるは康誥といふものは武王の其弟康叔を衞の國へはしめて封し給ふとき段々との御教訓を記せるもの也其内に專ラに御仕置筋をつゝしめといふを主として仰られたり後世の人の吟味物の仕かたを人につとふるよりも詳なる事也康叔といふ人武王にあまり劣さる御人なるへしとは汝の心ほとのものはあらす朕心も德も惟汝はしれりとあるにておもふへき也夫にさへもかくも公事吟味物の六ヶ敷ことをくりかへ〳〵仰られて其内には殷の世に常に用ひし政に隨ひて汝か私意を加ふへからすと仰

られ又こと〳〵に其罪にあたることく能出來たりとも我御仕置筋のしらへは行屆たるとおもへは怠のこゝろ興りて夫々御仕置筋の間違も出來さる故に決ゑ御仕置相當之取計の出來たるとはおもふへからすといふことなとみえたり聖人の御仕置筋を大切に思召ことかくの如ししかるに遠國なとには公事吟味物御仕置筋なといふことは與力同心らにきかせて己はしる事少奉行も多人數數百年のうちには必あらすともいひかたき歟也上たる人こゝろすへきこと是一ッ周の世の御政事を殷の常を守れとあるにて奉行所なとにゑ少も新規のことをすへからさることこれ一ッ又少々御仕置筋を知りたるとも少も相當の取計出來たるとおもふへからす平日不相當間違はかりと薄氷深淵のこゝろたるへきことこれ一ッ也康誥は長きことなれ共其内三十六字之内に以上之ことを仰られたるは實に聖人なるへしとこゝにいたり水を洒かことくぞつとして恐入たり卽刻に用人を呼寄て公事銘帳を出させて夫々調を申付且御仕置筋をは一度の博奕にても

こゝろしてみるへきことゝ深くいましめたり○醫者の花井隆介よりうきよ繪にうつくしき娘のかけ物をもち居るを拾得のかけ物をみるかた也絹地にて極彩色也池田播磨か奥かたよりくれたりと也夫へおさとに讃を乞けれはおさとか

たをやめの花の姿も世のちりとはらふこゝろに月やすむらむ

とよみたり拾得か見居るかけ物に月あれはかくやよみけむ也大に禪氣あり眞如の月をよめるかことしかけ物にかくとて手習にたにさくをかくをみれは雨中見花といふ題にて

雨風のめくみに咲てあめかせの又うつろはす花よ世中

とあり予いふこの歌我うた也女の歌には過たりしかしわかこゝろ附しことくの意にてよみたらぬには汝のうたとすへし左もなけれは女不相應のうた故に取上てわか詠草のうちへ加へんといひしにされは候家内の下女はしたを遣ふ其外のことをもよくためしみるによきことにわるきは必あ

り下女之内に眞木の儉約をするもめしたきなれは眞木を夥遣ふもめしたき下女也この類のこと甚多しよつてかくはよみ候ひぬ予常にいふに万物一理也ときゝき又家を治むるは國を治むるの小なるもの也といふことも予かつねにいふにきゝきされは私は下女の薪のことよりおもひ附候へ共おしひろめて御用ひあらむは殿さまの御事故いかにもなるへしと答たりしかる上は其うた汝かうたとせよとて大に笑ひし也○夕かた九日附之江戸狀來る不被爲替母上は御出來物にて水氣御とれ被成たるとの御事恐悦このたひの御狀は御書躰もよろし夫婦の悦此事に御座候末に御いましめの御事奉畏候ゟ難有前に記せしことゝ同し武王の御說と符合するとは不思義なり御沙汰之次第厚く守り可申候○新右衞門より御別帋光ること左もあるへし○進上之短刀入御氣候と之事大慶に候○廿九日高田の下屋敷へ御出と之事右之中山のやしきは先年も小笠原の世話にておさとの參りき御日記をよみておさとゝいひ出して江戸をおもふこと頻也○異流の御吟味

物之事に付御物語あり文政九年頃堀大和守殿懸りに四方院河内と申候尼海靜と申一件あり其女はあやしきものなりけれと異法とは不存日蓮宗とのみおもひ居たり其取上物之内に立派成づし有之其内に本尊めきたるものに小兒の像の如生（イケル）に繼上下を着せあり不思義におもひしかある諸侯の小兒の死せしを產母のかなしみて造り法華經をきかせくれよとの事にゟ納しとの事故夫かとおもひ置たり其後みつぎ一件之吟味書に菊兒童の姿に本尊をつくり置しとの事あるによりておもひ合すれは海靜は所生たしかならさる京都のものにゟト筮なとするより更に色情のことなきさま等みつぎか類とおもひしか其後山水と名を變御搆之地ゟ立入中務大輔殿懸りにゟ吟味之節右之人形同樣之もの又出て殊に數品ありけれは疑を附ていろ〳〵吟味せしかとも不分遠嶋に成しか程なく島拔をして行衞しれすに成たり夫等は疑敷はかりなりき其節諸書物をしらへみし也キリシ丹のこと白石か西洋紀聞の上其外ロウマ人欵狀記にみえ紀聞之方には法の大要

張銘ニ横乾坤シチ渠ノ西父母ト稱シ又邪ハ宗テ母リテ天ニトアミリレ日月ハチアリテ主クテ天ナレハ地ヒネ月ヲ合カ日セリル父トヲ云母シテ西天シチ母ノ人ノ疑ヘシトスチ釋迦ノ聖人チ西法云ノ云フ
ルイ也

をあけてあり當時蘭學被行其内には必其書なしとはいふへからさる歟也西洋國々みな其宗門也被遣候字之内西天人といふはかの宗のサンタルマヤといふものをも可申歟サンタルマヤといふものは女にて磔となりしキリシタンの本尊也今竹はしの御くら宗門奉行預り之内にいろ〳〵の像あると聞也右はヨハンといふものゝ所持にてロウマ人欵狀之内に出し圖なるへし增訂采覽異言の内イタリヤ國の内にキリシタンの事あるへし天母と漢譯シテ北池偶談といふものを引てありしと覺たり調役中のこと故に忘れたり御たゝしあるへし西天人を母といふこと天母にも似たりさて又日月有天の作り字を父といふこと可疑日月は陰陽也陰陽有天にては父母のことならすや乾坤に日月の象あるかことし有は在を誤りしなるへし右をよむときは日月天に在西天の人といふにて近くいへは佛法のことなれ共佛法ならは隱すへきわけなし可疑事也白石の説にては天帝とは天地をも作れるものありて夫を天帝といふかとありしと覺へし也天文の比わたりしといへは甚怪敷宗門也天文の頃鉄炮を薩州に渡せしもキリシ丹を弘めし黒ふねなりとか聞し也鉄炮のこと薩州の人南浦といふものゝ文集に詳也信長の天主教の本尊を置かとて天主臺を建られし也このこと信長記にありしかと覺へし也聖堂に慶長の寫本信長記あり御覽あるへし寺社方御條目之内に慶長十八年かに京都にありしキリシ丹寺を大久保忠隣の破却のことありしかと覺たりはるさめ日記は其ことをかきし書かと覺へし一冊ものなりうつしは宅になしロウマ人欵狀はたれやらのをかりしか宅に其頃のもの尙ありしかと覺たり半帋二十枚はかりのもの也いかゝなりしや甚不分明也はるさめ抄誰より借てみし書なりしか忘れたり鷹見十郎左衛門なとかもしるへからさる也コノ人にロウマ人のヨハンかことをも聞し也からの書には若般望とか書てヨハンとよむかと覺へし也ヨハンとは姓にて名はいろ〳〵あり日本へ來りしキリシタンはヨハンハッテイスインとかいひしと覺し也西洋學の開くるも又この弊ある也漢末の黄巾明末の白

蓮社トカ云邪法なとありし也當時は恐悦の御世なれはことはなけれとも符水を施し愚民を惑すものはゆるすへからさるもの也○日々儉約等の次第詳に御記し安心いたし申候まつ〳〵用心に必不滅と申候得は御同前に身をつめ隱德の外多事なかるへしわか佐渡奉行被仰付たるとき河村清兵衞來り綿服にて劔術の具あるをみて可惜ネッケ土圭なとあらは佐州ゐは不行して又よきことのあるへきといひ林大内記にわかことを足下はあまり上下つき立派也こゝろせよといふ故にこの龜服の上をいかにいたし可申といひしにされはとよ龜服か則立派過る也易に足ヲカサル車ヲ捨テカチョリスといふことあるにあらすやといひし也みな老莊の意のことくなれ共明哲の身をたもつにこゝろあるへきこと也老子に和光同塵といふことあり奢侈に過しものもとより君子のとるにたらぬこと也されは共和光とてあまりギラ〳〵ト儉素みえす又よの人と塵を同しくして居るといふ所前の大内記の上下立派也とて異見せし所なるへしこの味ひ名人の位にて

われらには必流れ行て人の笑はれくさとなること多かるへしあしくいふ時は奸智よき人には温厚とも可申歟其極は仲尼の甚敷をせすと孟子のいひしにてとゝまる也林大内記のいふ所は並々の先生にはいはれぬ口上也この人の純儒ならぬも卓越せし豪傑たるもこれにてしるへしわか前のこと出來すして今以如此なる故にこのことをも記すなり衣類其外の驕りは今日にも直さるれともこゝろの驕かちかたきこと也○今朝馬にのり刀槍なとをなしておもふはよくこゝろをせねは藝は勿論行跡のよきなとゝいふことみな驕滿にて身を亡すの種となるへし可恐々々と自誡たり昔予信州へ參りし時御嶽山へ年々登る山伏天狗に投られ這松のあるところへ投落されて數日を經人に助られしことあり夫をきくに山伏最上の行者にて清潔われほとのことはあらしとたのみたる故にたのみたる所けかれと成て山神のたゝりありしと其頃いひき何事ももはやこれて十分とおもふは不出來の根さしとなる〳〵へし

○廿二日　くもり夜雨　けふは父上七十の御賀の御酒奉る御隠居所ゟ予おさと市三郎着替して參る幸に大鯛大ひらめあり夫等にゟ數種のものを造りて奉る夜に入下女共へも御酒被下たり父上御悦ひにて頻に御舞あり き今頃過酒ゟ上必御瘠中のいたむ也先達ゟ民藏方ゟ御招請申上候節御いたみ強く起りし時われもみまいらせしに跡にて三日ほともみたるいたみを御覺ありけるか其後絶ゟ過酒被遊候ゟも御瘠の御いたみなしと也家來共は中小性迄へ表ゟ三ゟ間にゟ御酒被下あり吸物一ッ肴二種也是等ゟも鯛一尾を遣したり用人給人中小性より御いはひの御酒を奉るけふ酒を用ひて例の通書をかきたるに更に酒なきよりは出來かたよろしこれは考みるに清書こゝろを更にはなれわかものになりてたのしみにする故かと考附たり少しく深山に寶あり寶にこゝろなきものこれを得たりといふ意かもしるへからさる也けふのかけものは先達ゟ父上の七十の御賀にとはし書してとく歸り春日の山の月はなを武藏の友と千よかたりませ

と唐帋半裁へしるし奉りしを御表具ありし也○醉後の書に一益あり書にのそむ故に眠氣なし書に對する故にこゝろ亂れす酒の惡物にかゝる益ありとは上戸の昔はしらすして大に損をせし也大坂より唐帋を調置てかく也ならにては小かひは惡帋にて六分大坂は上帋にゟ三分也よつて六七枚はよからむとおもひ書けるかおさといふ

樽酒は德たとぬかす大たわけ

といふ川柳に近しのこりの帋を御覽あれといはれて驚みれは半本買し唐帋殘十枚になりし也今夜もい.また日のあるうちより書かゝり四過まて反古のうらなとへ大字をかきてたのしみたり

○廿三日　晴　明日池ゟ内村へ青山伴右衞門其外ゟもの共着ゟ由屆來るならは道筋にならすよつて來らすはしめは定めてなら通行のことゝおもひて其したくする積なりしか先觸來らぬ故に尋みしに右ゟ通也

○廿四日　晴　なら人の吟味書二百年濟來りしことゝ不分明ゟ義不文段

は直せとも格に拘る義は其まゝ也けふも小鬢にすり疵受平癒いたし屈伸不自由ゑ義無之旨ゑ吟味書有之目鼻は動くなれ共小鬢なとの動きて屈伸するといふことけふはしめてしりぬ其余右にゑ御察しあるへし

○廿五日　晴　誕生日也御両所様に御酒奉る○池ゑ内村は八里余ありてならより一向に音信なし○けふ与風いろ〳〵おもふに近頃人をうらむといふことは大に減したるかことくみな己か身より起るとおもふかことく乍去金銀のほしき名聞の甚敷は少も減せさるかことし五十は成徳といへは二三年ゑ内に是へ一廉の修行出來ねはならす乍去金銀の欲は少しく減するもしるへからされとも名聞の欲は十年にては中々無覺束とて歎息せしにおさといふ豪傑にても名聞ありやといふ故に賢人にてもあるへしなしといふは多僞か身の穿鑿の行屆かぬ人なるへし孔門の弟子にてもいかゝあるへしや近く日本にては大久保忠隣か井伊家に寃罪にゑ御預に成ある時掃部頭直孝の朝臣と對話の時に其寃罪を深くをしみていろ〳〵被申けれはそこもとは實に寃罪とおもはるゝやと問れしに然りと答られけれはそこもとほとの人か寃罪とおもひ給ふほとならは決ゑ申譯等ゑ義堅く御斷におよふ也いつまても罪人にゑくち果たし今　東照宮のかくれさせ給ひし後にいたり其こと明にならむには少の御瑕もあらせられぬ　御方に瑕の出來るわけ故に堅く斷と申せしによつて掃部頭殿も頻に落涙せられしと也この人なと名聞少もなく仁の盡義のつくるとも可申歟也乍去畢竟　東照宮の御君德遠く堯舜湯武と巍々たる高きを爭ふ給ふ御事にて今にいたりわれらことさも御德をおもへは涙を落すといふ　御方にゑましませは御側に被召遣ける御人々は御恩のあまりかゝる大忠臣も出來しなるへし忠隣のことくならすは眞實の名聞なき人とは申かたき事なるへきかなといひて忠臣の譚に例なから涙を流したりなら町にゑ博奕のあまりに被行ける故に三十人余入牢申付たり

○廿六日　くもり　髪をいふ家來不快に付おさとかはりてゆひたり久々

故に不似合也といふ也いかなれは髪結は人々に似合やらむといふ故に与風おもふは髪結は其人の以前の風に似せていふ故なるへし遠國ゑ奉行又しかり先其御役所ゑ行其土地ゑ風俗をみて少しも私意を不加其風俗によりて手を下し仕來りを守り居るうちに其善悪のわかる也其よき風を長し其あしき弊をあらたむるにあらされは土地によく似合たる御政事は出來ぬ也しかるを其土地へ來りこれも江戸風あれも江戸風と仕直したらは前の下手の結かみなるへしとて笑ひし也ならの奉行所なと珍事あれ共害にならぬは少も搆はぬ也元來中坊駿河守先祖は南都の衆徒にて筒井なとの類なれは取計向に其仕來のおかしき事もあれ共畢竟土地ゑ生れ故に土地に應したる御政事をするとの思召にて國初に奉行になされたるへし其御趣意に背きては參らぬ也夫故におかしき事も必死ゑ覺悟にてこらへ居たるうち少々みなれたり鹿も犬のことく魚類は新鮮にあらぬものとおもふことくになりたりこゝにて髪結の結ふことく自然によきかたへ引附たきもの也きのふはあまり博奕の甚しさに三十七人はかりの入牢申付たり明日は落着なるへしきのふは旅人の名所の案内してくらすもの七十人余あり夫らかたとへは途中にゐ宮方の築地わきへ田舎ものゝ小便するをみつけておどし錢をとり強ゐ案内者になりて錢を貪る種々の悪法あるにより て其頭取を呼出しゐ一通り糾ゑ上白洲ゐ廻し彼らか書付にては案内者の風俗はよけれとも大坂にてならの案内者といふものは不宜由を板行にいたし候由等申立あるによりて夫までにわか支配所を悪敷申さするといふはいか成ことにやわか内々糾ゑ趣なくは大坂の板本よりは大にあらし以後は無理はせぬかといひしに深く恐れ入たりよつて頭取はゆるし田舎ものより無理成錢をとりたるもの三人は入牢申付たりこれにてわか勤役中は博奕止あしき案内はせぬなるへしならに名高き博奕打盗賊の申口より出て追々に三人はかり遠島になりし故に此ほとは悪黨共大坂其外ゐ逃行しも多ある也

○廿七日　御用日　雨ふるなら振の侍詩文章筆算共に出來學問文章の才は十八歳にはよほとよしししかし何分所々の氣受よからす其上に困窮に迫りたる心得違ゑ風聞あり尤酒呑にて慰にかくせしもしるへからすといふ位のこと也され共捨置れすいとま遣すは可惜ものに付いろ〳〵してみれ共平日の書物人のいはれくさの一端と成れり受人はたしか成ものに付夫ゟ申聞たるに母の聞て大に怒り汝の父は儒を行として大和の國にては人にもしられたるもの也儒の間に弓を好み日々に三千の卷わらを射一たひは身を立る積なりしか汝か七才の時に病死したり我も再緣か國へ行かとこゝろ迷しか其ころより汝か儒者にもなるへしかの才みゆる故に細き女の手業もて生育したりしかるに汝其心ありては我生て更に詮なし汝を殺して死するまて也とて夫の脇差を取出して突殺さむとせし故に脇に居たる請人等あはてゝ振留段々にわひて以來主人より沙汰受ることあらむには卽坐に切腹せよといふ書付をとりてこの度はゆるせしと也おさとなと其

ことを聞てあはれ元は儒者の妻なりしもしらるゝ也孟母のことしなといひ用人等も氣の折てこのたひのことは物の失しなといふことにもあらす一時の坐興のこうじたるなれはとて母のかたへ遣し數日押込てゆるす積にしたりこれにてもおもふは子はいぢめ殺せ馬は乘り殺せと　行道院樣の常に仰られし御尤なること也このたひのことも此母なからむには必いとまを遣すことになるへしこれらに見合ても子は嚴にすへきこと也予彰常沒して夫にこりてもしや市三郎にあまきことあらむには　行道院樣の御遺敎に奉背とおもひけれはます〳〵こゝろして嚴にする也市三郎元來愚にして且弱し近來丈夫にはなりしといへ共武術なとおもひの外に息わるし腹の動氣强くけしからす筋はる故にこれも又わか涙のたねになることあるかやと劔術遣ひ遣しくるしむ時に彰常のことを密におもひ出すことしは〳〵あれ共其度々に死生は命也子の死ぬることを少もいとひては天より授給ひしより遙にあしくするとおもひて少しもゆるさす其ことお

もふことに一段と其時は心を用ひて嚴敷すれ共所謂むくろじを磨くにて一向に事ならす憤のみなれ共事の成とならさるは天授也中道にして棄へからすとやはり嚴敷責みれとも中々少も出來へきとはおもはぬ也夫等に付ゐも前の家來の母を不便におもふ也少女壹人と後家と侍の祖母とにて糸より細きけふりを立居しに祖母は失て今は侍の妹と二人にてかせとてならさらしになる麻をとり或は墨の彩色なとしてくらし居るなれ共夫の時の書物刀劔の類は少しも不失して侍の成生の後可讓とて貯居也この頃もわかもしや入用にはあらすやとて手箪笥をもち來しか青貝の立派成古代のものにてわれらか坐右に置へきにはあらぬ結構なるものなれは返したり三兩はかりのかはりにしはし人に預けあるといふ也其余右にてしるへし○けふ東大寺ゑ末派聖寺といふものゝ事に付書面を出すこれは高野山の聖寺と違ひ所々に散在して除地なと持居也世上にゐは烟亡と唱へ非人のことくおもふもの也寛政七卯年八月二日寺社奉行松平右京大夫ゐ差出候書付ゑ寫東大寺ゐ出す小出信濃守殿御領分丹波國船井郡上河内村ゑ内隱坊又十郎ゐ當院を當寺と申立候旨俗躰にゐ本寺有之段御不審に被爲思召御尋ゑ趣承知仕左に申上候右隱坊ゑ義は元來聖と相唱候ゐ當寺大勸進職始祖行基菩薩發願にゐ　聖武天皇蒙　勅裁諸國に三昧を建聖を取立被置候以來其末流相分相續仕候ゐ既に於當國は南都御奉行所ゐ聖爲惣代毎歳年頭八朔御禮相勤申候ゐ聖号相立御座候依之拙院には聖と呼來候ゐ五畿内并丹波國聖共等元祖ゑ思德を存從前々拙院を本山と相崇候ゐ毎歳國々ゐ出山仕元祖前ゐ拜禮仕候に付拙院ゐも元祖年忌ゑ節は捻香拜禮等爲致厚憐愍敎戒いたし遣候義に御座候尤往古は惣ゐ出家沙門ゑ身分に御座候處當時にゐは規則取失ひ多分俗躰に相成候然れ共三昧には悉寺号御座候ゐ元祖發願末派由緒ゑ者に相違無御座候云々下略

奈良奉行所にゐは聖は八朔年始奉行所支關へ麻上下に金百疋持參て尤俗躰去也つ寺号にれも八て權兵衛兵衛にあらす

○廿八日　くもり又晴　冷氣也みなわた入也夕かたさほ河の螢を多く家來のもち來れり○人殺ゑ吟味書一昨日より一覽少々入組たり其内道理何

分貫通せぬ所あり手を替再吟味に及ふ輕追放ゑ科書出來候もの無搆ゑ見
込に成卽刻出牢いたす其外いろ〳〵手續ゑ異同わかる予も吟味して素子
細なしとおもひ居りし一件なりしか吟味書になり道理貫通せぬ故に場所
ゑ繪圖其外迄爲書間違等相分りし也吟味は可恐可愼事也

○廿九日　雷雨夕はれ　池に四五寸もあらむとおもふ金魚緋鯉多ありし
に日々に減する也きのふみれはくろきのみにて赤きは一ッ二ッ也けふみ
れは鷹ともいふへきとりまつの梢を二たひはかり翔り忽に下り來り池の
大緋鯉をつかみ去れりみなこの鳥にものせられしなるへしこれ何たかと
かいひしみさことといふものなるへし詩經にいふ雎鳩かと覺へ(マヽ)し也みさこ
といふものゝ磯邊へとり集置魚に潮かゝりて味のつきしをみさこすしと
いふと也大和にみさこ多しさる澤の池のわたりに常に舞ひて魚をつかむ
と也窈窕たる淑女になそらへし鳥なからけしからぬいたつらなるとり也
このみさこのことくならむにはちと女房にはもてぬといひて儒者か來り
し故に大笑せし也○此ほと松茸あり味よしこれ去年出ぬ故に今いつると
みえたり左傳に陳完か諸侯になることをいふに其身にあらすむは其子孫
にあらむといひし也夫と同しことを反していふときは則長者二代なしと
いふ理に自然なる也有ものならは今なくてものちにあり出來過れはとり
返さるゝこと天下一理にして少も動きなし莊子かいふ朝三暮四朝四暮三
つまりはなゝつより外はなきをとりこしたかるそ人こゝろなり(マヽ)われらこ
とき御取立もの日々三復して可恐さて又天道のほとをしるへし

みさこといふ
海の邊ものに
川の洲なにて
居るものに
にあらすと
をもひて
鳩と雎
みさこ
とは別物
疑ひしか
海なきに
居るは國に
多上へ
たかふ
からす

五月朔日　晴　きのふ一乘院宮へ儒者を被召ゑ御はなしに左衞門尉か
博奕打を多人數召とりたるとの事也わか寺にも碁にや將棊にやいたく賭
事好めるもの多人ありて毎度世話をやく也もし此度のうちに宮御家來な
とあらは少も用捨あるへからすちと穿鑿して兩三人は召捕らせたし然ら
は取締の可立也是は坊官なとを以奉行所ゑ申立はならぬ也左衞門とわれ

と懇意ゑわけなとにて遠慮ありては却ゑ望を失ふとわかいひしとわかこの汝への物語を左衞門ゐゑはなしにせよと御意ありしと儒者のかたりし也この御一言にて御家來大に恐れ御取締立へしならの常言に大成ものにて博奕せぬは大佛身からにて博奕せぬは春日大明神其外は大きくても身からにてもみな好めるは博奕也といふにいたる故にあまりゑ事と恐入てこのたひ五十人はかり重敲々のもの出來たり寛政のころより後は博奕の風聞にて呼出せしことなしと也けしからぬ國也享和には同心共よりゆるして法隆寺にて博奕をさせ死罪になりしこともありし也しかし此度にて大に市中ゑもの恐れたるよしなれはわか御役中は博奕少々減すへしこれ少々減するまてにて御政事はたつ也前の大佛かすかのなはしにて土地のことおもふへし勘當願なとに悖義博奕打歩行候段異見いたし候得共不取用と申手段にて奉行所にて聞濟勘當申付しを近頃申付て直させたり御門主位の了簡の役人あらはかく御免のことくにはならぬなるへし滕の文公か三年の喪を爲へしといひしを宗田ゑ魯にても不行といひて不審かりし類のことありてはこまる故につのりてはせす煮たる鍋へ水を一ひさし打し位にて捨置つもり也

○二日　雨　御役所内ゑ劔術少しく衰へむとする躰なりけれは頃日かく唐帋へしるして與力に遣したり

歡看寧樂士風昌日々求閑學劔槍不懈十年能若是五畿雄武在斯鄕

といひしか夫に勵まされしか日々出精也尤市三郎をもかゝさす毎日遣す也

○三日　雨　昨日より冷氣也けふはかしはもち也ならにては例ゑ通この手かしはといふものゝ葉につゝむ也土地にては湯をかけぬ青葉へつゝむ也よつて土地の醫者のくるゝなとは摘立のはのことし

○四日　雨　御用日吟味物五口あり本公事一ッ金公事四ッ也先達ゑ召捕候博奕五拾人ゑもの共いつれも五拾文以下ゑ懸錢故惣敲に成遠國のゆる

やか成かくの如し乍去市中にゐ大に恐れたるよし也これ關東と上方のこ
となる所謂也○一昨日夕かた頻に例ゑ通ねふり附ふさく也よつて少しく
酒を用ゆへしとおもひてはつかにのみ其勢ひにて手習なとして四ッ頃に
寐たり朝拂曉乘馬例ゑ如くなりしかやりのすこきなとは不出來畫ころに
成めつらしく吐たりしはしやすみて按摩なとしたりしに今朝は平日のこ
とし未明より起書見等常のことし昨日は朝用心にあづきの煮たるを食せ
しか夫にあたりめつらしく吐たり用心過て損をせし也
○五日　雨　端午ゑ御禮受ること例のことし雨故に庭へも出ることなら
すうたにてもよまむとおもへり
一盞村醪鬱忽開揮毫醉墨似雄恢卽今初覺逢端午笑共婦兒盡碧罍
こゝにてはのほりみな無紋にて眞白也はしへ羽織の火うちのこときもの
を附て夫へ子もち筋を附る也夫はいろ〳〵のよききれを附る也杭なと彫
ありて立派なることのよし菖蒲は五月朔日にふきて四日にはおろし夫を

縄にして兒らか菖蒲打する也いにしへはよほと夥ことのよし也因に云三
州にも昔このことありしか也空覺なれ共大意は覺居る故にしるす也五月
菖蒲うちの事を　東照宮は至ゐ御幼稚にていまた人の肩くるまに乘らせ
らるゝ頃に　御覽ありけるか小人數の方へ行てみむと　仰られしを負る
かたはよしに遊させと申上けれはいや〳〵小人數のかた必死の勢あり可
勝と　仰られて其方ゐ御廻りありしに果して勝しと也孫子十三篇ゑ内九
地篇等にいひし專の極意は士卒を必死の地にあらしめて自由に其身と働
かすることにありこれ軍學の妙所なるへし其妙所を人のかた車にのり御
歩行被遊うちより御承知被遊しは實に　御神ならすや世の碁うちに十歳
以下にゐ二段三段のものあるにておもへは　御生なからにて九段の名人
の御位夫より絶類の軍旅の御功者とならせられしなるへし予常にいふ御
一生涯御難戰のうちおもひの外にあふなきことを含めるは大坂御陣なる
へしとはこれを反しておもへは也

○六日　くもり　庭の梅の樹のうろより大成蛇繩のことくに成下り居たりよくみれは大トカゲを〆附ている也めつらしきこと故にみな〳〵みる表と奥の間にある木故に貞助なとも來りみて蛇を竹きれにて打けれはトカゲを放してウロの内ゟ蛇は入たりトカゲは過半尾をくひ切られしまゝ石の下ゟ隱れたり其とき家來の子供らかみな來り居て其始末を一々におさとへ注進する也或は障子につらまりなから或は椽の上より大聲をあけるなとみな幼兒のことさもあるへし榮壹人は其度々おさとの前ゟひさまつきて手を附て只今はかやうと其始末を審にしらする也めつらしき兒也

○七日　雨　別當の方の兒出生六十日はかり立し也よき男兒也おさと呼てねかし置しによくすや〳〵と寐る也われおさとゝいふはこの子結構になるか御仕置になるか別當のことき ものになるかしられすみとり子の行末は水のなかれのことし果をおもへはあふなきもの也易の童蒙のことを山水のすかたをもつてときしもかゝる故なるへしわれらか今壹人にゟ結構に成藝術出精することき顔して居るも大笑也みな　行道院樣と母上の御しこみによるもの也この兒をみても　行道院樣の嚴敷被成たりしはありかたきと申しき易に山下に出る泉を以説れしを以も幼年ものは谷川の水の石にあたり岩にくたけ千たひさはらひ行て平坦の地へ行かことく子をも千たひもゝたひ嚴にくたき折曲ねは人にならぬことなるへし別當の兒名は八右衞門と云と也

○八日　くもり　別當之小兒をおさとの居ふとんゟねかしたり別當殊之外悅ひて用人方ゟ禮に來る内のがきめくはほうもの也奥さまの御しとねへ上りてねたりと也奥さまの御しとねは殿さま之外はのほるものあるまし殿さまの御名代する與力衆にゟもなるましとて屋敷中ほこり歩行たると也朝〳〵馬にのるとき別當に汝か子に廐中間になりはくちをうち大酒をのむことを敎ゆるや汝かことく親に不事ことを敎ゆるやいかにといへ

はことの困（外脱カ）る也しかし子の出來てよりよほと別當おとなしくなれり○夕かた四月廿六日附ゝ宅狀來る先以母上樣御機嫌克其外御一同ゝ御無事恐悦ゝ至御座候○母上樣々ゝ御狀土屋も度々參り候由深切ゝ事同人悴弓ゝ上覽殊ゝ外大出來常ゝ拜領物ゝ外せりゝ方にゟ別段御扇子拜領いたし候由今便吹聽申越候さそよろこひと相察候義に御座候これにて少々鬱を散し可申と奉存候子のよろしきは親への孝行に御座候羽倉參り候由同人ゟは墨壹分貳朱はかり遣し候是は同人五條の手代ゟこと傳いたし墨ゝ事申來候間遣し候義に御座候外ならぬ人故にかくいたし申候新右衞門幸三郎なとゝは私は違ひ候故に御座候けしからす今便禮申越候○高橋へ御とまりに御出ゝ由太助殿も無御滯御着と奉存候一度文通仕候ゟ着ゝ御歡に金子三百疋あけ申候幸三郎よく孝行いたし候由何よりの事に御座候同人才子には無之候得共才子に大にまさり候事御座候この頃人の和韵の詩に

莫欲舉兒有才氣。誰知才氣不如癡。君看多少危亡事。才氣爲憂豈可疑。

これは子供をまうけて利口ものにしたしとおもふへからす人しらぬ事なから才氣あるよりは馬鹿のかたまさりたるへしみなさま御覽候へ世の中に多くのことあふなく亡るやう成はみな才氣のなすわさ也疑ふことはあるましとの意に御座候幸三郎は私なとに見合候はゝ遙に大丈夫にゟよき人と兼々感心いたし居候義に御座候よつて前の詩を其證據に記し候義に御座候○おまき宿下りゝ事おさとも申候得共乍去例の氣質其上實母に似たる一概なるところ御座候間よく御勘辨可被下候何分御殿にて一足も動かれぬかた第一に御座候いつ方の女中に候歟一寸宿下りいたし其まゝ出奔いたし候もの有之候と歟と申候樣成はなし以前承候得共忘れ申候○太郎等ゝゆかたきれ拜見仕候外よりゆかた私へくれ候もの有之候みな革染と申候由是は藍染殊ゝ外高直故にかゝることをはしめ候世の商人のこゝろ驚入申候日記に御座候食物ののとへつまり候事其後曾ゟなし御案事被下間敷候毎度なから日記は御そはにて入御覽候心得にゟ其日のこと有のま

ゝにしるし候故却ゟ御案事をかけ候事と恐入候只一度限りにゟ其後かげも無御座候○今相廻し候節日記其外は其少々前に出し候間差上不申候義に御座候入記と相違いたし候は書損に可有御座候日記の日附よく御改候ゟ此次のたよりに御沙汰可被下候○順右衞門方小兒殊ゟ外なる伶俐也去年二月生レにゟ此ほと少々口をきゝ候得共多分のことみな辨別いたし私のまねより宅にゟ兩親の申せしこと或は叱り候ことなとみな〳〵驚候はかりに手まね其外にてミブ狂言のことくにいたし申候○大監物ゟ家來罷出領分寺社の問合ゟ序先代ゟ不快ゟ樣子御はなし申候躰頻に落涙いたし候位ゟ義御こゝろからとは乍申可惜ゟ至大に歎息いたし候義に御座候此御人に執政ゟ論をいたし近頃にては白川少將田沼なと豪傑なるへしと申せしに田沼はなせと被申けれはされはにて候田沼と申候御人寶暦のはしめと天明年間にゟは驕滿の氣よりよからぬ心起り松本かこときものを御用ひあり て今以惡敷ことを田沼時代なとゝ申候得共はしめ　有德院樣ゟ御手許より出身いたし其上近頃循良の聞へある石谷備後守を御用ありしさま以前はよかりしに無相違候執政の可恐は天下のことおもふ通に成候時に有之候よし少々存寄ありて申し其ことをは後日のためと記し置て其頃淺野なとへはみせしこともありしか今更いかにも御氣ゟ毒の御事也御用ひの人次第にゟよくもわるくもなる御人也われなと一旦屢御下問等に預りしこともあれはこのほとの躰いかにも御氣ゟ毒におもへとも公義より御咎中の御かたなれはいかにとも爲へきやうなき也この人わか考にゟは此ほと死に不及して長く煩ひ快ならるへきかとおもふ也いかにや有へき異宗ゟ法義持候ものゝ事先便に記し候白石ゟ西洋紀聞にあるところと宗法ゟ立かた符合せりま す〳〵可疑此ことに付書物入用にゟ禁書なと見合すること もしあらは必表向書面にゟ其筋ゟ御人御承知ゟ上にゟ取扱へし後日存外ゟことありしときこまる也表向なれは御役のこと故氣遣なし早速にいたし候可然候大に案事申候世に長芋のふみぬきと申候こと有之候禁書等の